武田信玄の欲望

雲流れ風安

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武田信玄の欲望

【Ｎコード】
Ｎ３４３４Ｘ

【作者名】
雲流れ風安

【あらすじ】
織田信奈の二次創作。オリ主が武田信玄の下にやってきた。どうなるこの人生?!

決戦！！設楽ヶ原！！

天正三年六月二十一日・長篠は設楽ヶ原（したらがはら）

「やれやれ、致命傷とは行かないが・・・・大敗か。」

両手に長刀を持つ蜘蛛の兜をかぶる青年。名を武田，典厩，信繁と言う。甲斐を中心にする大大名・武田信玄の家族である。しかし、正史の武田信繁は川中島の戦いで戦死している。無論この青年は本物ではない。いや、この世界自体が青年の知る世界ではない。史実では織田・徳川連合軍が武田勝頼率いる甲州軍団を馬防柵を作り三千の鉄砲で撃滅して武田家に致命傷を与える戦いのはずだが、この青年が経験している戦いは織田・徳川連合軍が武田信玄率いる甲州軍団に一万五千の鉄砲と大筒二百をもって包囲戦を行っている。

「オーバーキルってか。」

そしてこの青年もこの世界に生きる人間ではない。本名を三条義信という本来なら平成の世を生きるはずであった。

「殿、いかがいたしますか？」

「決まっているだろう。俺達五千がここで遊ぶためにいるわけじゃない。」

「御意。」

部下に戦準備をさせる。それと同時に戦場から退き太鼓が響き渡る。

「こっちにあわせてくれたのか・・・。そうでないか・・・。どちらか知らないがナイス判断だ。勝千代。」

蜘蛛をかたどった馬印に風林火山の孫氏の黒旗を掲げる。その間にも次々に味方が通り過ぎ武田領に退いていく。そして本隊もさがってくる。

「おお、典厩殿！！」

「修理殿か。皆は無事か？」

土や煙で煤や泥だらけになりながら話しかけてくるのは内藤修理亮昌豊。武田四天王の一人で抜群の働きをするのに勧状や褒美がなか

なかもらえない地味な将である。
「は、はい。お館様以下、主だった武将は無事ですが塀のほうは壊滅に近い模様です。負傷者としては山県殿と真田殿が重傷ですが命には問題はありません。」
「よし、このまま高遠に向かえ。数刻すれば高坂弾正と獅子殿が援軍に来るはず。」
獅子とは相模の獅子・北条氏康のことである。武田とは今現在では問題が無く同盟関係も良好である。
「し、しかし・・・お館様が・・・。」
「おおよそのことはわかる。あとはまかせるといい。勝千代のわがままにはなれているからなぁ。」
ニンマリと重々しい雰囲気を壊すように笑う典厩。内藤も安心したように部下をまとめに向かう。
「やれやれ。」
頭を二度三度掻き、もめているであろう本陣に向かう。

「あ～・・・。飛んでいるな～。」
本陣に着くと次々と味方の将兵が陣のそとに飛んでいく。信玄に投げられているのだろう。
「失礼いたし申す。典厩信繁まかりこしました。」
と、いっても聞いている人間はおらず中では予想通り
「ええい！！は～な～せ～！！」
「「「「お館様！！落ち着き・・・ぎゃぴ～！！」」」」
暴れる信玄をなだめる将兵がいる。しかし力及ばず空へ昇ってしばらくして落ちる。
「おや・・・あ～・・・かたさま・・・」
四天王最強の馬場美濃守信房が羽交い絞めにしていながらのこの惨状とはさすが武田信玄というべきか。
「信房、無事か～。」

「てん・・きゅ～・・・。」
「もうちっと早くしゃべれないのか？」
「う・・・ん・・・・。」
「分かった分かった・・・。」
手を振りあきらめの意思を伝える典厩。言っていることは大体分かる。
「まぁまぁ、落ち着けお館様。」
「あ〝あ〝！！・・・て、信繁か。ちょっとまってろ！！」
「いい、いい。大体分かる。」
その言葉を聞くとニンマリと豪快かつ美しい笑顔を浮かべる信玄。
「おお！！それなら話は早い！！殿は私に任せてい――「――却下。」なんだと！！」
落ち着いたのもひと段落したのかまた信房を振り回し暴れ始める信玄。さすがに信房も目を回してきた。
「一番強い奴が殿を務めるのが当たり前だろう！！」
「姉上。しかしながら総大将が殿などきいたことがりません。」
瓜二つの双子の妹・武田，逍遥軒，信廉が諫めるが信玄は
「ここにいるだろう。それに砥石崩れの時もあたしが殿をしただろう！！」
「それでも姉上は甲斐武田家の総領主です。もしものことがあれば我々は空中分解します。」
もっともな意見を言う逍遥軒だがそんなことは聞かない信玄。らしくも無く頭に血が上っているようだ。
「だったら誰が殿やるんだ！！」
「俺がやる。第一なぁ、勝千代。お前より俺のほうが強いだろうが。」
コツンと頭を叩く典厩。
「それにな。俺の手勢五千は無傷の上やる気もある。最後に追手の織田軍の相良は俺の後輩だ。殺されることは無いだろう。な。」
しかし信玄は反対する。

「い、いや。お前は客分ってあつかいだし、いまやってもいればあたしのほうが強いし、それに・・・えっと・・・それに・・・」
「はいはい、言い訳はいいだろう?」
「そ、そんなことは無い!!それにあたしの一番大事なものを!!」
「勝千代・・・。お前は勘助と弟の信繁を裏切るつもりか?」
「そ、そんなことはない!!でも・・・」
「子供みたいなことを言わない、言わない。約束は守るんだろう?さっさと行った行った。」
クイっとあごを動かすと向こうに砂埃が上がる。織田の追手だ。金の千成瓢箪の馬印だ。
「な。相良だろう?だったら俺に任しておけばいいの。わかった。」
それでも食い下がる信玄。
「それでも!!」
「でも。も、かも。も無い。必ず躑躅ヶ崎に戻るから待ってなって。」
「でもでも・・・うぐっ。」
躊躇の無い手刀を首筋に入れる。そして唇に軽く口付けをして逍遥軒に
「あとは頼む。戻れなかったら勝頼にまかしてあるから、な。」
「いいのですか?姉上は典厩殿・・・いえ、義兄上が帰ってこなかったら自我を失いかねません。」
「だいじょうぶ!!そんなに弱い頭首かい・・・。」
「かならず戻ってきてくださいよ。義兄上。」
「はっはっは。お兄さんに任せないってね、行った!!行った!!」
はっはっはと笑い続けながらグイグイと陣からみんなを追い出す典厩。皆を追い出したあとに味方を陣中に集める。
「さて、皆々。貧乏くじを引かしてしまったな。」
「いえいえ、そんなことはありません。」
「そうです。お館様と御子を守りきったとなれば御家や後世に名が残りましょう!!」

部下達は覚悟を決めているようだ。ここで何か言うのは野暮というものだ。

「うっし!!なら・・暴れるだけ暴れたら逃げますか!!」

「「「「「おおおう!!」」」」」

部下達は笑いながら武器を構え敵を迎え撃つ体制に入る。正面だけで敵は少なくみても二倍。

「さぁ!!行きますか!!!」

騎兵を駆り敵陣に突撃する典厩隊五千。

（やれやれ、まぁ生きては帰れないだろうが・・・がんばりますか!!!!）

典厩の敵との衝突までのわずかな時間、いままであったことが頭の中に駆け巡った。

タイムスリップ！！変な戦国時代へ！！（前書き）

基本的に主人公は強いですが作戦立案能力とか中途半端です。

タイムスリップ!!変な戦国時代へ!!

「よいっしょ～っと!!」
道のない山々を後ろに大きな、とても大きなリュックサックを背負った坊主の黒衣の青年。名を三条　義信という。なぜこのような場所にいるかといえば家庭の都合としか言いようがない。
「次は甲州流の道場か・・。やっと山梨か。ながかったな。」
ズシズシといった足音で山を走破していく義信。約一年をかけて九州は鹿児島から東京を目指して身内の各道場を倒していく三条家の代々の修行を行い、そろそろ約一年をかけてやっとこさ山梨県に到着した。

「あの親父・・・帰ったら覚えていろよ!!」
今思い出しても頭にくる。高校三年になる前日に目が覚めてみたら鹿児島の分家にいた。分家のおじさんに手紙を渡され読むと、

「全部の分家を足して山道を越えて帰って来い。

ｂｙ親父」

とだけ書かれたていただけだった。家に電話したが帰ってこいの一点張りだった。自分の悪い癖とはわかっていながら意地になりこれまでやってきたが次が終われば親父をぶちのめせると喜ぶ義信だったが気を抜いたのが悪かった。

スルッ!!

と、足下がすべりすごい勢いで山肌を落下していく。そしてそのまま谷を流れる急流に
「ダ～イブ!!じゃねぇ!!たすけ・・おぶぅ!!がぼぅ!」
叫ぶ義信だったが道から外れている上に深い谷底で叫ぶ声など聞こえはしない。
「ぐぼぼぼぼぼ・・・・・・」

そのまま沈んでいく義信。そしてそのまま意識を失った。

「姉上・・・。あの、父上も本意で言ったわけでは・・・」
武田家次女・孫六は悲しむ姉・勝千代を慰めようとするが言葉がでない。
「いいのよ。父上はあたしに対してあまりいい感情は持っていない。わかっている。次郎が生きていればよかったのよ。」
勝千代は歯をかみ締め感情を押し殺す。今日、たった今しがた武田家長男・武田次郎信繁の葬儀が終わった。しかし、その葬儀の終了後すぐに勝千代と孫六の父であり武田家頭首の武田陸奥守信虎がこともあろうに勝千代に対して、
「これでよかったであろうが勝千代よ!!これで邪魔者が消え、貴様が次の頭首となる算段が上がったのだからな!!」
と言い放ったのである。このとき家内にはこの突然死を勝千代による毒殺との噂があったのだ。それを真に受け信虎はそう言ったのだ。そして家臣の大半がそれを信じ勝千代を責め立て陰口を叩いた。
「姉上・・・。爺隊が心配いたします。そろそろ恵林寺に・・・」
「いや、いい。しばらくここにいると爺達に申しておけ。」
一言勝千代に言おうとする孫六だが、それを見越して手で制す勝千代。
「分かりました。姉上。」
頭を下げ寺に戻っていく孫六。寺に入るのを確認すると同時にドン!!と地面を踏み締める勝千代。周りにある木々が揺れて大量の葉を散らす。
「次郎。お前の好きだった紅葉の代わりだ。色がまだ青くてすまないがな。お前が生きていれば、姉上力ずくはいけません。というの

だがな。」
墓に手を当てて泣き声をあげずに涙だけを流す勝千代。あしたからは勝千代ではなく晴信として公式の場に出なければならない。そしてこの陰口が消えるまで耐えなければならない。
「・・・・・・。」
一通り思い出に浸り気にしないように使用とするがしようとするほど涙が止まらない。
「誰だ!!」
チャプチャプと水辺から物音がしてそちらを振り向く勝千代。そこには体中に擦り傷を負った自分より一、二歳年上の男性がいた。警戒しながら近づく勝千代。なにせ名門で甲斐国主を務める武田家の子供である自分を暗殺しようとする人間はたくさんいる。もしかしたら父上が放った資格かもしれない。
「だ、だいじょうぶか?」
足先でつつくとうめき声が返ってくるだけで何の反応も示さない。
「お、おい!!だいじょうぶか?」
次はしゃがみこみ手でゆするが反応はない。体を返そうとするが背嚢が邪魔で返すことができない。小刀を使い背嚢の掛け部を切り、体を返すと枝が数本腹と肩に刺さって出血していた。あせった勝千代は
「おい!!誰かあるか!!誰か!!」
と大声で近くに誰かいないか声をかける。するとすぐに初老の男性が一人やってきた。勝千代はその顔を見て安心する。彼女の御守役の一人だからだ。
「姫様。なにかありましたかな。」
「よくきた、高白斎。これをみよ。」
駒井高白斎、武田信虎の軍師を勤める名臣で勝千代の味方でもある彼は傷の状態を見るとすぐさま小物を呼ぶ。
「高白斎様、お呼びで。」
「すぐさま徳本先生を呼ぶのだ。至急じゃ!!」

「御意に・・。では・・。」
小走りでかけていく小物を見送り高白斎は
「姫様。この者はすぐさま、この爺の屋敷に運びまする。姫様はこちらで板垣殿と甘利殿とともにお屋敷に帰られませ。」
「いやだ。」
間髪いれずに断る勝千代に唖然とする高白斎。
「し、しかし、姫様にこのような者の心配をなされては・・・・」
「いやだ。あたしが見つけて助けようとしたのだ。最後まで責任を持つ。」
「そのお覚悟は立派かと存じますが、しかしながら・・・」
「そのものを運ぶのはあたしがやる。よこせ。」
高白斎が手に持っていた男を着物を地や泥や水で汚れようと背中に背負う勝千代。それをみて大声を上げる高白斎。そんなのを気にせず高白斎の家に向かおうとする勝千代。
「お、お待ちください。姫様!!」
それをあたふたしながら追っておく高白斎。

タイムスリップ！！変な戦国時代へ！！（後書き）

少し短いかもしれない。かんばって書いていきましょう。

貞操の危機！！・・そして大立ち回り（前書き）

現在オリジナル小説休止中の作者です。指導が終わり次第復帰します。

貞操の危機！！・・そして大立ち回り

「む、むう。」
傷が痛むのかうめき声を上げる男。それを見て勝千代は布で額についた汗をふき取る。血まみれ泥まみれだが気にしない。一心不乱で看病を続ける。
「徳本先生、患者はこちらです。」
「そんなに急かさなくてもいいじゃないか。」
守役の駒井高白斎がふすまを開けて大柄の先生を連れてくる。彼は関東一円にその名を響かせる名医、名前を永田徳本という。
「うほっ！」
「先生？」
「いや、なんでもない。」
手を引き患者の側に徳本先生を連れて行く高白斎。早速診療を開始する徳本だが
「鍛え上げられたこの背中・・・・・。そして、このそそるような足。なんていい男じゃないか・・・。」
男好きという困った一面がある。
「せ、先生？彼の者の傷は足や背中ではなく腹と肩なのですが・・・。」
恍惚として上気した顔をしている徳本に疑問の声をかける高白斎。
勝千代は水を取りに行っているため現在は離席中。
「なにを言っているだい。これは触診でれっきとした診療だよ。」
と、言いつつも男の腿や首筋を撫でまくる。そのたびにうめき声を上げて顔色を悪くする男と興奮している徳本。
「このムチムチしたケツ・・・。たまらない！！」
「せ、先生、やはり診療には見えないのでございますが・・・・。」
男の尻に手を伸ばそうとした徳本を諫めようとしている高白斎だがそんな事は気にせず手のひらが尻に・・・

「あたしの部屋で怪我人に!!なにするか～～!!!」
「おほぅ!!」
勝千代が水を満杯に入れた木タライを投げつける。徳本は叫び声を上げひっくり返る。そして水を浴びてびしょぬれになる男と徳本。

「まぁ・・・傷のほうは軽いものだ一週間もあれば傷はふさがるよ。」
頭に大きなたんこぶを三つ作った徳本がまじめな顔をして勝千代に告げる。たんこぶの原因は木タライと診察の途中で盛ったため拳骨が二発だ。
「で、いつ目覚める?」
先ほどまでおとなしい格好をしていた勝千代も現在はもしものために備えて胡坐で待機している。
「そんなに身を構えなさんな。まぁ、遅くても二日ほどは見ておいてくれ。早ければ今日の夜にでも目が覚めるだろう。」
「本当だろうな。」
「俺はいい男のことについてはうそはつかないさ。診療代金はいつもどおり十八文いただこう。」
高白斎から十八文もらうと薬を渡して屋敷から去っていく徳本。男の貞操は守られた。
「姫様。あとは爺に任せて服のほうをお召し返り下さいませ。」
パンパンと手を叩いて女中を呼ぶ高白斎。しかし勝千代は
「いや、この男が目覚めるまであたしはここで看病している。」
「し、しかし姫様。・・・わかりました。」
この姫がわがままを突き通すことをよく知っているため諫めることをやめる高白斎。変わりに
「お聞きしてもよろしいでしょうか?」
「なんだい。」
「なぜこの男にそのようなまで世話をいたします?」

理由を聞く高白斎。返ってきた言葉は
「次郎がな、次郎が生きていたならこういった流人坊主の男でも縁といって世話をしただろうと思ってな。」
すこし遠く寂しい目をして勝千代が話す。
「分かりました。しかし姫様、護衛として御側衆を二名おいておきまする。これだけは了承いただきますぞ。」
「わかった。勝手にせよ。」
勝千代の言葉に、では。と、返し部屋を出る高白斎。外に出ると同時に女中に護衛をつれてくるように命じている。
「やれやれ。過保護だな。この甲斐では私は一番強いというのに。」
と、言いつつ心配してくれる者が少ない勝千代にとってはその心遣いが嬉しかった。

そのまま夜は更けて月もない深夜になる。
「くっ、うっ～～～。」
鋭い痛みを感じ目を覚ます義信。周りを見渡すと真っ暗で何も見えないが周りに人の気配もない。体を確かめると傷の手当てがしてあり服も綺麗に換えてある。誰かが看病していたのだろうか。そう思いつつ尿意を覚えてゆっくり立ち上がる。腹に鋭い痛みが走るが我慢できないほどではない。歯を食いしばりつつ壁に手をつきながらヒョコヒョコと人を探す。
「ふぅ・・・ふぅ・・・。」
浅い呼吸をしながら大きな屋敷に驚きつつ歩き回り厠にたどり着く。
（失礼だが使わせてもらうか。）
と、さっさと用を済まして厠を出て家人探しを続けようとすると
「む、何者だ?家中では見ぬな?」
大柄の老人とであったため挨拶とお礼を言おうとするが
「うう・・・うう・・おおおお。」

と舌が回らない上に声が出ない。怪訝な顔をする老人に敵意がないと手を上げようとするがその行動が飛び掛ろうとするように見えたのか。

「おのれ!!曲者か!!」

腰に在った脇差を抜き放ち、お決まりの

「出会え!!おのおの方!!出会え!!出会え!!」

とセリフを言い放った。するとどこからかともなく何人もの侍が出てくる。

「どうしかましたか?ご家老殿!!」

「曲者じゃ!!姫様の命を狙おうとしておるに違いない!!斬って捨てい!!」

その言葉に一斉に刀を引き抜く侍たち

「むがももが!!」

手を振り誤解を解こうとするが侍どもは気にせず切りかかってくる。

「でえええええ!!」

「きえややあああああ!!」

ヒュンヒュンと風を切る音が耳元に届く。一生懸命よける義信。

「ええい!!やるな!!」

「あ!!逃げたぞ!!増援を呼ぶのじゃ!!甘利殿にも伝えぃ!!」

「追え!!追え!!」

腹や肩の痛みを感じさせないほどの勢いでふすまを開けて逃げ出す義信。後ろからはふすまなど気にせずに次々になだれ込む侍たち。

(何かないか?何かないか?)

ピンチの時の青いタヌキロボットのように一生懸命逃げながら周りを見渡す義信。すこしでも動きが鈍ったら刀でズンバラリンだ。

「ええい!!逃げ足の速い!!」

「槍隊がそろそろ到着いたします!!」

などと後ろから相変わらず物騒なことが聞こえる。次のふすまを開ける義信。するとそこには刀の大小が置いてあった。思わず飛びつき奪う。腰に刀を指し込みさらに次のふすまを開けて外にでる。

「もももあああもあ！！」
後ろ振り向いて手を振ってもう一度敵意のないことを示そうとする殺気立った侍たちにはまったく意味がない。
「観念したか！！」
「姫様に手を出そうとしたものを許すわけにはいかぬ！！」
まったく聞こうとしない侍たちにさすがに勘袋の緒が切れた義信は刀の大刀を引き抜き左八双に構える。
「やはり刺客か！！」
「その首貰い受ける！！きえええええええ！！」
切りかかる侍二人に対して左八双から左半身を前に出すように脇構えにゆっくり構えなおす。そして逆袈裟にしたから一撃を一人目に、そして上がりきった刀を振りぬくように構えなおし右足を前に出し踏み込みながら二人目を打ち倒す。
「もあっももももあ。」
安心しろ。骨折程度だ。と言いたかったが言葉が出ないため途中で言うのをやめた。それを挑発と受け取ったのか次々に更に殺気立つ侍たち。
「おお！！」
「着てくださったか！！」
歓声が上がり侍たちが次々に道を開けていく。そして眠そうな長身の女性と口元が愛らしいとても小柄ば女性が出てきた。
「どこの刺客は知りませんが言葉もしゃべれぬ者を送り込むとはよほどの念の入れようですね。さすがは勇猛で名を鳴らした甲州武士とでも言いますか・・。それほど要人が恐ろしかったのでしょうか？」
「か～・・・も～・・・・・ね～・・・。」
「これでは依頼主が誰か分かりませんね。なら斬り捨ててあげるのが情けといえるでしょう。飯富源四郎昌景、参ります！！」
「教来～・・・石～・・・・民部～・・・・景政～。いく～・・・。」
二人が同時に攻めかかる。義信は青眼に構えなおし、すぐさま下段

に直す。そして槍と大太刀の連続攻撃をいなし始める。
「なかなか・・・やりますね!!こちらも本気で参ります!!景政、続きなさい!!」
「お～・・・・お～・・」
さらに速度と威力が上がり義信が持つ刀が情けない音を上げて折れる。すぐさま脇差を抜き防ぎはじめるがリーチと重さ、速度にすべてで負ける義信はどんどん後退して土壁までおいつめられる。
「もうあとは有りませぬ!!覚悟!!」
「や～・・」
ふたつの武器が迫る中で義信は脇差を昌景に投げつける。とっさに払った昌景を無視して鞘を引き抜き景政に向かって突っ込む。そして大太刀を真剣白刃取り。
「お・・・お～・・・。」
眠そうな目を一杯に開いて驚愕をあらわす景政。そして一歩踏み込み加減無しの拳を鳩尾に入れる。そして崩れかけた体に対して首筋に手刀を一撃。意識を刈り取る。そして手にあった大太刀を奪い取り装備する。
「な!!景政が!!」
すこし怯みながらも体全体の力と重さを入れて槍を振りぬく昌景。防ぐが思い切り衝撃を受けてしまい肩と腹の傷が開き出血が増える。
「怪我をしながらもその動きとは感服します!!ですがこれで終わりです!!」
槍を左手で支えながら右手で刀を引き抜き首を刎ねようとする。
「がぁあああああ!!!!!」
出血などお構い無しで義信は大太刀をやりもろとも吹き飛ばす。恐ろしい馬鹿力だ。それでもヒラリと着地する昌景。
「すばらしい!!あなたが味方ならどれほど心強いか!!しかし・・・その出血では力も入りますまい!!」
止めと言わんばかりに槍を大上段に構えて振りぬく昌景。それにたいして義信は左八双に構えなおす。そして先ほどと同じように左半

身を前に出すように脇構えに移動する。そして逆袈裟に下段から振り上げる。

「甘いですよ。二度も同じ技を使わぬことです！」

軽くよけられるがよほどの自身と信頼がなければ最後の一撃は任せない。一念を篭めて先ほどの倍以上の速度で振り下ろす。

「えっ！！」

と、驚く声を上げるまもなく刀が額に吸い込まれ昌景は気を失った。

この二段構えの攻撃は得意技の一つで名を雲竜剣と言う。

「はぁはぁ・・・」

大太刀を杖にして体支える義信。全身は血まみれだ。もう気力も体力もない。次がこられたら赤子でも間違いなく斬られるだろう。そう思っていると

「なんの騒ぎか、これは！！」

「あ、晴信様。実は曲者が！！」

「それは爺から聞いておる。いつまで掛かっておるのだ。」

侍たちの後ろから先ほどの騒ぎの原因になった老年の侍を引き連れた長髪赤髪の少女・勝千代が現れ義信を見ると周りの侍を見て

「どういうことか～！！！」

と大声で吼えた。腰を抜かす侍たち。うつけ、うつけと甲斐の国中に響き渡る気まぐれ姫の声ではない虎のような大声だった。

「爺！！どういうことか！！」

その剣幕に長い年月この少女を育ててきた板垣信方も言葉を失った。それと同時にドサリと何かが倒れた。後ろを勝千代が振り返ると血だまりとまではいかないがかなりの出血をして気を失っている義信と出血はないが同じように倒れている御側衆が二人いた。それで正気に戻った勝千代は医者を呼ぶように大声で言うのだった。

貞操の危機！！・・そして大立ち回り（後書き）

三話です。私から見た武田信玄（信奈Ｖｅｒ）はこんな感じです。

新しい名前・・・・そして契約（前書き）

家の付き合いって大変ですね。・・・・大事なのは分かるんですけど。

新しい名前・・・・そして契約

倒れてすぐもう一度部屋に運ばれた義信は文字通り四六時中、勝千代に見張られ看病されていた。義信としては美しい女性に看病されるのはやぶさかではないが、まったく見知らぬ場所で何時なのか分からない上にたまにくる老人二人の殺気が恐ろしくて養生どころではなかった。声のほうも徳本先生の見立てにより腫れ上がっているだけとのこと。

「なおらなかったらゆっくり家に来なさい。みっちりねっちり看病してやるよ。」

などといわれ背筋が違う意味で凍ったため首を振り続けたりもした。そのまま数日がたち

「あ〜・・・ガラガラガラ・・・ぷっ!!」

のどにたまった膿を洗い流し発音練習をする義信。水場まで勿論護衛＋勝千代つきだ。

「ごほごほ・・・。うんんん!!よしよし。」

「声は治ったみたいね。体のほうはどう?」

「少しばかり痛いけどまぁ、日常生活のには問題はないです。」

「そう、何かほしいものはない?」

親切にしてくれる勝千代に対して先ずはお礼を述べる。

「いろいろご迷惑をかけまことに申し訳ございません。看病していただきありがとうございました。」

「好きでやったんだから気にしないで。こっちも迷惑をかけたからお互い様と言うことで・・・。」

と、まぁ、遠慮のしあいになってしまったが最終的に義信が折れた。

そして部屋に戻ると

「自己紹介がまだだったね。私の名前は武田勝千代晴信。勝千代でいいよ。年は十五。」

「??・・・・武田?」

「甲斐の国主をやってるから結構有名だと思ったんだけどヤッパリこの田舎じゃ、あまりしられてないのかな?」
「もう一度聞いていいか?あなたは武田晴信でいいんだよね?」
「勝千代でいいって。まぁ、元服したのもちょっと前だから知られていないけど武田晴信だよ。あたしは。・・・・なんだ?その顔は?」
頭を抱える義信。質問をもう一つした。
「いまは何時だ?」
「何時って、たしか・・・弘治三年の七月だけど?」
「もう一度聞く。確かに弘治三年なんだな。じゃあ、平成って聞いたことがあるか?携帯電話でもいい。」
「なんだそれは??」
聞いたことも見たこともないような反応をする勝千代。そして義信は大声で
「タイムスリップなんあるのか~い!!!!」
と叫び勝千代は驚き後ろにひっくり返る。
「な、なに?」
「なんでもないよ。あとおかしな話をするけど聞いてくれるか?」
と、前置きをして自分たちの世界のことや自分の知ってる歴史と違うと言うことを説明する。無論浅いところだけだが・・・。それを驚き、ときには呆れたように反応する勝千代。
「・・・と、いうことなんだけど。」
「へぇ・・私はあんたの世界では男なんだ・・・。おかしな感じだね。」
あっさり一言だけ話す勝千代。その反応には義信のほうがびっくりした。
「え?・・・それだけ?」
「?・・・なにか。ぎゃ~!!とか、わ~!!とか驚いたほうが良かったの?」
「い、いや、あっさりしていたものでつい。」

足を崩し胡坐をかく勝千代。たまに見える艶かしい足が目に毒だができるだけ気にしないようにしながら話を続ける。
「それで、あんたの世界のあたしの兄弟っているの？子供って？」
「えっと・・・・たしか・・・。」
次々に兄弟や子供の名前を挙げていく義信。
「あっと。最後に忘れちゃいけないお人がいた。武田典厩信繁。」
その名前を聞いたとたんに時間が止まったように固まる勝千代。
「ん？どうした？」
「い、いや。なんでもないよ。ははは・・・。そういえばあんたの名前聞いてなかったね。あたしだけ名乗らせる気じゃないだろうね。」
一瞬さびしい顔をしたかと思ったが気のせいかと名前を教える義信
「三条義信っていう名前だ。」
「三条？三条って都にいる公家の三条様？」
「いやいや、先祖代々水飲み百姓らしいから公家なんかじゃないよ。未来に明治って元号ができるんだけど、そのときにこの国の人全員に苗字が与えられたんだ。そのときにつけたらしい。」
「ふうん。でも三条って名前じゃこの甲斐の国じゃちょっと難しいな・・・・。」
「なぜだ？」
「だって武田家と三条家って縁続きで付き合いも多いからもし名前がばれて騙りだって誤解されたらコレになるよ。あとで新しい名前でも考えてやるよ。」
「どうも、楽しみにしてるよ。へんな名前はつけないでくれよ。」
手を首筋で横に振り首が飛ぶと説明する勝千代。さすがに青くなりどうしようかと悩む義信。
「なぁなぁ、あんた未来から来たって言ったよね。なんか面白いものなんかあるの？」
「ちょっと待ってろ。えっと・・・・ここか？」
部屋に持ってきてあった特大リュックサックを漁り中から数点出す。

「なんだこれは？箱？」
「インスタントカメラっていうものでえっと、綺麗な絵を一瞬で作るカラクリ。」
「へぇ・・・やってみてくれ。」
ニヤニヤしている勝千代にインスタントカメラを向けてスイッチを押す
「うわ！！」
フラッシュはたかれ驚く勝千代。そしてニョキっと写真が出てくる。
写真を振って冷やして渡す。
「どうぞ。」
「へぇ・・・綺麗だな。まだ撮れるか？」
「まだ撮れるけど次の物品の紹介が終わってから。」
使いたくてウズウズしている勝千代だが今はおさめてもらう。義信はさすが鉄砲を関東で最初に城に配備した武将だな。っと少しばかりズレた感想を考えていた。
「次はコレ。」
「なんだコレは？袋？紙にしてはプヨプヨしている・・・。」
取り出したのはウエハースのポリ袋。バリバリと袋を破ってウエハースを一枚差し出す。
「・・・食わないのか？」
しげしげと上下左右から見る勝千代。そして
「どう食べればいい？」
「・・・・・バリっと齧って。」
覚悟を決めて食べる勝千代。口に含み数度噛むと目を見開き
「甘い！！美味い！！もっとよこせ！！」
と手を出して要求してきた。十枚ほど渡したがあっという間に平らげた。
「ほかには何かないのか？こうビックリできるような、派手な！！」
すっかりこの道具たちの虜になっている勝千代は幼子のように次は次はとせかす。義信も面白くなってきて次々に出していく。大抵紹

介し終わり最後に
「次はコレ。特大クラッカー。」
「喰らっかー？」
「食べ物ではないよ。ちょっと離れていな。」
素直に部屋の隅に下がる勝千代。そして特大クラッカーを引く
バアン！！！！！
と大きな音が響く。勝千代は驚いて猫のように飛び上がる。そして
何事かと多量の兵士がやってくるが
「なんでもない。さがってよい。」
というと兵士たちはさっさと下がっていく。
「どうだ。ビックリしたか？」
「おお、おもしろい。どんどんやってみよう。」
「やめとけ。」
数に限りがあると諫めて最後のトリは日が暮れてからと説明して。
次はこの世界のことを教えてもらった。色々な状況・勢力・文化など。そのまま時間が過ぎていき日が暮れて夜中になる。
「じゃあ、夜中にコレだ。」
「花火？なんだそれは？」
きょうは二人とも疑問符の応酬だった。
「火は有るか？」
「無論。少々待っているがいい。」
そういって勝千代は火打石と着木を持ってきて着木に火をつけて渡す。
「一間（約二メートル）ほど下がってろよ。」
花火に火をつけるとパッと美しい火が飛び散る。次々に色を変えていく花火に感動して言葉も出ない様子の勝千代。そして最後に大きな筒を持ってくる。
「上を見ていろよ。」
火をつけると筒から花火が撃ちあがり三尺とまでいかないが大きな打ち上げ花火が満開の花を咲いた。

「どうだ・・・・て、どうした?泣いて?」
「い、いや、なんでもない。」
グシグシと涙を隠すようにうつむきながら問うてくる。
「お前は何時までここにいるつもりだ?」
「何時までって言われても戻り方が分からないし何かの縁だからここに世話になるしかないだろう?それに多少商才と武芸の才はあると思うから役に立つと思うが。」
「そうか。ならお前はあたしの副将に、家族になれ。」
「は?信げ・・いや、晴信にはたくさんの将がいるだろう?」
「おらんのだ!!あたしが頼れるのは勘助と民部、そして孫六だけだ。爺たちや昌景でさえ父上を恐れて味方になってくれん。他のものは論外だ。誰も彼もがうつけうつけという。もともと当主になるはずだった次郎ももういない。」
義信は信玄が幼少のころ荒れてうつけと呼ばれていたことがあったのを思い出した。いまの勝千代もそうなのかもしれない。
「・・わかった。できるかぎりやれることはやってみよう。」
義信はやってみたくなった。この綺麗で物悲しい少女が戦国最強の大名になれるのか。と、そしてこの信玄が天下を取れるかどうか。いまは名文はコレでいい。いずれ何か分かり悟るとだろう。と。
「なら今日からお前の名前は武田典厩信繁だ。これからお前のことは典厩とよぶ。勘助と孫六。そしてお前が居るといるときだけあたしは勝千代になる。それ以外は晴信として次郎の代わり、いや次郎以上の将になってやる。」
「かしこまりました。お館様。武田典厩信繁、お名前を謹んで頂戴いたします。」
この名前をいただいたことにより自信を慕ってくれた兄弟のような後輩、そしてその伴侶と血で血を戦いになるとは義信は思ってもいなかった。

新しい名前・・・・そして契約（後書き）

無理矢理感ＭＡＸと、言い訳しながらの第四話っす。

初顔見せ！！・・・天魔外道参上。（前書き）

顔見せプラス新キャラ登場です

初顔見せ!!・・・天魔外道参上。

傷が治るまで部屋に押し込められた義信はただ寝ているだけであったが、退屈というほどではなく書物や字を教えてもらうなどして時間を友好的に使うこともできたためあっという間に二週間が経ち傷も治り家臣たちに顔見せを行うはずであったが

「・・・・なんだその道具は?」

いきなり部屋にやってきた勝千代は両手一杯に袋を抱えており部屋に着くなり袋の中身を引っ張り出した。

「ああ、勘助から借りてきた変装道具だ。客人扱いだけど、さすがに屋敷で大立ち回りをした者を簡単に使えさせるわけにはいかないから顔や体形変えてごまかすってこと。」

「で?なぜ俺はグルグルまきの簀巻きにされて固定されている?」

「逃げはしないと思うけど嫌がると思ったから。あとあたしがやりたかったからやった。さて、動かないでくれよ。」

嫌がりながらも動かずにいる義信であったがさすがにくすぐったい。それから数十分は経っただろうか?

「こんなものかな?どうだ?」

「ふむ・・・・。」

失敗を重ねて二人で話し合いながら完成したのは包帯で目元と口元だけを出し、出ている肌には火傷痕のような薬を塗りその上から頭巾をかぶることだった。

「鉄化面でもいいでしょう?」

と、勝千代は言ったがさすがに重くて生活に難があるため却下した。

「あとは声を変えるだけだ・・・」

「それについては問題はない。なぜなら俺は・・・変声の名人だからだ!!!」

ビシッと勝千代を指差し腹話術や変声術を試していく。

「す、すごいがそんなものお前の世に必要なのか?聞いているとこ

ろだけでは平和そのものらしいではないか。」
すこし恥ずかしそうな顔をして義信が
「かくし芸大会のときに・・・」
といったときの大爆笑した勝千代は忘れない。忘れてなるか。
「まぁ、いいか。」
やっとこと笑いを止めた勝千代は本題に戻る。
「コレでお前は武田典厩信繁だ。」
「おう。いいぜ。」
「これからあたしのことは晴信様か、新館様と呼ぶこと。」
新館とは跡継ぎのことで新しいお館様の意味でもある。
「かしこまりました。晴信様。」
「いいぞ。お前のことは典厩と呼ぶからな。間違っても人前で信繁とは名乗るなよ。」
念を押す勝千代、もとい晴信。
「それでこれからどうするのでございますか?晴信様。」
「これから勘助に合流して二人を躑躅ヶ崎の本館で評定があるからそこで紹介する。」
「いきなり出して大丈夫か?勝千代の立場は結構危ういんだろう?」
「言葉!!言葉を直せ。それがどうした。次郎のためにも勘助との約束のためにここで退くわけにはいかない。次郎以外に家督は渡さぬ!!」
「精一杯、後押しさせていただきまする。」
晴信が部屋を出ると三歩ほど間を空けて後に続く典厩。そのまま馬屋について馬に乗ろうとするが
「どうした?乗らぬのか?」
「・・・・・・」
「まさか。乗ったことがないのか?」
コクリとうなずく典厩に思わず頭を押さえる晴信。晴信はあれほどの武芸の腕があるなら馬術ぐらいは学んでいると思ったが典厩はまったく馬に乗れなかった。しかたなく大型アラブ馬の愛馬・黒駒か

ら手を伸ばす晴信。
「掴まりな。後ろに乗せて行ってやる。」
手をつかみ後ろに乗る典厩。そのままゆっくりとパカパカと屋敷を出て躑躅ヶ崎の館に向かう。
「そういえば勘助殿とはどこで合流するのでございますか?」
「このふたつ先の落合で合流することになっている。そこにいるぞ。」
指差した先を見ると隻眼で足を悪そうに引きずる老年の男がいた。
「勘助め。馬に乗ってまっておればよいものを・・・・。」
「それではしめしがつかないと思っておるのでございましょう。では・・」
馬から飛び降り駆け足で勘助の下に合流する典厩。
「お初にお目にかかります、私、武田典厩と申します。山本勘助殿でよろしいでしょうか?」
「・・・・む。お主が晴信様が言っておった典厩殿か。挨拶はいらぬようだ。これからは同輩として気軽に勘助と呼ぶがいい。」
「なれば私も典厩でかまいませぬ。さあ、馬にお乗りください。馬の手綱は晴信様の馬と両方、私が引きましょう。」
どうぞどうぞ。と勧められさすがに勘助も断るのはまずいと思い、馬に乗り晴信を待つ。
「おお、勘助。よく来てくれた。」
「拙者は殿の器量を見込み、殿もまた見込んでくれもうした。そのご恩だけでも返すに困るものをこのような表舞台に連れて行っていただける喜びは素晴らしく存じます。それに・・・」
典厩の方を見て勘助は
「天命を知り助ける者を従えておられるのです。断る理由はありましょうか?」
「そうだな、お前たち二人には両輪としてしっかり馬車馬のごとくしたがってもらうからな。」
「「ははっ」」

典厩が手綱を引きながら和気藹々としながら館に向かっていく。しかし、いざ館に着くと雰囲気は霧消する。
「な、なんだ、このおどろおどろしい雰囲気は・・・。」
「聞いていたとはいえ恐ろしき気の流れでございます。」
緊張からは唾を飲み込み冷や汗をかく二人。それ以上に黙り込み冷や汗をかく晴信。三人はそのまま館に入っていった。

正直なところ自分自身でも館に入った後のことは覚えてはいない。気がつけば評定の間にいた。そこでは戦々恐々としながら上座に座る掘りが深く恐ろしい顔をした現当主・武田信虎がいた。
「ふんっ!!今回も貴様らは小県に出陣しても一勝も米一粒とて手に入れられぬのか・・・役立たずめが!!!」
大声が響き家臣たちがいっそう身を縮める。しかしその態度も気に食わないように舌を撃ち直しジロリと晴信のほうを見る。
「晴信よ。」
「はっ。」
「難じゃ後ろの胡乱な者どもは?」
「今回私が召抱えました賢者と芸者でございます。」
パチパチと扇子をじりながら信虎は
「いかほどで召抱えたのじゃ?」
と聞いてくる。一言一言に嫌味というか怨念というか・・・まぁ、自分の子供に向ける感情ではない気を放っている。
「こちらにいる隻眼のものには三百貫。こちらの頭巾のものには五百貫で召抱えました。」
三百貫は現在の貨幣価値で約一億一千万円、そして五百貫といえば二億円近い金額である。さすがに渦中の皆々も驚き感嘆の出す。一番驚いているのは間違いなく当人たちだが
「はっはっはっは・・・。そのような下賤で生まれも分からぬ乞食同然のものを貴様は八百貫も払い召抱えたのか?やはり貴様は先

が見えぬ愚か者よ。」
と、真っ向から否定する信虎。晴信がやることなすことが気に食わないのであろう。
「・・・父上には分からぬだけだと存じ上げますが。」
「なんじゃと!!貴様はこの国の国主であり父であるわしに意見を、いや、抗弁をするのか!!」
扇子を投げつける信虎。とっさに前に出て立てになる典厩。ガンッ!!と鈍い音が響き額が割れて血が出る典厩だが一歩も退かずに信虎を見据える。
「えええい!!なんじゃその目は!!」
思わず刀を引き抜こうとする信虎だったが後ろから男が二人現れその手を止める
「おやめなさいませ、お館様!!」
「そのとおりでございます。いまここで争って喜ぶのは平賀の残党や諏訪の者どもだけでございます!!」
両職（武田家の最高家老職）の板垣信方と甘利虎泰だ。
「くっ!!命拾いしたな下郎が!!その鉄扇はくれてやる!!」
クルリと家臣たちを見据えて信虎は
「二月後に小県の禰津氏を攻める。これ以上働きもせずに扶持を食らうことがあれば手討ちにするゆえ覚悟いたせ!!!」
と言い放ちドスドスと足音を立てて部屋から去っていく。姿が消えたのを確認した家臣たちは気が抜けたように姿勢を崩ししばらく放心している。
「・・・帰るぞ。」
「「はっ!」」
放心した家臣たちの脇を通って帰る三人。そして帰路の途中に
「父上はいつもああだ。力で攻め取ればいいと思うだけだ。見ろ!!」
指差す方向には荒れ果てた土地や泥によって飲まれた畑がある。
「先ずは人心をつかむことが大切なのに・・・くっ!!」

悔しそうに拳を握る。それと同時に後ろから声が聞こえる。
「晴信様!!お待ちを!!」
「しばし、しばし!!」
「姉上!!」
板垣、甘利、孫六が後から追ってきた。
「どうかしたのか?」
「は、はい。じつは姉上に相談したいことがありまして・・・。」
「板垣も甘利もか?」
「「は、はい!!至急にて!!」」
「わかった屋敷できこう・・・はぁ!!」
馬の腹を蹴り屋敷に先行する晴信。そしてその後を追う勘助に拾われて後ろに乗っている典厩と板垣、甘利、孫六の三人。

「・・・やはりそうか。」
「はっ!恐れ多いことなれど国人の中では謀反の芽が育ちつつ、領民の中では一揆が起こる日にちまで決まっておるとか。」
「いまここで晴信様が決起なさるは不義ではありませぬ。」
「そうです。姉上、父上を殺せとは言いませぬ。せめて幽閉してでもこれ以上の疲弊は防ぐべきです。」
三人が口々に言うのは会の民衆全体が信虎に対して我慢の限界だということだった。晴信は熟考して目を薄く開く。
「立っても良い。」
「「「おお。」」」
「しかし・・・・だ。勘助。」
続きを勘助に説明させる晴信
「はっ、では。お三方も知ってのとおり信虎様の方針により現在武田家と周りの大名との関係は今川家をのぞき対立状態。今川家でさ

えも可もなく不可もないと言った状況でございます。今この状況で晴信様が立ってもそれに乗じて他家が介入しては武田家自体が消える可能性が強うございます。」

「では・・・このまま国が滅んでいくのを見るのみなのか?!」

頭を抱えてグルングルンとまわる三人。

「典厩。」

その名前を聞くと同時に三人が止まり晴信を見る。

「あ、姉上?あの者の名前を聞いてもよろしいでしょうか?」

「そういえば紹介をしておらぬな。そちらの隻眼のものは山本勘助。そして頭巾のほうが・・武田典厩信繁。」

「「「武田!!典厩!!信繁!!」」」

驚く三人。

「武田ですと!!御名を授けたのですか!!」

「うむ。彼のものはあたしの家族だ。義兄弟とも言うべきか。まぁ、同格だと思ってくれてよい。」

「て、典厩ですぞ!!左馬頭ですぞ!!」

「こやつには期待しておる。それでも直接渡したわけでもない。唐名で渡しただけだ。」

「信繁って姉上!!!」

「忘れぬためだ。それ以上は聞かぬ。」

三人の質問に答えて典厩にもう一度問う。

「どうしたらいいと思う典厩よ。」

いままで学んできたこの世界の事と自分の世界で学んだ歴史を比べ、思い出し、組み込みながらこたえる。

「今川のほうはどうにかなるでしょう。問題は上杉家と北条家でございます。どちらかを味方につけて牽制させれば信濃の豪族や大名も行動ができなくなりましょう。」

「どちらを味方につければよい?」

「恐れながら、相模の北条が良いと存じます。」

その意見に反対が起こる。

「いや、北条家はやめておくべきだ。氏綱が亡くなり次代の氏康は臆病者でうつけと評判がある愚物とのこと、いっそ長野信濃守に同盟を設けては？」
「それでも上杉家の当主である憲政よりは圧倒的にマシでしょう。」
「味方につける自信はあるか？」
「旗が十枚ほどあればよろしいかと。」
「わかった。期限は十日だ。成功しても失敗してもあたしたちは行動に踏み切る。」
「分かりましてございます。」
「では明朝に・・・・」
「と、言うわけだ。勘助。お前は恵林寺を通じて今川の雪斎殿に繋ぎをつくれ。板垣、甘利は国人と領民の指導者にこちらに付くか否かを聞け。そして集めれるだけ兵と資材をあつめろ。孫六、お前はあたしの名代として諏訪の高遠に向かってくれ。諏訪頼重を止めればいずれ総領を主に渡すとな。」
次々に命令を下し部屋に戻る晴信。すぐさま行動を開始する五人。

「やれやれ、肩が凝って仕方がないわ。」
自分の部屋に戻って肩をグルグルまわす勝千代。こういう日はゆっくりと茶を飲んで猫を愛でて寝たいものだがこう肩が張っていては眠れないと下女を呼んで揉み解してもらおうと手を叩く。
「お呼びで？」
「あれ？義信？」
大根の漬物とお茶を持った義信が入ってきた。
「そこで会った下女からもらった。はなしついでに持ってきたんだ。」
ちょうど良いとチョイチョイと呼び寄せる。
「肩揉んでくれる？後腰も。」

「なんでだよ。」
「こうやってまじめになったのは久しぶりだったからね。次郎が元服してからの二年ほどは気を張っていなくても良かったから楽なのが身に付いちまったみたいだね。」
布団の上にごろりと転がりうつぶせになる勝千代。しかたがないな。と枕元に茶と漬物をおいてしばらく待ってもらう。そして数分がたった後に砂糖菓子とタオルとお灸に細い鉄製の針を持ってきた。
「コレでもつまんで体の力を抜け。」
腰の上にまたがり美しい赤髪を除けてタオルを置く。
「あれ?思ったより重くないな。」
「乗ってるわけじゃないからな。」
そういうとタオルを置いた腰と尻をグイグイっと押し始める。
「む・・・・お・・・・ぬ・・・・」
「思ったより凝っているな。足はそうでもないけど・・・・腰が・・・な。」
手のひらから拳を握りまわすように揉みほぐしていく。そのたび、ぐっ。とか、ぬっ。とか息が漏れる声がする。
「あまり揉み過ぎると毒になるから背中に・・・ぐぐいいっと。」
「む・・おおお・・・ふぅ。」
下から上にすべるように揉んでゆく。一通りおわると
「体を起こして座ってくれ肩やるから。」
砂糖菓子とウエハースを食べて幸せそうにしている勝千代はいそいそと急いで座りなおした。
「それっと。」
首の付け根から肩の辺りまで大きくそれでも早く揉み解していく。
「おっおっおっおっお・・・かなりすぅっとするな。」
「だろう。子供のころから爺さんの体を揉んでいればうまくのなるよ。」
手のひらで伸ばすように揉みながら
「おし、しめるから上着脱いで?」

「あ、うん。」
上を脱いで上半身裸になる勝千代、美しい裸体に見向きもせずに後ろに回り針をさしていく。そして肩の部分にはお灸をおいて火をつける。どうも二人とも異性という感覚はないようだ。
「なんか・・・・じんわり・・きくな。」
すこし眠そうに目をトロンとさせる勝千代。しかし意地っ張りでやり遂げないと納得しない義信が
「ほれ、まだ寝るな。針と灸がすんだら次は耳だ。」
みみ～っとぼけた声を上げる勝千代の服を直して胡坐をかいて膝と腿に頭をのせる。
「まぁ、あまりたまってはいないかな。」
耳かきをいれてサッサと軽く撫でるように終わらせる。コロリと頭を返して逆側も同様に。そして最後に足の裏を軽く揉み解す。
「す～・・・す～・・・・。」
寝息が聞こえ始めると布団をかけなおして部屋から出る義信だった。
余談だが後々このことが原因で疲れたことがあれば何かにつけてマッサージ等々を行うことになってしまった義信であった。

初顔見せ!!・・・天魔外道参上。（後書き）

今回は長かったかな?次は関東の王者が登場します。

関東の覇者・北条家当主登場！！（前書き）

作者が好きな大名五本指の一人です。無論郷土の大名の信玄も入ってます。

関東の覇者・北条家当主登場！！

「行って参ります。」
と晴信と勘助に挨拶をして夜明け前に出発する典厩。実際は夜明けの予定だったが信虎の密偵がうろうろしているため三人で行動となった。その三人とは
「ｚｚｚ・・・・・・」
熟睡しているところを無理矢理連れてこられた民部こと教来石景政。
「え、え、わたしでいいのでしょうか？」
こちらも当日に典厩が随伴を希望したため無理矢理連れてこられた全体的に影の薄い女性・工藤源左衛門祐長。寝ぼけながらあたふたしているが腰に綱をつけて連れて行く典厩。景政は馬にくくりつけている。そして元の世界から持ってきた荷物を数点持って出発する。そして最初の目的地である平井の宿場に向かう。実際は晴信派の小山田信有の岩殿山城がある大月から上野原を経由して相模に入るのが一番速いが見張られているうえに街道が封鎖されているので進みようがない。なので別の目的もあるため北東に向かい平井から南下して小田原を目指す。その上に合計十日で北条と同盟か不可侵条約を結んで甲斐国に帰るという強行軍である。さらに
「土産はういろうを頼む。」
「はっ？」
「宇野屋という店に・・・・」
「宇野屋藤右衛門ですか？薬屋の・・・」
「知っているのなら話が早い。そこにある薬の透頂香（とんちんこう）のおまけで付いてくるという甘い口直しの食べ物を一杯手に入れて来い。一杯だ。」
「・・・・晴信様。強行軍と知っての戯れですかな？」
「いや、本気だ。北条との関係がどうなろうともソレだけは必ず手に入れて来い。」

などとサブクエストまでいたたきましたよ、こんちくしょう。ちなみに透頂香はものすごく苦いです。ものすごく。

「典厩様。平井の宿につきました。」
どうも北の方角の警備はいなかったようであっさり街道を馬で駆け抜けて一日で平井に到着した。ここは武田と敵対している扇谷上杉家の本拠・平井城がある。
「ちょっと調べたいことがあるからすこし、いや、すぐ済むから馬に乗ってまっていてくれ。」
「はっ！！典厩様！！」
ペコペコ頭を下げる源左衛門。それを典厩は
「あのな、源左衛門。」
「はい！！」
「気合はそこまで入れなくていいから。力を抜いて、な。俺たちは今は武士ではなく漂泊の民で旅芸人なんだからそのように力を入れるとばれるから。民部のように熟睡してろとは言わないが肩の力を抜いて・・・深呼吸を・・・」
「すはすはすは・・・・」
高速呼吸をする源左衛門。このような重要任務を任されるのははじめてらしい。
（コレが武田の副将・内藤修理亮昌豊なのか・・・・・）
と思ってしまう典厩だが自分自身もこの名を持つ本当の典厩は天下の副将と呼ばれていたことを失念しているのだった。あたふたしていながらも存在感が薄いという奇特な体質の人間だ。
「行って参ります。」
と晴信と勘助に挨拶をして夜明け前に出発する典厩。実際は夜明け

の予定だったが信虎の密偵がうろうろしているため三人で行動となった。その三人とは

「ｚｚｚｚ・・・・・・」

熟睡しているところを無理矢理連れてこられた民部こと教来石景政。

「え、え、わたしでいいのでしょうか？」

こちらも当日に典厩が随伴を希望したため無理矢理連れてこられた全体的に影の薄い女性・工藤源左衛門祐長。寝ぼけながらあたふたしているが腰に綱をつけて連れて行く典厩。景政は馬にくくりつけている。そして元の世界から持ってきた荷物を数点持って出発する。そして最初の目的地である平井の宿場に向かう。実際は晴信派の小山田信有の岩殿山城がある大月から上野原を経由して相模に入るのが一番速いが見張られているうえに街道が封鎖されているので進みようがない。なので別の目的もあるため北東に向かい平井から南下して小田原を目指す。その上に合計十日で北条と同盟か不可侵条約を結んで甲斐国に帰るという強行軍である。さらに

「土産はういろうを頼む。」

「はっ？」

「宇野屋という店に・・・・」

「宇野屋藤右衛門ですか？薬屋の・・・」

「知っているのなら話が早い。そこにある薬の透頂香（とんちんこう）のおまけで付いてくるという甘い口直しの食べ物を一杯手に入れて来い。一杯だ。」

「・・・・晴信様。強行軍と知っての戯れですかな？」

「いや、本気だ。北条との関係がどうなろうともソレだけは必ず手に入れて来い。」

などとサブクエストまでいたたきましたよ、こんちくしょう。ちなみに透頂香はものすごく苦いです。ものすごく。

「典厩様。平井の宿につきました。」
どうも北の方角の警備はいなかったようであっさり街道を馬で駆け抜けて一日で平井に到着した。ここは武田と敵対している扇谷上杉家の本拠・平井城がある。
「ちょっと調べたいことがあるからすこし、いや、すぐ済むから馬に乗ってまっていてくれ。」
「はっ!!典厩様!!」
ペコペコ頭を下げる源左衛門。それを典厩は
「あのな、源左衛門。」
「はい!!」
「気合はそこまで入れなくていいから。力を抜いて、な。俺たちは今は武士ではなく漂泊の民で旅芸人なんだからそのように力を入れるとばれるから。民部のように熟睡してろとは言わないが肩の力を抜いて・・・深呼吸を・・・」
「すはすはすは・・・」
高速呼吸をする源左衛門。このような重要任務を任されるのははじめてらしい。
（コレが武田の副将・内藤修理亮昌豊か・・・・はぁ・・）
と思ってしまう典厩だったが自分自身の典厩という名前は正史では天下の副将と呼ばれていることをすっかり失念していた。あたふたしながらも存在感が薄い源左衛門と熟睡している民部をおいて場末の酒場に入り酒とつまみを頼む。客がいない時間帯だったためすぐさま濁酒と豆の茹でただけの物が出てくる。
「店主。」
「へい。なんでごぜぇましょう。」
「実は町が騒がしいらしいがどうした?」
実際は町に入ってもいないためカマをかけたのだが以外にもすぐ店主は教えてくれた。情報収集をするならば飲食店で酒を扱っている

ところがいい。という収集の基本にそった方法だ。
「えぇ、また戦らしいので、何でも相模の伊勢を討って旧領を回復すると管領様がおっしゃったそうで、今回の出兵はどうも大規模らしく陣屋や食糧の徴収が激しいのでございます。」
「ふうん、伊勢というが北条氏ではないのかな?」
「それが・・・」
きょろきょろと周りを見て外まで確認する店主。
「ここだけの話でございますよ。なんでも執権と管領では執権の方が権勢は強うらしく、管領様は血のつながらぬ浪人の伊勢時盛が乗っ取った北条ではないと、その、対抗意識が強うございまして。」
「くだらないな。」
「そうでございましょうがお侍様にはお侍様の矜持とやらがあるらしく。あ、そうそう、そうでございました。今回はどうも古河の公方様に要請したらしくどうも他の豪族たちも傘下に入るらしいとのことでございます。」
「なら巻き込まれぬようにさっさと目的地の常陸にむかうとすか。」
「それが良いでございましょう。」
裾から銀を二粒渡す。店主は驚き
「こ、これは多ぉ、ございます。」
「いやいや、命の恩人にはコレぐらいのお礼をしておかねばな。」
返そうとする店主に無理に銀粒を渡して二人と合流する典厩。
「典厩様。・・・んん、酒臭そうございますが?」
「大丈夫だ、一杯しかのんでおらん。いますぐ出立するぞ。」
「はっ!・・・目的地はどこで?」
「二人はそのまま相模の小田原に向かってくれ。俺は河越の城にむかう。ひとつ手は打っておくか。」
(やっぱりこの世界に来て学んだときに上杉家があったからまさかとは思ったがどんぴしゃだ。)
作戦立案能力はあまり高くないが政治力や策謀をできるだけ使っていい方に向かわせようとするのが典厩、いや義信の得意とすること

だった。ふたりと別れ河越城を目指す典厩。無論馬を潰さんとするぐらいの全速力で・・・

「何者だ！！」

河越城の門番はこちらに向かってくる一騎の騎馬に向けて槍をかまえて問う。

「急使ございますっ！！多目周防守様の急使、福島孫二郎勝広にて候！！城主、北条孫九郎綱成様に至急ご連絡したきことがございます。開門を！！」

馬から飛び降り嘘っぱちどころか名前まで偽る典厩。冷静に考えればいくら当主の軍師であろうと同輩であり城主でもある者に急使を送ることはできないが必死の形相で汗を流す典厩を見て重要なことだろうとそのまま駆け寄る門番。

「あ、ありがとうございまする。」

泣いた振りまでしてフラフラしながら門番に掴まりながら客間に向かう典厩。元いた世界ならアカデミー賞ものである。そのまま疑われずに客間に通される。

「少々お待ちくださいませ。ただいま城主が参ります。」

水を出され一気に飲み干す。つかれていたことは確かなためコレはとてもありがたい。飲み干すと同時に扉が開き典厩と同じ年ほどの大柄の美男子が現れる。しかし顔には数箇所に及ぶ向かい傷があり武芸者としても一流だとわかる。

「孫二郎！！」

頭を下げる典厩に近づく綱成。そして耳元に口をあて後ろから見えないように右手逆手で脇差をつかむ。

「何者だ・・・。こととしだいによっては・・・。」

こちらも小さな声で答える典厩。この部屋に入るときに武器になりそうなものはすべて預けている。

「落ち着きくださいませ。私は武田家の晴信様が家臣、典厩信繁と申します。ことは重大なため偽らせていただきましたが行動によって両家ともに被害をこうむることはございませぬ。」
「保障するものは・・・・」
「私を信じていただくしかございません。」
その一言で鯉口切っていた脇差をしまう。どうやら信じていただけたようだ。正面に座りなおす綱成。
「もうしてみよ。」
「では、扇谷上杉家と古河公方を中心とする関東豪族の計八万がこの河越城に向かっております。」
無論数字はでたらめだがコレぐらい来るであろう数値だうそではない。無論その報告に驚き疑いのある眼でこちらを見る綱成。
「それを信じる証拠は?」
「後数日すれば分かりましょう。イナゴや雲霞のごとくこの城を襲いましょう。」
「・・・・・その目を見るとうそは申しておらぬな。」
殺気と害意を収める綱成。
「目的を聞こうか?」
「では、遠慮なく。扇谷上杉家の滅亡と北条家との同盟にてございます。」
「・・・・・本気で言っておるのか?」
「無論にて。」
「・・・わかった。儂は信じよう。」
この言葉には典厩が驚いた。
「なにを驚いておる。おぬしの目には害意や疑心はない。それだけでも信じるに値すべきものだと儂はおもう。」
「・・・ありがたきことにて。」
「しかし、軍事の全権は新九郎が持っておるのでこの件を儂だけで済ますことは不可能だ。おぬしにはまた一芝居うってもらうぞ。」
屈託のない笑みを浮かべる綱成。それをみて典厩はさすがに闘将・

地黄八幡の異名を持つ英雄だ。器が違うと思った。
「かまいませぬが。」
「いっては何だが儂と新九郎は仲が悪い。」
新九郎こと氏康と綱成は一時家督を争ったことがある。争ったといっても流血沙汰はなく二人の父である北条氏綱が迷ったため家臣たちが勝手に囃し立てたのだがソレによって氏康と綱成の仲は最悪で険悪といっていいほどだ。じっさい常に前線に送られ続けているのがその証拠だといえる
「存じております。」
「むかしはな・・・仲が良かったのだが、な。つまるところ儂が援軍を要請しても無視される可能性が高いのだ。恥ずかしいことにな。」
「綱成さまを見捨てるということでしょうか?さすがに河越は要地にてそれはないかと・・・」
すると綱成は複雑な顔をして言う
「頭では分かっておるはずだ。こう言うのもなんなのだが今現在にうつつけ、うつつけと言われておるが新九郎は儂より君主の器は圧倒的にでかい。闘将だ。などといわれておるが戦術面では役に立つかもしれないが治政や財政、政略では儂は勝てぬ。しかしな、新九郎は女子だ。そう、すねた女子は鬼より怖い。というからな。」
「しかし一緒に育った兄弟を見捨てる可能性はないでございましょう?」
「たしかに新九郎はないだろう。しかし悶々と考え続けて気が付いていたら落城ということになる可能性が圧倒的に高い、そうなれば新九郎は本当にうつつけになってしまう。ふぬけになってしまうだろう・・・。」
本当に我がことのように悲しそうな顔をする綱成。
「そうなれば北条家だけではなく新九郎の身も危うくなる。儂は武人ゆえ死ぬ覚悟はできておるが新九郎は違う。義父・氏綱から、義叔父・箱根殿から、先の軍師・藤永殿から、守役の小太郎殿から。

そう先代からの皆々が実際は期待を込められて君主として育てられた。戦場で死ぬべきではなく畳の上で死ぬべき人間なのだ！！！」

思わず熱が篭もる綱成

「・・・・よろこんで協力させていただきます。一芝居どころか二芝居でも打ってみましょう。」

「そ、そうか。」

「この城なら半月は籠もれますな？」

「無論だ。」

「私の期限もあと九日でございます。必ずや援軍をつれてきましょう。」

「ありがたい！！では新九郎をお願いいたす！！！！」

ガバっと土下座をする綱成。返礼をして急ぎ小田原に向かう典厩。

馬のほうも潰れず回復していた。さすが晴信の愛馬だ。馬にまたがり出発しようとする典厩に声が掛かる。

「典厩殿！！コレをお持ちください。城主・綱成様の旗と書状にございます。」

黄色の八幡旗を背中に差し出立する典厩。馬も常に全力疾走だ。

河越→江戸→玉縄→小田原

「はぁはぁ・・・・・はぁはぁ・・・・。」

馬を飛ばして約一日、小田原に到着した典厩。直線的に移動すれば速かったのだがそうすれば山越えのため馬を捨てなければならなかったため少し湾曲した道を進んだ。

「典厩さま！！」

「てん～・・・きゅ～・・・」
源左衛門と民部が迎えるが今は説明している時間が惜しい。これが成功しなければ武田家との同盟はおろか北条家すらなくなってしまう可能性があった。
「源左衛門！！お前は今すぐに宇野屋に向かって風呂敷一杯にういろうをもらって来ること！！」
「は？・・・はっ！かしこまりました！！」
スッタタタタと駆け足で宇野屋に向かう源左衛門。そして民部には
「民部！！付いて来い！！」
「あ～・・・い」
すたすたと早足に城を目指す典厩に、どうやってもノロノロ移動しているような緩慢な動きだがそれでしっかり付いてくる民部。
「開門！！！開門！！！至急、御本城様にお伝えしなければならぬ議があり、お目通り願わん！！」
「そこもとは？」
「河越城主・北条孫九郎綱成様の使者にて・・・」
「してそこもとの名前は？」
「さっさと開けぬか！！！上杉軍十万が河越城に迫っておるのだ！！この書状をよめばわかろう！！」
ばしっと門番に手紙を叩きつける典厩。手紙を見ていた門番の顔が一気に青ざめる
「し、しばしお待ちを・・・いえすぐさま本城へ！！」
大戸が開き本丸に一直線で民部を乗せて馬でかけていく典厩。周りは何事かと見ているが気にしない。馬のまま本丸に突っ込み飛び降りそのまま評定の間に駆けていく。
「お、お待ちくだされ、こちらの部屋にてお待ちを・・・」
途中でさすがに呼び止められ評定の間の隣にある部屋に通される。
それからどれほど経っただろう。
「なにかしら？河越の孫九郎から？」

ぼんやりとした民部とは違ってやる気のない顔をした日本人形のような女性が現れる。その後ろから十代前半の子供のような男性とちょび髭を生やしたアスパラガスのような男性が現れる
「儂は多目周防守と申す。こちらは箱根殿の三郎長綱だ。してそこもとは？」
「多数のご無礼御免なれ。私は河越城主・綱成殿の使者で信繁と申します。現在河越城に扇谷上杉を中心とする関東諸侯軍合計十万が迫っており援軍をお願いいたしたくございます。」
「じゅ、十万だと！！！」
「はっ！こちらの書状に詳しく書いておりまする。」
手紙を読み始める長細い男・長綱。読み進めるために顔が青くなっている。
「新九ろ・・・いや、御本城様！！いかがします？」
それを聞いていた北条氏康はやる気がなさそうに
「・・・・孫九郎ならうまくやるでしょう。わたしは中座するわ。」
あくびをしながら氏康は去っていった。そのあとを追う幼子軍師の多目周防守。そして頭を抱える長綱がいた。
（な、なんだぁ・・この氏康ぅ！！）
自分が持っていた氏康のイメージが一気に崩れていった典厩だった。

関東の覇者・北条家当主登場！！（後書き）

関東の皆さん御免なさい。氏康はこんなひとじゃありませんよ。いっておきますけど。民政家としては戦国最大と言ってもいい人物です。

不器用男と不器用女（前書き）

北条家は基本的に美男美女が多いらしい。武田家は女性はものすごく美人らしいけど男はあんまりらしい。

不器用男と不器用女

「使者の方。申し訳がござらぬ。御本城様はどうも・・・・な。」
まことに申し訳がないと頭を下げる長綱。こちらも頭を下げてしまうほどだ。
「綱成殿から聞いております。・・・どうも、家督争いでどうこうあったとか？」
「孫九郎がそんなことを・・・・。しかしですな。使者殿・・・いえ、信繁殿。兄上は、先代の氏綱公は御本城様の才能は自分以上だと思い後を継がせたのです。家督争いとはいえ血も流れなかったのですからもう過去のことと割り切ってしまえばいいものを・・・・新九郎めが！！」
バシバシと床を叩き始めた長綱。その様子を見るにかなりあの態度は長いのだろう。
「す、すまぬな。使者にこのようなことをいっても仕方がないのじゃが・・・・」
溜息をつく長綱。そして外からも溜息をつく多目周防守が入ってくる。いっきにドンヨリとした雰囲気になる部屋。
「どうじゃったか？周防よ。」
「どうもこうもないわ。あの馬鹿御本城め・・・。孫九郎ならなんとかすると一点張りで部屋にこもってしまったわ。いまは清水殿がねばっておるわ。」
清水とは清水小太郎吉政といって氏康の守役だ。そしてその小太郎も溜息をついて疲れ果てて入ってくる。さらに暗くドンヨリする部屋。
「「小太郎・・・・」」
「聞くなって・・・・。」
三人が溜息をつくためどんどん暗くなる部屋。行灯でも必要なくらい暗くなっている。

「えっと・・・私はこれで・・・・」
（ごめん!!綱成殿・・・こりゃあ・・・無理だ）
早くもあきらめて次の手を考えるため勘助に手紙を送って策を教えてもらおうと部屋を出ようとした典厩を
「「「まった!!!」」」
「ぐえ!!おぶ!!」
首筋と足をつかまれたため息が詰まりながらぶっ倒れる典厩。
「な、なにを?」
振り返ると土下座をしている三人がいた。
「信繁殿は・・・」
「このようなときに使者に・・・」
「送られるほど・・・・」
「「「信頼されていると見もうした!!!」」」
ズズイっとせまってくる男三人。はっきりって怖い。
「え、ええ。信じてはもらってますが・・・・」
あきらめて帰りますとは言い出せない雰囲気である。いったら殺されかねない。
「ならば御本城様の・・」
「説得を・・・・」
「お願いしもうす!!!」
と、こちらの了承を聞かずにグイグイとおして氏康の屋敷までつれてこられ
「「「あとは、まかせもうした!!!」」」
用はないとさっさと帰ってしまう三人。いい加減にしやがれといいたいがここまできたら仕方がない。中にいる確認するために戸を叩く。
「えっと・・・氏康殿?」
中からコツコツと音が聞こえいることがわかるが言葉は返ってこない。
「綱成殿の使者でえ～と・・・典厩信繁ともうします。」

コツコツと返ってくるだけだが反応はある。なるほどこれは疲れる。
「綱成殿は・・・えっと・・・城を死守するつもりです・・・援軍を待っておりますが・・・。援軍のほうは？」
コツッコと反応が変わる。
「えっと・・・だめですか？」
コツコツと帰ってくる。どうもあたりらしい。
「理由のほうを教えていただけませんか？」
反応がない。どうも「はい」「いいえ」「だんまり」しか反応がないらしい。さすがにカッとなり拳を握り振り下ろして叩いた。
「くｘｙｓｔｇｂ！！！」
鉄板でできているのか折れてはいないがかなり掌の小指側が痛い。思わずしゃがみこむ。
「・・・なんて無駄な鉄壁具合だ。さすが北条とでも言うか・・・。」
無駄に納得してしまった典厩はいったん落ち着くために息を吐いて交渉を開始する。
「氏康殿。綱成殿はもう北条の家督を狙っていませんよ。」
コツコツと返答がある。分かっているらしい。
「では援軍を送らない理由をお答え願いませんか？」
無返答だ。次の言葉を続ける
「氏康殿？綱成殿はあなたのことを君主の器はすばらしく、自分はかなわないと言ってますが？」
コツコツと返ってくる。これも知っているらしい。
「河越が落ちればよいとお考えですか？」
コツッコ！！！と強く返ってくる。落ちることは論外らしい。つまり綱成殿は死んでほしくないという事だ。
「綱成殿は貴女の身を北条家より案じておいでですよ？」
コツコツと返答がある。すこし息を吐いて考えをまとめる
（死んで欲しくない・心配してもらっていることが分かってる・援軍をおくらない。だめだ・・まったくわからない。）

雲をつかむような問題だ。質問を続ける。
「北条家がなくなるかどうかの瀬戸際かもしれませんよ？早雲公以来の土地をなくすかもしれないのですよ？」
無反応。ガリガリと頭を掻く典厩。
「今川が問題で出陣できぬのですか？それとも武田家ですか？」
コツッコと違うと返ってくる。たしかに北条氏康の能力を考えれば今川はともかく信虎は簡単にいなせるだろう。
「はぁぁ・・・・・。なんなんだよ。もう！！」
またイライラしてきた典厩。爆薬で吹き飛ばしてこじ開けてやりたいが火薬がないため我慢する。
（北条家・・・氏康・・・綱成・・・・たしか義理の兄弟。氏綱の養子と実子。なにかわすれているな？）
のどに引っかかった小骨のようにすっきりしない。
（何か忘れているが・・・・・なんだっけな？）
北条家のことを色々と思い出していく。
（北条氏康。相模の獅子。妻は今川の娘。子供は多数。戦国屈指の内政家で臆病かつ勇猛で・・）
次は氏康のことを思い出していく。そのつぎに綱成。
（北条綱成。北条最強の闘将。妻は北条の娘。子供に猛将の康成。・・・ん？）
何かを思い出して考えを変える。
「綱成の本名は福島勝千代。北条氏綱の娘と結婚・・・・北条と結婚？」
（そういえば綱成殿は自分が死ねば氏康殿がふねけになると言っていたな。悪趣味でこのやり方は好きじゃないが・・・・）
まさかと思い発破とカマをかけてみる。
「氏康様。私実は本名を武田典厩信繁と申します。もうお分かりですね武田家の身内のものです。」
無反応。しかしつづける典厩。
「今回の目的はこうやって北条と同盟を結ぶことですが、もう一つ

ございます。それは・・・」

一息ためてはっきり聞こえるように言う。

「もしもの時には有能な人物の引き抜きでございます。うつけの振りをなさっているが聡明な氏康様にはこれだけ言えばわかりますな？」

しかし無反応。はずれかなっと思うが一応続けてみる。

「そう、武田家はもしもの場合援軍を出して多大の犠牲を払っても綱成殿を得たいのです。このまま援軍を出さずに川越の城が落ちることになれば責任感の強い綱成殿は玉砕して果てるでしょう。逆に武田が援軍を出して河越の城と兵を助ければ義理堅い綱成殿は氏康殿を見限り我が武田家えええい！！！」

とどめの言葉を言おうとしたとき鉄製の扉が開かれ寄っていた典厩は前のめりに倒れる。

「いったた。やっとあけてくれえええええい！！」

やっと開いたとうんざりして前を向きなおすと槍を突き出してきた氏康がいた。とっさによける典厩。

「風魔！！」

殺気を纏った氏康が大声でその名を呼ぶと数名の黒装束か屋根裏から吹き矢や投剣で攻撃してくる。次々に除けていく典厩

（く、薬が効きすげて俺が死ぬ！！）

「ま、まった。少し待った氏康殿！！」

制止の言葉を振り切り連続で槍を使ってついてくる氏康。藪をつついて獅子が出てきた。その獅子は眠りを妨げられたうえに家族を狙った敵に対して集中攻撃を行う。

「風魔の皆さんも待って！！やめて～！！」

次々に攻撃をよける典厩。逃げようにも鉄製の扉を閉められた上に外から押さえられてびくともしない。

「氏康どの！！まてって言ってるだろうが！！！」

ガシっと突いてきた槍を掴み止める。しかし肩に投剣が刺さる。それでも命がなくなりよりマシと今度は止める説得を行う。

「まってくれ、氏康殿。私は綱成殿を引き抜くつもりはなく綱成殿に援軍を頼まれただけで・・・」
説得を聞き入れたのか槍を放す氏康。ホッとしたのも束の間で次は腰に差してあった刀で斬りかかって来る。風魔も典厩が槍を手に入れたことになるため攻撃が強くなる。
「まままままままままま待てって。」
氏康の目を見ると先ほどのやる気のないフヌケの目ではない。傲慢とも取れる意志の強さを秘めた英雄の目だった。獅子は獅子でも巨大すぎる獅子だったみたいだ。
「まっずはこの書状を読んでくれ!!綱成殿の直筆だ!!!」
槍を左手に持ち右手で書状を差し出す。綱成が援軍が必要と書いた書状だがいままで氏康は直接見ていない。
「動くな・・・いいでしょうね。」
それだけ言うと書状をみる氏康。そして読み終えると殺気がおさまって風魔には合図を出す。周りにあった気配が消える。そして典厩の前に座る氏康。

「すまないわね。さすがに冷静さをなくしていたようね。」
頭は下げないが謝罪をする氏康。強烈な意思を持つ目はそのままだった。
「も、申し訳ございませんでした。あそこまで激昂するとはおもいませんでしたので・・・。」
「かまわないわ。孫九郎の書状を読んで落ち着いたから。あとさっきのことは全部うそでしょうね?」
「は?」
「先ほどの引き抜きの話よ。」
本当だったら九族皆殺しにしてやると言わんばかりの殺気をもう一度放つ氏康。
「無、無論です。」
「ならいいわ。」

「そ、それで援軍のほうはいかがしますので？」
それを聞くと急にウジウジモジモジし始める氏康。
「え、援軍は送れないわ。」
「なぜございましょう？」
「え、援軍を送って孫九郎に会ったらどう対応しいいかわからないわ！！」
などという氏康。
「・・・・・・氏康様が行かずに長綱殿でもいいのでは？」
「いやよ。なんで綱成のことを他人に任せないといけないの？！」
なにを言っているの。と、言わんばかりにこちらを見る氏康。
（い、いや、そっちこそなにを言っているんだ？）
「で、では援軍を送らず綱成殿を戦死しさせるつもりで？」
「そんなわけないでしょうが！！助けたいけど自分が行くとどう対応していいかわからないし、周りには任せたくないのよ！！」
玉縄城において置けばよかったわ。父上がそんなところに配置するからよ。と亡き先代に文句を言い始める氏康。
「ではどうす――「どうすればいいか聞きたいのはこっちよ！！！」
逆ギレする氏康。そうとう綱成のことになると周りが見えないようだ。
（いやいや、氏康×綱成ですか？元の世界では腐女子が喜びそうだな・・・・。そういえば正史でも氏康は一途で家族愛にあふれる人物だったな。それにしても今川つながりで綱成とは・・・・）
「いっそ、ここで仲直りをして元の鞘に納まるというのは・・・・」
「それができたら問題ないわよ。今じゃ二人きりであっても御本城様、綱成って他人行儀で呼び合うのよ！！そう簡単に直ったらやってるわよ。」
（親父に叔父さん。貴方たちが言ったように他人の色恋は見ていれば楽しいけど巻き込まれると厄介極まりないとのことですが、そのとおりです。勘弁してください。）
「え、っとまず・・・・この援軍を契機にですね・・・なんという

か・・・個人的に恩を売っておいて・・・えっと・・・そして・・えっと・・」

しどろもどろに説明を続ける典厩。

「・・・・・それでですね。戦勝祝いのときに孫九郎と呼べば・・・ですね・・・あちらも新九郎と読んでくれるのではないのですか?」

「確実?」

「か、確実とはいえませんが・・・あれほど心配していた綱成殿ですから・・・八割ほどですかね。」

「わかったわ。その案信じましょう。成功したら同盟でも不可侵条約でも結んであげるわよ。けど失敗したら死刑よ。」

ええー。っと言いたかったが我慢する典厩。

「あとあなた、武田の者って言ったわね。悔しいけど武田の将兵はものすごく強いから我が軍の一割を貸すわ。戦場に出て孫九郎を助けなさい。失敗したら殺すわ。」

ちょっとリスクが高すぎる賭けですよ!!といいたかったが我慢。

「わ、わかりました。で、では出陣は?明日でしょうか?」

また氏康はなにを言っているのよ。と顔をしかめ

「今すぐよ。」

「ええ、兵は集まってませんよ!!」

そんな事は聞かずにズカズカと評定の間に向かい、評定を開始する太鼓がなる。

それからはとんとん拍子に話は進み、評定は氏康に恐れをなした重臣全員の全会一致により即日出陣が決定した。城はうごいていないものがいないほどの騒がしさになり

「河越の孫九郎を救うわよ!!あとついでに馬鹿どもを皆殺しにして領地を増やして内政するわよ。」

「「「「お、おお〜〜???」」」」

「新九郎よ。これ以上爺の胃を痛くしないでくれ。」

「それに作戦はどうするのでしょうか?御本城様?」

「そ、そうでございます。我が軍は用意ができておらず三千ほど集

まっただけでございます。」

「三人とも気にしないでいいわ。叔父上、私はうつけは卒業しますのでご安心を。周防よ、作戦は大体決まっているから気にするな。小太郎。兵のほうは安心せよ。風魔に手紙を持たせてもう送っておる。江戸や玉縄、あと伊豆から続々に援軍がくる手はずよ。」

やる気がないのは終わりとばかりズカズカと単独で進めていく。しかし周りの意見を聞いてちゃんと聞いているからたちが悪い。

「・・・・・・・」

さすがに勝千代(はるのぶ)をみている義信(てんきゅう)だが氏康ほどわがままでないことを祈ってる。しかしその祈りは後々無駄になるが詳しいことは後々語ろう。

「出陣！！！！！！」

一人だけやる気や根気などがメーターを振り切っている氏康の号令により北条軍は出陣した。歴史に名高い奇襲の河越夜戦がはじまる。

不器用男と不器用女（後書き）

次は歴史に名高い河越夜戦です。かなりめちゃくちゃにしますので・・・お気をつけて。

開始！！河越野戦！！（誤字にあらず）（前書き）

戦国三大奇襲戦の一つ、河越夜戦です。

開始！！河越野戦！！（誤字にあらず）

甲相同盟を結ぶために外交官の密令を受けて旅芸人として北条氏康に会いに行った典厩信繁以下二人だったがひょんなことで玉縄北条氏の祖である北条綱成を助ける手はずをとってしまい結果的に戦に参加する羽目になってしまった・・・なんで？

「北条家の戦は北条でやってくれよ・・・・。」
「なにかいいましたか？」
「いえいえ・・・。」
最高速で移動を続ける騎馬の中で氏康がにらむ。それにげんなりしながらとぼける典厩。小田原から出発してもう二度ほど馬を交換して移動を続けている。その間に伊豆や玉縄、江戸からの援軍が合流して総勢八千になっていた。甲斐の馬に乗っていた民部景政や源左衛門祐長ですら一度馬を交換してある。していないのは典厩の黒駒と氏康の愛馬・‘こゆるぎ’だけだ。その甲斐もあって河越の城まで目と鼻の先の距離にいる。現在風魔を放って偵察を行っている。
「し、新九郎よ・・・、こ。これでは馬が全滅してしまうではないか・・・・」
老齢でありながら少々の疲れしか見せずにあとに続く氏康の叔父・箱根殿こと三郎長綱は問いかける。
「駄馬はいつでも代えれます。しかし、名将は代える事はできませぬ。ましてや幼きころから兄弟として育った孫九郎を見捨てては一生の負い目となりまする。」
そう言い放つ新九郎こと氏康。その言葉に長綱は感涙をぬぐいながら
「兄上、見ておりますかっ。あのうつけと言われた新九郎が兄上の見立てどおり・・・・」
と感極まっている。本当のことを知っている典厩は言えるはずもなく長綱に同情することしかできない。まさか色恋沙汰で拗ねてうつ

けのふりや気が抜けていたとはこの状態の長綱に言ってしまったらよくて失神だろう。

「そういえばなぜ使者である信繁殿は旗差物をもっておらぬのだ？」

「叔父上、気付いてはいなかったのですか？」

あきれたような顔をする氏康をこちらも疑問な顔をする長綱

「この者は間違いなく孫九郎の使者だが北条の家中ではない。武田のものだ。」

「は？武田ですと！！兄上の代から敵対しているではないか？！」

「そうなのだが武田の晴信が跡継ぎにあるらしくひと悶着あるらしく北条を味方につけたいらしい。」

典厩は同盟を結びたいといったが誰が何のためにとは説明をしていないはずだが簡単に見破る氏康。

「内乱ということですか？ではそれに介入し甲斐を手に入れるのが得策ではないか？」

戦国に生きる者として当たり前の意見を述べる長綱だが氏康はその頃の大名としては異質だった。

「叔父上よ。私は箱根以西に興味はありません。そして将軍家に介入したり打ち倒して天下に号令をかけるつもりはありません。」

「な、なんじゃと？！」

「私の夢はこの関東全域を支配して平将門のように北条の安寧の王国を作るつもりです。」

「そ、そんなことをすればやまと御所の姫巫女様に討伐されかねませんぞ！！」

恐れ多いと戒める長綱だが氏康は意に介さず反論する。そして置いてけぼりながら考え方にさすが氏康と納得し驚く典厩。

「あくまで王国といったはずよ。璽をいたたき王として預かる形にすればよい。聞いた話によれば今代の姫巫女は英明だと聞いている。民草に問題がなければ認めてくださるはずよ。」

その言葉にしぶしぶながら納得する長綱。そして今の状況の質問をする。

「しかしな、新九郎。それ以前にこの難関を突破しなければその夢もかなわぬぞ？」

「ふんっ、叔父上。私を誰だと思っているの？史上最大の謀将と言われはるか遠国まで聞こえる早雲公、そしてその早雲公を超える父上、その父上がすべてで上回るといったのよ。この氏康のことを！ならば上杉や、古河公方が十万の兵を連れてこようが雑魚なんざボコボコにしてやんよ！てめーら私について来い！って感じで私が最前線に立てば簡単よ。」

当たり前のことのように言う氏康。

「それにこの武田家の典厩信繁が何とかしてくれるために考えがあるらしいから万全よ。」

しなければ死刑よ。と目線で言ってくる氏康、思わず身がすくむ典厩だった。

（どうすっかな・・・、まぁ、歴史どおりに夜戦を仕掛ければ勝てるはずだろう。）

実際は偽装退却を繰り返して油断したところを奇襲して勝ったのだが失念している典厩。

「御本城様。」

「風魔か？河越城の様子は？」

「はっ、まだ敵襲は起きておりません。上杉の行動速度は遅くこの調子で行けば我が軍のほうが先に着き、なおかつ一日余裕があるといった様子で・・・・」

「聞いていたより愚鈍かつ暗愚な人物のようね。上杉の管領様は。その余裕を噛み砕いて飲み込んであげるわ。」

（・・・・・たしか河越夜戦は攻城している連合軍を城と援軍で挟撃したんじゃぁ・・・なかったか？）

どうも自分の知っている歴史＝こっちの歴史。と思い込んでいた典厩だが違ったためさきほどの余裕を改めて冷や汗をかきながら必死に考え始めた。

「その前に孫九郎に合流しなければ・・・全軍！！この速度を維

持しつつ河越城に入る。」
そのままの速度を維持しつつ城に到着した北条軍はまったく妨害なく入城した。
「おお、御本城様。」
「・・・・・綱成よ、大儀であった。」
（・・・・急に雰囲気がどんよりしたぞ。）
綱成が敬意を込めて綱成を呼ぶと一気に機嫌が悪くなる氏康。こっちをみて恐ろしい殺気を飛ばす。
（戦勝祝いでですよ!!）
伝われ!!伝われ!!と必死の念を送ると分かったのか殺気を収めて綱成とこれからのことを対応する氏康。それをみて風魔に話しかけ、情報を教えてもらう。陣容から参陣した将まで事細かく書いてある。聞いた話によれば管領の側近を買収して聞いたという。
（・・・・もしかして長野信濃守業正いがいは駄目な奴らしかいないのか?上杉管領よ。）
敵ながら心配したくなるがその思いを振り切り考えをまとめ始める典厩。成功しなければ首が飛ぶ。成功しても功績がなかったら首が飛ぶ。あの目はマジだ。
（参陣しているのでヤバイのは・・・なんで佐竹や宇都宮、そして里見まで参加してるの?）
正史では参陣していない大名までいた。特に佐竹と里見はヤバイ。
鬼が二人いる。
「まじで首大丈夫か?」
思わず首筋を確認する典厩。
「典厩様?首がどうかしましたか?」
「い、いや、源左衛門。だ、大丈夫だ。」
「そういわれましてもすごい汗ですが?ま、まさかお熱でも?」
「大丈夫。大丈夫。」
心配する源左衛門をなだめて氏康と綱成に作戦を確認する。

「は?敵陣に突撃して関東管領を討ち取る?」
綱成が立てた作戦に驚く典厩。しかし綱成は胸を張って
「うむ、それほどの大軍でまともな統制を取れるわけがない。なれば突撃して管領を討ち取ればいいだけだ。」
さすがに氏康もげんなりしている。これはマジで突っ込みかねないと思う典厩。さきほど氏康が言ったのはあくまで覚悟の言葉であって実際やるわけではない。
「この城に兵を残し我々は山に篭もって挟撃するというのはいかかでしょう?」
正史の挟撃作戦を多少アレンジしたモノを意見としていう典厩。これには篭城作戦の好きな氏康は大賛成で迎えてくれた。さすがに敬愛する当主である氏康に賛成されては綱成も強くは言えず了承する。
「助かったわ。」
「なにがでございます?」
「さっきの提案よ。私が篭城作戦が好きなことを知っていたとしても初戦で篭城を選ぶと兵たちの士気が目に見えて落ちるわ。しかし客分であるあなたが通した意見ならよそ者に負けるかということで士気が上がるわ。もしかしてわからずにやったの?」
何時客分扱いをしたか小一時間問い詰めたかったが不毛なためやめておく典厩。そして馬に乗り続けたため疲れが出たので本日は典厩を含めて全兵が泥のように眠り早朝に主力である八千を氏康自ら率いて近くの山に息をひそめて隠れる。念には念を入れて馬には猿轡をかませ足下には泥を作って足音まで立てない準備までした。そのまま上杉軍が来るまで待つ、ただ待つ。
「・・・来ないわね。」
「ええ。」
しかし、到着が風魔の予想より遅く日が暮れてもまだ来ない。そのまま夜明けまで時間が過ぎ今日は来ないだろうと城に帰ろうとすると向こうから足音と砂煙が見える。
「やっとついたわね。・・・だけど。」

「ええ。」
「あやつらはうつけか？」
長綱の言葉もわかる。今から命をかけた戦に行こうというのに大半、いや、ほとんどの兵がへべれけの泥酔状態だった。さすがにこれには北条軍全員が呆れ、その後に頭にきはじめる。
「作戦を立てたのが馬鹿だったかしら？」
「あの覚悟はなんじゃったのかな？」
「たしかにこれはないわぁ・・・。」
上から氏康、長綱、典厩だが言葉の端々どころかすべての言葉に呆れが入っている。
「あ、攻め始めましたよ？」
「正気かの？」
「あの、バ管領が救いようのない阿呆だと分かっただけでも収穫にしようかしら・・・」
三人が頭を押さえ始めた。なにしろ、城を攻めているのに足がもつれて転ぶ、堀に滑って落ちる、近づく前に立てに隠れて動かないのでそこに行列ができるといった有様だ。しかも水筒に水ではなく酒を入れているため戦場とは思えない陽気さだ。
「あ、宇都宮が帰り始めましたね。」
「そのまま下野に帰ってくれないかしら・・・・」
「さすがにそれは・・・・って・・・あっという間に見えなくなりましたね。」
数千の敵兵がいなくなったとはいえまだまだ大軍に変わりはないがこれではボロ勝ちが確定だと思っていた矢先にドーンと言う音が響いた。
「な、なにごと？」
「新九郎！！あれをみよ！！」
呆れや倦怠感を吹き飛ばす音の方角を指差し氏康に教える長綱。そして二人がその方角を見ると上杉のダメ兵隊に隠れたようになっている向こう側に素面かつまじめに城を攻める部隊があるではないか。

しかも兵力はこちらと同等といった数だ。城兵もその部隊には一生懸命に反撃を行い近づけさせない。

「あの部隊さえ倒せば勝てるわね。バ管領にもいい将がいるじゃない。多分あれが長野の爺ね。」

「いきますか?」

「無論作戦通りにね。」

馬に乗る典厩と氏康。長綱に打ち上げ花火を渡し発射させる。大きな音が響き敵兵が城攻めを中断してこちらに意識が向く。それと同時に城門が開き綱成率いる三千がバ管領軍本隊に突っ込む。酔っ払いしかいない部隊はあっという間に混乱状態に陥る。その部隊救うため、まともな行動している部隊が援軍に向かい戦場は桶蓋を叩き割った味噌のようにグシャグシャだ。

「全軍!!突撃!!私に続きなさい!!狙うは両上杉家の当主のみ!!首はとるな!!斬り捨てていけばよい!!」

氏康を最前列に混乱の坩堝(るつぼ)にある戦場に突撃する北条主力部隊。そのままま っすぐバ管領とおまけの上杉当主がいる敵陣本隊を眼前にあらわれる。慌てふためくダブルバカ。逃げようとするが酔いすぎていたため足下がおぼつかずに動くことすらできない。後は討ち取るだけ、そのはずだったがすごい速度で間に割り込んでくる部隊がある。先ほどのまとも部隊だ。

「ちっ、さすがに対応が早いわね。さすが錬度がいいわ。」

槍衾に突っ込みかけた本隊を停止させる氏康。相手はその陣形のまま動きもせずに陣の後方から柔和な笑みを浮かべた無精ひげの老人。その後ろに超絶メタボ男がおり、逆方向からは気弱そうな優男が出てきた。

「なにようかしら?私はさっさとそこのバ管領を討ち取って孫九郎と仲直りしたいんだけど。」

「さすがにその理由はないだろう。」

綱成がいないためズケズケと本音を言う氏康に自重しろと突っ込む

典厩。それに対して柔和な笑みを浮かべた老人が一歩前に出る。そのまま後ろを振り返りすべての人間が安心するような声で
「さぁ、管領様。急ぎ平井にお戻りを。ここは私におまかせください。」
部下に両手を持たれて二方向に分かれるバ管領の上杉当主とおまけのもうひとつの上杉当主。
「どきなさい。いますぐに通すのなら命は助けてあげるわ。」
すると柔和な笑みを浮かべたまま老人が振り返る。そして
「命は助ける?なにを言っておるのだ?我々が見逃すならともかくそちらが見逃すと?成り上がりの謀反人、だまし討ちの代名詞たる北条を騙る伊勢氏の当主風情に・・・我が管領さまの命を奪い我々を見逃してあげると・・・舐めるなよ!!この下等種が!!」
ギロリとこちらを睨み付け刀を抜く老人。
「我は!!権威の体現者にして!!処罰の執行者!!我が長野家の使命は管領職につくものの敵を肉片!!塵芥の一つまでも消し去ること・・・きぇぇぇえええええ!!!!!」
関東管領家老・長野業正が突っ込んできた。
「あああああああああうお!!!!!」
後ろにいたメタボ男も奇声を上げるそれと同時に腹がへこみ筋肉が盛り上がる。そして北条軍に突撃する。そして同時に微動だにしない兵が大声を上げて突撃してくる。あまりにも異様だった光景に固まる兵たちだがお構いなりしに長野兵が倒していく。
「な、なんなのあいつ!!」
「ちょっとキャラが違いすぎるぞ!!!!!」
腰から刀を抜く氏康と典厩。そして氏康は
「者ども!!恐れるな!!最後の狂騒でしかない!!ひるむな!!我に続けぃ!!」
その言葉に闘志を取り戻し応戦する北条兵。どちらも退かぬ混戦模様だ。
「氏康殿!!」

援護に向かおうとするが巨大な棒が突き出され邪魔をされる。
「そ、そうはいきません。」
「邪魔をしないでくれ。」
「あの人を倒さないと・・・ぼくの国もとられると管領様が・・・」
「失礼だが・・・大名か？」
優男は少しオドオドしながら自己紹介をした。
「ぼ、ぼくは佐竹義重と申します。」
（はぁあああああ！！！）
こともあろうに関東屈指の猛将・鬼義重だというこの少年。
「すまないが年は？」
「こ、ことしで十二になります。」
さらにビックリ。まだ子供もいいところだ。
「すまないが少年少女を傷つけるのは趣味じゃない。下がってくれ！！」
ブンと刀を振り下ろすとビクっと一歩下がるが意を決して振りかぶって襲ってきた。それを軽くいなし鳩尾に一撃を入れると嘔吐してぐったりと倒れこむ義重。氏康のほうを見ると兵たちは北条の方が優勢だが氏康は長野親子に苦戦をしてかなり窮地だ。すぐさま向かおうとするが後ろから笑い声が聞こえ後ろを振り返る。
「ふはははははははは・・・・・」
義重が空ろな目をしながら殺気を撒き散らしながらこちらをみる。
先ほどとは別人だ。
「な、何奴か？」
「ふはははははははは・・・気が高ぶる・・・溢れる・・・はぁあああああああ！！！！」
体が変貌し白目をむきながらこちらに迫ってくる。
「バ、化けモンが！！」
刀を振り下ろすが生身の左腕で防がれる。
「化け物？ちがうな・・・俺は悪魔だ！！」
丸太のような太さになった右腕を振りかぶる義重。それを紙一重で

よける典厩だが風圧だけで吹き飛ばされる。
（ヤッベー・・・こりゃ死んだかな??覚悟きめといてよかった。）
体は緊張で動かないわけではない。逆に頭はすっきりしてきた。
「武田典厩信繁・・・参る!!!」
刀を青眼に構えなおす典厩。初めての偉業と異形への戦いだ。不思議な恍惚感が典厩にはあった。

開始！！河越野戦！！（誤字にあらず）（後書き）

続きます。本日中に武田に帰れる様にしたいな。数話投稿する予定です。さすがに二日徹夜だと眠いな・・・。

結成！！甲相同盟・おまけもいるよ。（前書き）

投稿エラー七回・・・勘弁してくれ。

結成！！甲相同盟・おまけもいるよ。

「おおおおおお！！！！」
もはや別物の怪物になった鬼義重こと佐竹義重。一撃食らえば跡形も残らないであろうその攻撃を不恰好かつ必死によける典厩。こちらからも切りかかるが生身で防がれる。
「ちょっとおおお！！」
防がれたらすぐに筋肉をもって刀をへし折る。おかげで戦場に落ちている刀を何振使ったかわからない。馬に乗って槍でついてみたが、
「俺を殺したければそのようなぬるい攻撃などせぬことだ！！！」
と槍のほうが折れてしまい借り物の馬を殺されるわけにもいかず馬ははるか後方に逃がしてある。
「ふはははははは・・・・・！！！」
また刀を折られる典厩。頭の中はこいつをどうやって殺して氏康の元に急ぐかで満杯だ。幸いにも北条軍全体では管領軍を押している。しかし将同士の戦闘では異質とも言える敵将に押されている。特に上州の黄班こと長野業正とその嫡子・吉業を相手にいている氏康と、鬼佐竹の当主・佐竹義重を相手にしている典厩はかなり危ない状況だった。
「はぁあああああああ！！！」
両手で持っている棒を振る義重。北条の兵を巻き込みながら典厩に迫る。その攻撃を両手で力を込めて両刀で防ぐ。しかし先ほどと同じようにひびが入って使い物にならなくなりまた近くに落ちているものを広い応戦する。
「ははははは！！北条の将とは毛並みが違うな・・・・。どこの将とてかまわん！！！死ぬがいい！！」
「くぅ！！」
力負けしている上に速度でも負けておりしびれていく腕で刀を握り攻撃を防ぐ、こちらから攻撃しても人間の体とはいえないほどの硬

度を持つ肉体に阻まれ武器を失う一方だ。
（正史と違って規格外なのは知っていたけど・・・これは本当に鬼だ・・・）
「どうした、どうした!!防戦一方か?」
戦う前にあった恍惚感は減っていき、逆に不安と焦りが増えていく。
自分自身でもまずいと思いどうにかしようとするが頭が一杯一杯でどうしようもない。
「まだまだ!!」
「きかぬぅわぁ!!そのような鈍刀では者の役にも立たぬわ!!」
また隙を見て脇腹に突きを入れるが肉体に入りもしない。また刀を拾い攻撃を防ぐ典厩。そこに援軍が現れた。
「武田の使者殿!!御本城様はいずこに?」
「長綱殿!!あちらに!!」
視線でいる場所を指し示す。そしてこちらの相手を見るとあんぐりと口を大きく開けて呆然とする。しかし、必死に意識を戻して
「種子島を構え!!」
直属の手勢・鉄砲隊三百に種子島を構えさせ、撃たせる。バンバンと大きな音が響く。
「ぬ、ぐううわ!!!」
さすがに堪えたのか倒れこむ義重。しばらく動かないことを確認して氏康の援護に向かう箱根殿こと長綱。まったく動かなくなった義重を見て典厩は惜しい人だったと心のそこから思い、次に
（これで佐竹三十六歌仙もなくなるのか・・・もったいない。）
溜息をつき後の世でバラバラにされても一つだけでも国宝級の財物がなくなったことのもったいなさを感じた。
「くくく・・・。」
笑い声に一歩下がろうとするが丸太のような腕に捕まり逆さ釣りにされる典厩。
「さすがに、さすがに痛かったが・・・この義重を舐めるでないわぁ!!!!」

何事もなかったかのように立ち上がる義重に恐怖を感じる典厩
（こ、こいつは人間なのか！！）
「ふふふ・・・。いったであろう。俺は悪魔だと！！」
そのまま叩きつける義重。衝撃で息が一瞬止まり咳き込む典厩。
「なかなか頑丈ではないか・・・ふん！！」
次の一撃。それにも耐える典厩。次々にドンドンと音を発てて地面にたたきつけられる典厩。
「こやつ、かなりしぶといではないか。そろそろ楽にしてやるか。」
すらりと腰から刀を引き抜く。今まで見てきた刀のなかでは数少ない青白く日光を反射した美しくも恐ろしく存在感がある刀だ。
「先ほど聞いた話だと貴様は武田の者だというではないか・・・・、なら血統の誼でこの長船長義で葬ってやろう。」
刀を抜くと同時に正中線が空く。そこに体を思い切り捻りこみ頭突きをあごに叩き込む。
「なんだ。そのハエのような攻撃・・・おお・・な、何だ。体がくずれ・・・」
前のめりに倒れる義重。今度は起き上がる気配はなく、悔しそうに体に力を入れようとするが動けない。
「な、なにをしおったか！！」
典厩は咳き込みながら頭から出る血をぬぐい義重に
「人間にはどうやっても後天的に鍛えられない場所がある・・・げほっ、げほっ。そこを攻めただけだ。」
それを聞くと悔しさをにじませた顔に悲しみを浮かべて
「ふふふ、これで俺も・・・いや、僕も終わりか。」
正気に戻ったのか体が元の優男に戻る義重。そして憑き物の落ちたような顔になり
「さあ、戦国の習いだ。この首もっていくがいい。」
覚悟を決めた言葉を投げかける。しかし典厩は
「・・・いや、持っていかない。あんたにはこのまま本拠の城に帰ってもらう。」

「ふ、僕が子供だからか?舐められたものだね・・・これでも戦国大名だ。恥をかかせるな!!」
激昂し始める義重に典厩はしゃがみこんで目線を合わせて話しかける
「舐めてるわけじゃない。お前はあの状態になると敵味方関係なく攻撃して傲慢になる。さっさと倒せた俺を倒さないで弄るようなことをしたのが証拠だろう。」
その言葉に目をそらす義重。本当らしい。
「おれも未熟者だから、よく分かる。力に酔うってことは、な。だから今回は遺恨無しでもう一回やろう。」
「しょ、正気でいっているのか?僕はあなたを殺そうとしたんだぞ。」
「人間ってのは危ういことや命の掛かったことをやると後々笑い話になるって父親がよく言っていたから問題はない。それにさっさと戻らないとまずいだろう?」
戦場の向こうでは綱成がおまけのほうの上杉当主を討ち取り、氏康たちも吉業に重傷を負わせて業正を退却に追い込んでいた。正史のとおり戦は北条軍の勝利に終わった。
「そのままここにいるとな、あんたも討ち取られてしまう。それはこちらも不味いんでね。」
さすがに後々に北条家を苦しめて東関東の最大の大名になるとは言わなかったが正史を見ると武田と北条が戦になったときに恩を売っておけばいいと思った典厩だった。
「まってろ、人を呼んでやるから。」
そういうと近くにいた佐竹の旗を持った兵を数名呼んでくる。心配そうに近づき数名で義重の体を持ち上げる。
「し、しばしまたれよ。名を聞いてよろしいでしょうか?」
「武田典厩信繁という。さっさと行った、行った。」
そういう典厩に対して義重が部下にささやくと部下の兵は驚くが義重の腰から大刀を引き抜いて持ってくる。
「殿がこれを、と。」

先ほど自分の命を奪おうとした刀を渡す佐竹の兵。
「これは受け取れない。こちらも思惑があるから見逃したのであって。」
「それでも受け取ってもらいたい。命を助けてもらい次の機会と成長する時間をいただいたのだ。これでも足りぬぐらいだ。」
受け取らねばここに残ると言い出しそうな義重に典厩が折れる。
「分かった。お預かりする形でよろしいか？」
「それでもかまいませぬ。十分にお使いください。ものども引き上げだ。物資はそのままで良い。」
部下に命令を出す義重。そして部下に支えられながら頭を下げ
「典厩殿。またお会いしましょう。」
と別れの挨拶までして帰っていった。それを戦場でありながら見えなくなるまで見送る典厩。そして見送った後で刀を見直す
（佐竹義重の愛刀か・・・長船長義ってことはこれが名高い八文字の刀か。）
佐竹義重が敵の騎馬武者を鎧兜ごと真っ二つに斬り切り落としたほどの強度と切れ味を誇る名刀だ。
「個人的にもかなりの報酬があったな。この戦。」
腰に有った中身のない鞘を放り投げ名刀・八文字腰に差しなおす。
そして氏康達がいる河越城に帰還した。

「典厩様。ご無事でなりよりです！！」
涙を流しながら喜びを表す工藤源左衛門祐長。鎧も顔も血だらけで正直抱き疲れるのは勘弁して欲しかったがこれだけ心配させると何もいえない。
「源左衛門も活躍したようだね。」
「はい。地味なりがんばりました！！」
聞いた話によれば敵将四人を討ち取り三人を捕まえたという。地味

どころか大活躍だ。
「あれ?民部は?」
「あ～・・民部どのはあちらで・・・。」
上を指差すとやぐらの上で大いびきを掻いて熟睡している教来石民部景政がいた。
「民部は戦には出なかったのか?やけに身なりが綺麗だが?」
「いえいえ、とんでもございません。単身敵陣に乗り込み敵を蹴散らした挙句、撤退した宇都宮を追撃して先ほど帰ってきましたので。」
「血糊はおろか、ほこりもついてないように見えるが・・・」
「はい。北条の皆様も驚いていました。しかし私以上に活躍し証拠も持って帰ったため陰口も出ません。」
「そうそう。綱成殿と氏康様は?」
「あ、はい。そうでした。典厩様が戻り次第本丸に来るように。と、仰せになりました。お待ちしていると思いますが。まずは身なりを整えませぬと・・・・」
源左衛門言うように先ほどの戦闘で鎧兜はへこみ崩れており小さな傷から血がにじんでいるためとても汚い。
「そういっても小田原にすべての衣類は置いてあるはずだ。このまま行っても問題はないだろう。」
とそのまま本丸に向かう典厩。去り際に源左衛門に民部の世話を押し付けておいた。

「失礼仕ります。典厩信繁入りまする。」
鎧のまま本丸に入ると箱根殿がやってきた。
「典厩殿。このたびはまことにありがとうございまする。さぁ、御本城様と孫九郎が待っております。」

さあさあと手を引いて連れて行ってくれる。そして最奥の部屋に通されるがそこで分かれようとする箱根殿。
「あれ?長綱様はお入りにならないので?」
「儂はまだ仕事があるゆえ多目周防守と残務をせねばならぬ。あやつは怠け者でな、見張りがおらぬと逃げてしまうのだ。でわな。」
小走りで去っていく箱根殿。急いでいるところを見るとかなり怠け者なのだろう周防守は。後々聞いた話だが陣形や作戦の詳細、戦後処理と一番がんばったのが軍師でもある周防守らしい。気を使ってくれたのかもしれない。
「失礼いたします。」
「典厩か?はいるといいわ。」
氏康からの許可を得て入るとそこには氏康と綱成が楽しそうな雰囲気で話していた。典厩は氏康と目を合わせ
(成功ですか?)
(大成功よ。孫九郎も久しぶりに新九郎と呼んで切れたわよ。)
(よかったですな。)
(これで・・・後はこちらのものよ。)
と目線で会話をした。最後の一言の内容が分かるまで時間はかからなかったがこれは後の話。
「典厩殿。知らぬこととはいえご無礼をした。」
頭を下げる綱成。だまされたとはいえ後には引かないらしくすがすがしい挨拶だった。
「こちらこそ、自分の目的のために北条全体を巻き込んでしまいもうしわけございませぬ。」
「よい。私達は結局その行動で助けられたのだ。問題はあるまい。」
「恐れ入りまする。・・・それで私を呼んだのは何用で?」
頭を下げつつ問う典厩に上機嫌に答える氏康。どうも綱成と仲直りしたことが相当に嬉しいらしい。
(予想が当たっていれば直接言わないとわからなそうだからな。綱成殿は・・・がんばれ氏康殿。)

「うむ。これは正式に叔父上や周防と話して了承してもらったのだが同盟の件は了承できない。」
「は?は、はなしがちがうではありませんか?!」
思わず大声を出す典厩だが上機嫌な二人の様子に少し黙る。
「そうそう、話は最後まで聞くのがいいわ。確かに今言ったように武田と北条の同盟は認められない。それはあくまで武田家の当主が晴信ではないからだ。形式的には立場のあまり強くない後継者でしかない上に諸国にはうつけとして名高い。しかし、私もうつけといわれつづけた者だ。あなたほどの人間が命をかけるだけの何かがあるのでしょう。そして同行している二名も同じようだ。だからあくまで同盟を結ぶのは晴信が当主になってからということだわ。つまり、それまでは不可侵条約ということよ。そして、孫九郎。あれをみせなさい。」
「はっ、典厩殿。これを・・・。」
書状を渡す綱成。それ読むと中には今川の軍師・雪斎からの書状だった。その内容は北条との和睦が掻いてあった。
「これは?」
「駿河の大馬鹿姫からの手紙でもあるわ。あの馬鹿は戦と政治が苦手なのだけど蹴鞠と金稼ぎは得意なのよ。ふふふ。」
楽しそうに今川の当主・義元のことを語る氏康。聞いていれば公家や大商人としては一流だが争いにかかわる戦国大名や戦国武将には圧倒的に、壊滅的に向いていない性格に能力らしい。
(この世界の義元はどうもかなりの馬鹿らしい。多分この世界はイメージと能力のバランスと知名度によって変わるらしい。第一病弱で裏切り上等、弱肉強食な武田信玄が活発かつ約束を守り続ける人物だもんな。佐竹義重も政治に十歳になる前から関わっていたって逸話からかもしれないがかなり若いし。)
そう考えている典厩は何事もなかったように手紙を返して氏康の言葉を待つ。
「つまりね。私達北条家は今川と武田と同盟を結びたいのよ。と、

いっても今川はおまけだから実際は甲相同盟ってことになるわね。」
「では・・・・。」
「今は秘密裏ってことで公式の文面にはできないけど密書を渡すからそれを晴信に渡しなさい。晴信が家督を得てからよ。後の話はね。まぁ・・・・獲るのかもしれないけど。」
くすくすと笑いながらでも先を読み続けて生き馬になろうとする北条氏康に多少恐怖を覚えるがこちらが約束を守っていれば敵対することは無いと安心もした。
「それだけじゃないのよ。ここに呼んだのは。」
「は？」
「武田家のあなたにはこの話はいいでしょうけど。旅芸人として参陣したあなたに褒美を上げないといけないわ。孫九郎。あなたはなにがいいと思うかしら？」
「見たところ刀を使うため銘の入った刀をお授けになればいいと思う。」
その言葉に嬉しそうにうなずく氏康。
「さすが孫九郎は私のことを良く分かっているわね。ちょっとまってなさい。」
部屋を出ると隣の部屋から紙と一振りの刀を持ってきた。
「孫九郎。あなたはこれから玉縄の城に詰めてもらうわ。これからは私の側で支えなさい。」
「かしこまりました。」
「そして信繁。あなたにはこれをあげるわ。」
そう言って刀を渡してくる。
「これは？」
「長船長義の刀で渾名を山姥切（やまんばぎり）とでも名づけましょうか。」
その名前を聞いて噴出す典厩。即座に断る。
「少しお待ちください。私は先ほどの戦の際に同じ銘の入った刀を手に入れました。さすがにこのような名刀を二振りも手に入れては不気味です。」

「そうは言っても今あげられるものはこれ以外にはないわ。それに下した物を断ると縁起が悪いわよ。黙って受け取りなさい。」

「そうだぞ、典厩殿。さぁさぁ。」

二人にそういわれると断るわけにいかなくなった典厩は謹んで受け取った。

個人的にも主家的にも大いに実りある戦だった。

結成！！甲相同盟・おまけもいるよ。（後書き）

くそう。目が覚めたら日を越していた。十五時間以上寝るなんて・・・。

甲州武田の乱・史実には無い大事件（前書き）

史実に無い事件発生

甲州武田の乱・史実には無い大事件

「むむむ・・・」
「先ほどからどうしたのですか？典厩さま？」
相模から駿河を経由して甲斐に帰る途中、するが都会の国境沿いで工藤源左衛門祐長が典厩信繁に問いかける。
「ん？」
「いえ、相模からここまで人目が無ければ、ずっと唸っているではないですか？」
「え・・・そうか？」
「自覚が無いのですか？」
溜息をつきながら答える源左衛門。
「何か心配事でも？」
「うむ。源左衛門の存在感なのさにな。」
「そうですね・・・。私ったら雪斎様に気付かれず弾き飛ばされてしまいましたからね・・・・。」
駿河の今川館に寄ったときに出迎えてくれた今川の軍師・太原雪斎様だ。最初は外交官も兼ねているので温厚そうな人物を想像したが実際は崩壊した世紀末で巨馬にまたがっているような覇王だった。先行していた源左衛門が馬ごと弾き飛ばされたのは記憶に新しい。
「って！！違いますよ！！その前から唸っているのですよ。」
「あ～・・・・。たいしたことじゃない。気にしないでくれ。」
「私はいいのですが。民部殿は夜中も唸っているためすっかり寝不足で・・・・」
後ろを振り向くと目を閉じて馬の上でカクカク舟をこいでいる教来石民部景政がいる。よく落ちないものだ。
「う～ん・・・。実際くだらないことだしなぁ。男にはあるんだよ。くだらないことで悩むのは、な。」
腰から水筒を取り出し口に含み飲み始める典厩。それをみて考えて

いた源左衛門はハッっとして赤くなり答える。
「ま、まままま、まさか典厩殿は女日照りで溜まっておられるのですか!?それでどうやって私たちを気にさせず抜け出そうと・・・・」
「ぶほぅ!!!」
まったく見当違いの反応を示す源左衛門に水を思いっきり噴出す典厩。
「な、なんてことを口走るかぁ!!!」
ガァーと吼える典厩。
「え、違うのですか?私は兄上に下らないこと。と言われれば、そういうことだと思えといわれましたから・・・。てっきり・・・。」
「違う!!違う!!」
「それでは?」
頭を二度三度掻いてあきらめたように話す典厩。
「実はな。同じ銘の刀をふたつもらってな。片方は賜ったものだから使わないわけにも行かないし、逆にもう一本は預かり物みたいなものだけど使ってくれと言われているから使わないわけにもいかない。だからどうしようかと。」
「え、そんなことですか?」
呆れたような顔をする源左衛門。
「そんなことって言われてもな。たとえば源左衛門、あなたが晴信・・様から刀を賜ったとしたらどうする?」
「無論、戦場で使い常に身に着けています。」
当然の様に胸を張る源左衛門。
「なら将軍から刀を賜ったとしたらどうする?」
「え・・・。それは・・・ちょっと・・・。うむむ・・・。」
比べるわけにいかないため悩む源左衛門。
「なぁ。そうだろう。」
その言葉に納得したように頷く源左衛門。そこに光明を与えるものがいた。熟睡中して馬にもたれかかっている民部だ。

「りょ～・・ほ～・・・使っ・・・・ぐ～・・。」
寝言で答える民部、その言葉に仕方ない。がんばるかと覚悟を決める典厩。
「そ、そんなんでいいのですか？」
「まぁ、くだらないことはくだらないことで解決するものさ。」
と、言いながら両腰に大小四本差込む典厩。
「バランス・・・いや、均等が取れてこれはこれで。」
などと納得してしまうほどしっくり来たため良しとした。悩みがなくなりすっきりする典厩と、それに対して考え始まる源左衛門。どうも苦労人になりそうな感じだ。
「そういえばこの旗はどうしましょうか？」
必要だと思って持ってきた武田の旗も使わなかったためそのまま持って帰ったのだった。
「これを北条に上げて同盟の保険というか、裏切ったら攻めていいという約束をする予定だったがまさか男女の人間関係で解決になるなんて予想しなかった。」
「ええ！そのような危険なまねをする予定だったんですか？」
「そこまで譲歩しないと同盟なんて結べないと思っていたんだよ。」
「し、しかし・・、旗を与えるということはやはり危険かと・・・」
「まぁ、使わなかったんだからいいじゃないか。これは晴信様に返せばいいことだしな。」
「まぁ、そうですよね。使わなかったんだからいいですよね。」
ごまかそうと笑う典厩に忘れようと笑う源左衛門だった。

「ん？」
甲斐の国境に着くと関所でなにやら問題があるようだ。何人もの行商人や浪人が列を作って関所に並んでいる。

「ならんならん!!現在、甲斐の国に入ることができるものは何人たりともおらぬ。さぁ、戻った!!」
十五名ほどの兵隊が槍や弓を突き付けて追い返しをはじめている。
しぶしぶと帰り始める行商人と不満そうに戻ろうとする浪人たち。
その様子を見ていた典厩はすぐさ民部をおこして自分は頭巾の上に笠をかぶった。
「そこの騎馬の者も戻った戻った。先ほどから申しているように甲斐の国には何人たりとも入れるわけにはいかぬ。」
こちらに近づき槍を向ける兵士。しかし、馬に乗っている人物を見て驚く。
「こ、これは教来石さま。」
「ん～。」
伸びをする民部。そしていつものユックリかつボンヤリとした口調でたずねる。
「ど・・・しい～・・・た～・・・。」
槍を下げて答える兵。典厩たちの中で唯一信虎の直臣なのだ民部は。
しかも官職までもらうほどの活躍をしている家臣でもあり有名なのだ。
「はっ!!こちらに・・・・」
三人を関所の中に連れて行く兵。どうも大きな声ではいえない内密なことらしい。
「実は現在甲斐の国は信虎様と晴信様が戦を行っていまして・・・南の大部分は晴信様に御味方いたしたため他の国に迷惑をかけてはいけないと仰られまして。そういうわけで我々は関所で人を返しております。」
その内容に三人は驚き声も出せない。
「じょ～・・・きょ～・・?」
「状況でございますか?何せ、信虎様が奇襲を仕掛けたため新館はあっという間に落城し、晴信様は御坂城と本栖城に兵を配備して下山城にて指揮を執っておいでです。それに前もって調略しておいた

穴山様と小山田様の援軍によって盛り返しましたが悔しながら戦況はすこしばかり晴信様が不利といった模様でございます。」

（信虎と信玄が内乱？そんなものはなかったはずだ・・・いや、あちらの常識にとらわれたらいけないのは分かっていただろう。）

「それで主だった将はどうなった？」

自問自答していたがさすがに我慢できなくなったため口を出す典厩。

「えっ、そういわれましても。なにせ私は命令しかされておりませぬ。細かいことに関しては分かりかねます。先ほどの状況も先ほど甲斐から出た行商から聞いたもので。・・・確か南北に分かれているとは聞きましたが・・・。」

（数日ってまだ俺たちが甲斐から出て五日と立っていない。まさか入れ違いざまに内乱になったのか？）

「晴信様は下山の城でいいのか？！」

「は、はい。そこにおられるのは間違いございません。」

馬の腹を蹴り上げて急ぎ関所を突っ切る。精子の言葉も何のこもあろう。

（ここで晴信が負けても俺たちには関係ないかもしれない。しかしもしも俺たちの世界に関係が出たら・・・・・。）

武田信玄が関係する物事は多い。もし負けてしまったら戦国時代が終わるのが遅くなるかもしれない。治水技術も落ちるかもしれない。徳川家康が天下を治めないかもしれない。織田信長が不利ゆえに機転を利かせることもなくなるかもしれない。などなど頭に浮かぶがなにより命の恩人で信頼して典厩の名前をつけてもらったことに対する裏切りかもしれない。

「先ずは状況だ。状況を知らないと・・・・・。」

馬を飛ばして下山城を目指す典厩。典厩。いや義信が知っている限り下山城はたいした防備もない屋敷に毛が生えたようなものだったはず。まだ御坂城や本栖城の方が楼上には向いているはずだ。とにかく馬を飛ばす典厩。目の前が見づらくなるため頭巾はもうしばらく前に捨てた。駆ける駆ける。そして常人では驚くほどの速さで下

山城に到着する。
「なにものだ!!」
「じゃまだ!!・・・うおっと!!門番!!典厩信繁が来たと伝えろ!!」
馬で城門を抜けようとしたが数日前まで馬にすら乗れなかった者の馬術ではなく勝千代の愛馬・黒駒に乗せてもらっただけだ。黒駒がひっくり返ると落馬しながら門番に掴みかかり言上を伝えてもらう。
「ど、どうぞ。晴信様がお待ちでございます。」
イライラしながら案内の兵に連れられて部屋まで通される典厩。そして中央に位置する部屋に通されるとその奥の部屋からドスドスと荒々しい足音が聞こえてきた。
「おう、どうした?典厩よ?」
余裕そうな獰猛な笑みを浮かべた晴信が出てきた。あわてているのが馬鹿らしくなるような余裕をまとっている。それを見て今までの緊張が切れて溜息とともにへたり込む典厩。それを見て爆笑する晴信だった。
「し、心配して損した気分だ。」
「いやいや、まぁ、よく来てくれた。民部は?」
ここでも忘れられる源左衛門。不憫すぎる。
「後から追ってくるはずだがな。」
「なにを怒っている?」
「別に・・!!」
あわてていたのが恥ずかしくなり照れ隠しのように怒り興奮する典厩。晴信の後ろには山本勘助がいる。
「勘助殿。状況は?」
「ぼちぼちといったところでしょう。今は不利ですが晴信様がこのような戦で負けるわけがありません。」
「そうだ。このあたしが負けるか。あはははは。」
「すげぇ、自信だな。まぁいい。こっちの将は?兵力は?」
この質問にも勘助が答える。

「そうですな・・・。主だった将だけを上げれば大抵はこちらに付いておりますが、逆にあちらは兵力がこちらの十倍強ありますな。」
「主だった。ってことは向こうにもいい将はいるんだな？」
「無論です。と、言ってもこの数名だけですが。」
出された紙を見る典厩。その紙には
小幡山城守
原美濃守
横田備中守
多田淡路守
秋山伯耆守虎繁　別名・信友
とここまででも甲斐の国の超一線のメンバーだ。しかしその後の三名がかなり問題だった。
真田弾正幸隆
真田兵部昌幸
飯富兵部少輔虎昌
とかかれた三人だった。
（・・・・・・あれ？見間違いかな？）
と思い何度も見渡すが変わり様がない。そして
「はぁあああああああ・・・！！！！」
と大声で叫んでしまう。それに驚く晴信と勘助。叫んだ典厩は放心しながら、終わったかもしれん・・・。と呟き始めた。さすがにまずいと勘助に下がってもらい二人だけになる晴信と典厩。二人だけなので晴信と典厩といえばいいだろうか。
「はぁあああ、肩がこったな。さすがにまだなれないな。この演技には。おいっ、お～い。」
パシンパシンと少し強めに頬を叩くと正気に戻る義信。
「あ、おお、ホル信様。」
「だれだよ。ホル信って。今は勝千代でいいよ。勘助も下がっているからな。」
多少おかしいがタメ口で話し始める義信。

「それで。何で叫んだんだ?」
「いいや。なんでもない。」
それに怪訝そうな顔をして勝千代は
「お前の知っている未来に関係あることか?」
思わず身をそらしてしまう義信。
「ほう。細かいことは教えてもらったらつまらないから教えなくてもいい。誰が気になった?秋山か?飯富の爺か?」
「いや、この真田って奴。」
「そんなに驚くことか?真田なんて可もなく不可もない人物と聞いているぞ?娘のほうも目立たない人物とのことだが・・・」
その言葉にカッと目を見開き義信は
「そんなわけがない!!」
と叫んだ。ビビる勝千代。
「そ、そんなに優秀なのか?」
「細かいことは言わないほうがいいみたいだから言わないが・・・・親のほうは勝千代が落とせなかった城を一日で落としているし、子供のほうはなんと言うか・・・」
「い、いいよどむなよ。」
「四万の兵を二千で撃退したり、国力が百倍違う大名が恐れて暗殺しようとしたり逸話には事欠かない人物だ。」
ポカーンと間抜けな顔をしている勝千代。しばらくして乾いた笑い声が響く。二人が笑っているのだがかなり怖い。
「味方に引き込んだほうがいいと思うんだが・・・」
「あ、あたしもそう思う。すぐさま使者を送ろう。」
外にいる勘助に念には念を押して味方に引き込むように念を入れて頼み込んだ。さすがの勘助も事の重大さを感じたのか重々しく承る。
「できるだけ直接戦わないのがいいと勘助と相談して切り崩し作戦をしておいてよかったかもしれない。」
勝千代は肩を動かしながら安堵した顔をした。それをみて
(まぁ、実際は信玄のほうが強いしな。織田信長公の野望をやると

真田なら粘れても信玄が攻めるとこっちの兵隊が溶けていくからな。あれはトラウマだった。）

などと発破と保険をかけたことを安堵した義信だった。あとの武将もできれば全員仲間に入れたいと思いながら勝千代を見ると肩と首をしきりに揉んでいる。態度を見ると意識的なのは分かるがこうも連続で行われるとさすがに気になる。

「そんなに凝るのか？」

「触ってみれば分かるさ。ほれ。」

背中を向けて触れという勝千代。呆れながら肩を触るとガリゴリと音がしそうなほど凝っていた。驚きながら首と腰を触ると同じような感触だった。

（ど、どれだけ凝ってんだぁ！！数日前にほぐしただろうが・・・）

「はぁああ・・・。分かった後で揉み解してやるよ。」

「いやぁ、悪いね。」

「あれだけ態度に出ていれば、なぁ。」

「荷物は全部持ってきたから安心してくれたまえ。」

はいはい。と生返事をしながら部屋に凝りの対処法を考える義信だった。

甲州武田の乱・史実には無い大事件（後書き）

くそう、オリジナル作品の方がぜんぜん完成しない。約束の一週間まで後二日なのに。と、自分自身を追い詰めないとやる気が出ない作者です。こういうのはできれば毎日更新しないとやる気がなくなっていく感じがするので徹夜しても書いてます。

人員募集・典厩信繁隊（前書き）

調略が得意な将といって武田信玄が上がらないのはなぜだろう。やはりＢＡＳＡＲＡの影響が強いのかな？

「む、む、む。」
勝千代の声が途切れ途切れに聞こえる。別に疚しいことはしていない。ここ数日は凝り固まった体をほぐすのが義信の役割になっている。義信自体はやりたくなかったのだが勝千代がわがままを通すため仕方なくやっている。
「・・・なぁ。」
「むぅ。なんだ?」
極楽状態の勝千代とその上にまたがり背中をもんでウンザリしている義信。
「今は、内乱状態だよな?」
「あ、当たり前のことを聞くな・・・。もっと下の腰だ。」
「真田のほうもいまいち反応が薄いんだよな?」
「そうらし・・・い。どうも使者の甘利の爺がしくじったからな。おかげで・・・爺は部屋に謹慎してしまった。」
グリリリとかなり強めに押す。
「ちょ、ちょっと痛い。」
「それで戦力差は広がる一方だよな。」
「う・・・ん。なにせ、信濃の豪族を味方に引き込んだらしい。」
「・・・それなのに・・・」
思わずまぶたを押さえる義信。悲しくなってきた。
「こういうときは余裕を持たないと・・な。」
「持ちすぎだろう。・・・・はぁ。」
背中を揉み終えて次は肩だ。普通ならやめるが染み付いている上に性格もありきっちりやる。
「それで何か考えはないか?義信。」
「なんで俺任せ?」
「言っちゃ何だが、あたしはこの二年間ボケ気味だったせいかな。

どうもズレがあってな。戦のほうはともかく政治力がもどっていないらしい。勘助が言うにはあとすこし経験というか刺激が必要らしい・・・なぁ。」

（せ、政治力が低い信玄っていったい。戦馬鹿ってことか？だめじゃん。）

「で？俺に何をしろと？」

「そこなんだよねぇ。戦の作戦なら勘助。実践なら甘利の爺がいなくても板垣の爺がいるからいいしな。」

「あれ？高白斎さんは？」

「駒井の爺なら民の慰安に行っているからおらん。だからな・・。」

一呼吸ためて勝つ千代はいう。

「調略をやってもらおうと思う。別に謀略でもかまわんよ。」

「は？」

目が点になっているだろうなぁ。と自分自身思ってしまうがさっさと答えないと全部負かされそうなのですぐさま。

「引き抜きやります。から、勘弁して。」

「そうか、そうか。では人員や目標は義信に一任するからがんばれ～。」

コンビニでパンを買う軽い感じで答える勝千代。あきれながらもしっかり引き受けマッサージもしっかりやる義信。そのまま勝千代が寝るまでマッサージは続く。

翌日

「と、晴信様に任されたのでがんばりましょうか。」

「どういう意味かわかりませぬが、拙者に何か御用でしょうか典厩殿？」

説明を一字一句間違えずに勘助に伝えるが昨日の自分のように頭を

抱える勘助。
「実はこれから調略に行かねばならぬので人員を補充してほしいのですが？」
「人員の関係は高白斎殿が行っておりますのでそちらにいかれてはいかがかな？」
「いやいや、武士はいいのですよ。私がほしいのは三ツ者（しのび）なのですが・・・。」
「そういうことならば・・・人員の特徴と名前を書いておりますゆえこちらをお読みください。」
紙に書かれた人員名を確認していくと・・・ある名前があった。
「望月信永？」
「ああ、そのものですか？実は・・・・・」
説明しようとする勘助を手で制して言葉を続ける典厩。
「佐久の望月家でしょう？あの甲賀で勇名をはせている。」
「知っておるのですか。なかなか博識でいらっしゃる。さすが天命の者ですな。」
ハッハッハと笑う勘助を見て頭を抱える典厩。なんか癖になってきたのかな？頭を抱えるのは。と思う。
（な・ん・で。典厩信繁の三男がいるんだよ！！！）
頭痛がしてきて更に頭を抱える典厩。自分の名前を持つ人間の子供がいれば頭が痛くなるはずだ。
（じ、時代考証なんてないのかなぁ？）
遠い目をし始める典厩を勘助がたしなめる。
「すみませぬ。」
「望月殿でよろしいでございますか？」
「あ、はい。お願いし申す。できれば民部殿と源左衛門にその望月殿以外にあと一人お願いしたい。」
少数精鋭で行きたいので五名で敵地潜入すると決めていたため三名は決定したので最後の一人はお任せした。実際はこの頭痛を治めたいのでバフ〇リンを飲みたかったので丸投げしたのだが・・・。

「かしこまりました。では・・・」
対話を終えて分かれる二人。結果・夕方に出発することになった。

「人員確認!!」
前日に必要なものを用意しておいたため人員のみを確認する。確認といっても自分を含めての点呼でしかない。
「一!典厩信繁!!」
自分を指差して次に前に並んだ四名を次々に呼んでいく。
「二!」
「く、工藤源左衛門。ここにいます。」
「三!」
「ｚｚｚ・・・・」
「よ、四!」
「お初にお目にかかりますのじゃ。望月八千代信永なのじゃ。」
「・・・・・五!」
「豊富村の宗助です。の、農民ですががんばります。」
(な、なんだこの濃いメンバーは・・・・・)
上から超絶地味・のんびりノッポ・のじゃロリ・金髪少年。前半二人は実際にいるかもしれないが後半二人が実際に中世日本に居るか?いや、いない。特に金髪少年。
「え、えっと。はじめまして・・・。先ほども言った様に私が典厩信繁です。」
屈んで挨拶をする典厩。二人とも中学生か小学生高学年ぐらいの慎重しかない。
「は、はい!!勘助様から推挙いただきました。足を引っ張らないようにがんばります!!」
ガッチガチの宗助とは逆に
「うむ、うむ。宗助とやらがんばるがよいぞ。」

挨拶もそこそこに目上に出ようとする信永。その対応にも頭が痛くなる典厩。
「源左衛門。」
「はっ！何でしょうか？」
「あの二人は本物だよね？」
質問の意味をつかめないようで首をかしげる源左衛門。それに対して典厩は謝る。そして夕方にもなるのに熟睡中の民部。源左衛門の話では昨日の昼からずっと寝ているそうだ。
「民部殿～？」
「お・お～お～・・・ぐ～ｚｚ・・・」
「だめだ・・・。」
ガクガクと肩を揺らして起こそうとするが声が漏れるだけでおきない。あきらめて北条のときのように馬にくくりつけていこうかと思ったが今回は騎乗するのは典厩だけなので今回も借りた黒駒に典厩と同乗させる事になった。
「小生なら馬に追いつけるゆえ荷物は任せたぞ。宗助。」
謙った一人称だが態度はどこか尊大とよくわからない信永と大量の荷物を持ながらぺこぺこする宗助。
「ど、どうすりゃいいだ。と、いうか、どうなるんだよ。このメンバー・・・・。」
頭痛を抑えながら一生懸命働く源左衛門を見て唯一の良心だと安堵した典厩だった。

人員募集・典厩信繁隊（後書き）

宗助の正体はわかる人は一発でわかる人物です。オリジナル小説のほうも復活しました。こちらはプロットを治しながら書いていくので二日に一回更新します。

狂気の勝負師・真田弾正（前書き）

本日から二日ほど出張します（自営業なので仕入れ視察。）今の時代珍しく携帯電話を持っていない作者はもしかしたら更新できないかもしれない。

狂気の勝負師・真田弾正

「やれやれ・・・・。」

目的地である真田屋敷を目指して出発した一行。途中で十名ほどの山賊に襲われる事態があったが源左衛門と宗助にあっという間に倒された。勇名高い内藤昌豊である源左衛門ならともかく、ただの農民出身の宗助があそこまで強かったのは意外だった。頭も切れるようだったので思わず出が武士か医者かと聞いたが先祖代々農民とのことだった。

（直属の部下じゃないけど内藤・馬場という一国クラスの名将がいるとは男冥利というか武将冥利に尽きるというものだなぁ。それにしても農民出身の将って武田にあまり居ないけど、誰かな？失礼だけど高坂弾状って感じなほどいい男でもないし。多田満頼あたりかもしれないなぁ・・・）

などと自分の知る武田の将と宗助を比べていた。相変わらず顔隠しの頭巾と化粧をしているが楽しそうに宗助を見ている雰囲気がする典厩に対して源左衛門が質問をしてきた・

「典厩殿？なにか面白いことがありましたか？」

「実はな、あの宗助を武士として取り立てようと思っているんだよ。五百貫ももらっていて勘助殿と違って俺には直属の部下っていないしな。」

「ええっ！！私はずっと典厩様の直属だと思っていましたよ！！」

ショックそうに顔を青くして源左衛門は叫ぶ。

「え？」

「え？じゃないですよ！聞きましたよ、典厩様が願って私を呼んだのだと。」

そういえばそうだったと今頃思い出した典厩。

「なので私は工藤の家から分家した形をとってしまいました。それに晴信様も扶持（ふち）は典厩様から天引きと聞きましたよ。」

「だったら直属の部下だったね。完全に忘れてた。」
はっはっは。と笑う典厩だが冗談にならないほどショックを受けている源左衛門をみてさすがに悪いと思い話を変える。
「あ～・・・・。分家すると何か悪いことがあるの？」
機嫌が悪い源左衛門だったが直属の上司にたずねられたら答えないわけにはいかず答える。
「・・分家すると本家、実家から独立したことになって自分の財産以外はもっていかれるんです。なので私の全財産はこの身と晴信様の屋敷にある部屋の私物だけです。」
（それって早い話が無一文に近いってこと？）
ヤッベーともはや癖になった頭を抱える行動をとる。そして源左衛門にたずねる。
「源左衛門は大体どれぐらい扶持がほしい？」
まだ内乱中のため実際は空約束になるかもしれないが一応書類上では五百貫もらっている大身なので塗りでない給料なら払おうと思ったのだ。
「え？どれぐらい・・・・・。えっと・・・典厩様におまかせします。いきなり言われましてもよくわかりませんので・・・。」
「じゃあ百貫ぐらいでいい？」
百貫とは今の日本円にして約四千万円ほどの収入だ。ちなみにこのころの工藤家は作者の調べでは約十五貫ほどだ。
「ひゃ、ひゃ、ひゃ、百貫？！」
「安かったのか？けどな・・・これから人材を一一「高すぎるんですよ！！！」
言葉を切ってまで叫ぶ源左衛門。
「じゃあ五十貫ぐらいでいいか？」
「それでも高いですけど・・・・用人という形でお願いします。」
用人とは陪臣（家臣の家臣）の家老みたいなものだと考えてくればわかりやすい。要は副官や補佐官だ。
「かまわないが・・・」

それでいいのかと目で問ってしまう典厩。なにせ武田四天王の一人をわずかな額で雇ってしまうのにはさすがに抵抗があった。

「で、では名をください。苗字を変えるのは晴信様が許可を下さらねばいけませぬが、名をいただければ幸いです。」

（と、いってもきまってるよなぁ・・・けど苗字を変えるときにまた名前を変えるから慎重に考えよう。）

としばらく頭をひねってかんえがる典厩。そして

「祐長から‘長’をとって信繁の‘信’はさすがにあげたら不味いから‘繁’とって繁長ならどうだ？」

（上杉に似たような名前のやつがいた気がするけど、まぁ、いいか。）

などと簡単に決めたが源左衛門はかなり喜んでいる。どうも親と兄以外に物をもらうというのがはじめてらしい。相変わらず不憫すぎる。

「わ、わかりました。確かに受けます。受けさせていただきます。では、苗字が変わったときも名前をお願いします！！」

それから鼻歌を歌いながら飛び跳ねながら行動する源左衛門。頭の中を見たら間違いなく花畑だろう。そんなこんなことをやっているうちに目的地に到着した。

「兄上、晴信様から典厩信繁殿が使者としてまいられましたが？」

顔に十字の傷がある中年の男性・矢沢源之助頼綱が苗字が違う実兄に伺いを立てる。

「ククク・・・、そんなに緊張することはあるまい・・・・。なぁ、源之助・・・。お前の見立てではどう・・・だ。」

それに対して数歳ほど上の白髪総髪の男が答える。この屋敷の主人・真田弾正幸隆だ。もともとは信濃の、いち武士団の頭だったがいろいろな理由があり信虎に使えることになった。

「私めには皆目・・・。現在喜兵衛が対応する予定ですが・・・。」
その言葉に幸隆は暗い笑みを浮かべたまま一言。
「派手にやりな・・・。派手にな。」
クククと笑う幸隆を後にして部屋を出る頼綱。
（わが兄ながら恐ろしい人物だ。周りから物の怪扱いされるというのに実にうまく溶け込む。もはやこの武田家では兄上を見切る人間はいるまい・・・。）
「喜兵衛には兄上の言いつけどおり・・・やってもらおう。」
そのまま門に向かう頼綱。

「晴信様の使者・典厩信繁殿でございますな。私はこの真田家の用人を務めさせていただきます、矢沢源之助頼綱と申します。」
「こちらとて・・・。私は典厩信繁と申します。このたびはこちらのわがままを通していただき、ありがたく・・・」
お互いに挨拶を交わすと頼綱が周りに見られては困りますと中にいれる。
「刀は預けなくてよろしいのですか？」
普通なら刀を預かるところだがこの真田家では問題がないように頼綱は手を振り刀を受け取らない。
「何があるかわかりませぬから・・・どうぞ。」
などという意味深な言葉を告げる頼綱に警戒心が最大になる工藤源左衛門祐長もとい繁長と宗助。少し身構えながら動く信永。それに比べてまったく緊張していないように見える典厩と民部。民部のほうは寝ぼけているのが正解で、典厩はといえば
（ははは・・・。戦国有数のチート一族だ。何がっても不思議じゃないや～い。）
と諦めがあり、どうにでもなれいった感じが本当だ。そのまま屋敷の敷居をまたぐ使者団。
「父上に仇成す者か！！先日の者のように成敗してくれる！！」

と大声が聞こえ名乗り始める。
「わが名は真田兵部昌幸なり！！」
「おなじく伊豆昌輝！！」
「そして安房信綱！！われら三兄弟をおそれるならかかってくるがいい。」
まったく同じ顔の三人の少女が現れた。少女といっても鉄砲・斧・三尺刀を持って鬼気せまる迫力を放っていれば恐ろしくなる。寝ぼけていた民部ですら刀を抜いてしまうほどだ。
「両者そこまででございます。」
その対応を見て間に入る頼綱。三つ子姉妹も武器をしまう。
「典厩様をのぞく皆様はあちらでお待ちを兄上に会う資格があるのは典厩さまだけでございます。」
「な、何故ですか？」
疑問を口に出して怒る源左衛門。それに答える頼綱
「よく御覧なさい・・・。」
三姉妹から武器を受け取り源左衛門に渡す頼綱。その武器を見て驚く。なにせ今まで鬼気せまる迫力で持っていた武器がすべて木製の偽者だったのだ。
「お分かりでございますか？このような状況下でも相手を見れぬお方に兄上に合う資格はございませぬ。この前の甘利殿はこの試験の後、怒り攻撃してまいりましたが丁重に反撃して追い返しました。あなた方も恥をおかきなさいますか？」
そう言い篭められる源左衛門。何か言おうとするのを手で制する典厩に一礼をして案内の女中に従って部屋に入っていった。
「さすがにございますね。さすが晴信様に五百貫で迎えられる有才のものです。胆力もすばらしい。さあ、こちらに兄上がございます。」
感心したように案内をする頼綱を追う典厩だが、あの場面では実際は
（真田三兄弟が逆～！！それで三つ子？！）
と驚愕していたため反応できなかったというのが正解だ。それを冷

や汗を隠しつつついていく典厩。そして陽のあたりにくい一室に通される。

「どうぞ・・・・・」

と自分だけが通される。その奥にいた人物に恐ろしいまでの恐怖という感情を覚える。佐竹義重にあった肉体的な恐怖ではなく精神的な、なんともいえない不可解な恐怖だった。

「さあ・・・。かければよいではないか。座らぬのか?」

「申し訳ございません。では・・・・。」

恐怖を押さえ込み座る典厩。しかし圧迫感によって座ると同時に冷や汗が吹き出る。

「ククク・・・。どうも顔色が悪いようだが・・?」

「いえ、失礼を・・。早速本題を――「私を調略しに参ったのであろう?」

本題を告げる前に本題を答えられうなずくことしかできない典厩。

「そう硬くなる事もあるまい。このような時期に参られる用件とはこれ以外にありますまい。」

「そうでございますな。それお返事は、いかが?」

「・・・そちらの条件は?」

「お望みしだいでできることは・・・。」

途中まで言いかけるとするとひどくつまらなそうな顔をして迫力が強まる。

「失礼を、なれば何がお望みでしょうか?」

「ククク・・・・。」

笑うだけで答えようとしない。

「どうだ?当ててみるがいいさ?そのために使者になったのだろう?」

「そのとおりで・・・、なれば。少し時間をいただきたい。」

それにうなずく幸隆。考えははじめる典厩。

(真田幸隆か・・・、恐ろしい人物だ。よく考えろ、俺。)

しばらく考え続ける典厩。そしてある考えにたどり着く

「では賭けをしませんか?」
「ほう。なぜだ?」
「真田の家紋は六文銭。これは三途の渡し賃と聞きまする。それほどの覚悟がありながらなんのよくも示さないとなれば楽しみがほしい。それも命を懸けるにふさわしい大勝負が!!と思いまして。」
ニヤァと恐ろしくも愉快そうな表情を浮かべる幸隆。どうやらあたりらしい。
「ククク・・・。その考えにたどり着いたのは父上と昌幸だけだが・・・他人に知られたのは初めてだ。」
「ありがたき。」
「なら聞くが俺を真剣に楽しませる方法、勝負とやらはあるのか?」
それを言われると典厩はたずねる。
「あなた様の得意なものは?それであなたを負かしましょう。」
「大きく出たな・・・。いいだろう・・・・。」
スッと立ち上がり隣の部屋に行く二人、そこには普通の将棋盤のかるく十倍は大きさはある将棋盤があった。
「将棋でございますか?」
「ああ、大局将棋・・・・だ。」
上座に幸隆が座り下座に典厩が座る。大局将棋とは将棋で一番大きい将棋だ。終わるのに一日以上かかる規格外の将棋。
「それで?ただするのではありますまいな。」
「ククク・・・よくわかっているな。ただ将棋をするのはつまらぬ。なのでこの将棋は駒に賭けを入れる。この多量の駒から一割、四十枚にかけるものを決めておく。それは紙に書いておくからごまかしはきかん。」
「かけるものとは?」
「好きに賭けるといい。俺は家族と命をかけてこの遊びをしているがな・・・。ククック・・・・狂気の沙汰ほど面白いと言うではないか。一回の勝負ではつまらない。どちらかが倒れるか狂うまで続けるのだ。それまでは賭けたものも取りはせん。さあ、一刻後行う

とする。」
心底楽しそうに笑って部屋を出る幸隆。典厩も準備をしに部屋に戻る。会談ではどうだったと聞く皆を無視して食事と賭けの紙を書いて一刻後部屋に戻る。
「ほぅ、よく退かなかったものだな?」
「これに負けて真田殿が仲間に入らなければどの道すりつぶされるのがオチでございます。命を助けていただいた晴信様のために、自分自身が生き残るために退けませぬ。」
「よい覚悟だ。」
狂気の将棋の対局が始まった。

狂気の勝負師・真田弾正（後書き）

首が痛い。なんか体調が悪いな、明日から出張なのになぁ

調略？無理？全て押し通す！！（前書き）

イヤッホーィ！！！ＰＶ一万　ユニーク千突破！！

調略？無理？全て押し通す！！

パチリパチリと駒を打つ音だけが聞こえる。そして、
「これで俺の勝ちだな。」
「まだ一度目が終わったばかりです。まだまだですよ。」
一回戦を終えてすぐさま続きを行う二人。戦法は二人とも大きく違う。真田弾正幸隆は攻め弾正の異名に恥じない異常なまでの攻めの将棋。対して典厩信繁はすべての駒を受ける待ちの戦法でいなしている。この一回戦を終えるまでちょうど一日が経過している。二人とも水分以外は持ち込んでいない。
「なかなかの腕前だがそれでは俺に勝てない。」
「かまいません。私のほうが体力もあり若いですからそちらがつぶれるまで我慢すればいいことです。」
「ククク・・・、そんな悠長ことを言っていていいのか？この間にも信虎様は下山に攻め込んでいるかもしれんのだ・・・。」
二人で圧力を掛け合う。相変わらず異常なまでの圧迫感がある幸隆に意地と体力が尽きても気力で暗いつこうとする典厩。そして二回戦が始まった。

「それにしても丸一日がたつというのに父上はまだあの者を倒せぬですか？」
「そういうな昌幸。見たところあの典厩という男は実戦の経験は少ないようだが訓練の経験や気力はあなどれん。」
「しかし、父上が負けるところなど考えられません。あの信虎や上野の長野業正でさえ父上に勝つことはできませんでした。あのような男に・・・。」
数部屋離れた一室で幸隆の嫡子・昌幸とその叔父である矢沢頼綱が語り合う。

「昌幸よ、兄上も言っておるであろう。そのように自身の父を信じるのはよい。しかし、そのようにすべての者に兄上がすべてを勝るとはありえぬことだ。信綱や昌輝のように自分に才能がなくとも努力で兄上に追いつこうとするものがいるのだ。現に信綱は個人的武力に限れば兄上を越しているであろう。」
その言葉に掌をたたきつけ反論する昌幸。
「それは父上が手加減しているからに過ぎませぬ。」
「昌幸よ。いい加減人を認めることを覚えることだ。おぬしは兄上をゆうに超える器と才があるのにそのように兄上の真似だけでは意味がない。」
「お言葉ですが叔父上、この昌幸は上野での記憶から父に勝ったものをみておりません。」
「はぁ・・・・。意固地じゃのう。」
あきれる頼綱に、父上に勝る武将などいない。とすねた態度をとり自身の部屋に戻る昌幸。
「このまま昌幸、いや喜兵衛が跡を継いだら真田は滅ぶ。かといって武と直感に頼る信綱や巧(うま)さと情報に偏る昌輝に任せたとてこの家は無様な息か確かできぬかもしれん。せめて三人を足して埋めていればな。」
悲しそうに、つらそうに顔を伏せる頼綱。大きすぎたのかもしれん。と自分の兄を思う。

「さて・・・そろそろ限界ではないか?さすがに・・・?」
二回戦の途中だが幸隆が話しかけてくる。
「さぁ、なぜですか?まだまだですが?」
「ククク・・・・。そう意地を張らずともいい。かなり参っているのはわかる。顔を見れば驚くであろう。」
「その様な戯言は別にしてつつけましょう。」
そう言って大きなひょうたんに入れた飲み物を飲む。中身は水でな

く栄養ドリンクとコーヒーの混ぜたものだ。ばれたら水とは言ったが純水ではないと屁理屈を言い張るつもりだ。この豪傑を逃せば信玄の覇業もここで止まる。これは戦だ。

「ふん。まったく動じぬな。」

「どうも。」

またぱちりと駒を動かす。今回も一回戦と同じで幸隆が押している。典厩は長引かせることだけを考えて粘るだけだ。

（ああは言ったがさすがに中年になるとこう気を張っているのも楽ではない。この野郎はかなり図太い肝か、ふざけた意地があるんだろうな。）

圧倒的に圧力を相手にかけている幸隆も実際は相手と自分に気を張り続けているため消耗していた。真田の忍びに作らせた液体薬も飲んで体力維持に努める。そのまま時間は過ぎて二回戦は終わる。また幸隆の勝ちだ。

「さぁ、次に行きましょう。」

すぐさま用意をする典厩。それに笑いを浮かべて答える幸隆。そのまま三回戦・四回戦と終わり完全に徹夜と絶食を行って四日がたった。

（さすがに栄養ドリンクとコーヒーでもやばい。頭がジリジリと焼けてきそうだ。）

三回戦の途中で鼻血を噴出した典厩だが自身で顔面を叩きわざと鼻を腫らして出血を止めた。

（この坊主・・。これだけ粘ったのは長野の糞爺だけだ。どうして・・・見た目通りのガキかと思えばその実は大蜘蛛やすっぽんのようなしぶとさとしつこさだ。）

こちらも年のせいもあり鼻血や顔に出てはいないがかなり疲労している幸隆。

「次ですね・・・・。」

それでも用意をする典厩に驚く幸隆。思わず聞いてしまう。

「ちょっとまて・・・・・。お前は晴信の使者だったな・・・・・

。なぜ、ここまでする？」
「急になんですか？時間稼ぎですか？」
「違う！！なぜそこまでやる？」
「さぁ、なぜでしょうね？放っておけないからでしょうか？」
それにニヤリと笑う幸隆。
「惚れたのか？」
「まさか。命を助けてもらっただけですよ。それにこれからどう伸びていくかわからないですけど間違いなく戦国有数の、いや、十本の指に入る大名になりますよ。」
「すごい自信だな。おまえ自身のことでもないの・・・・・・。」
さすがに歴史を知っているとはいえない。なのでごまかしている典厩。
「強いて言うなら、私は流人でしてね。そんな俺は拾ってくれて自分で看病してくれたのですよ。それに典厩信繁なんて名前ももらいましたし、それにこう見えても俺は家族仲がかなり良いでしたからあの信虎を見ると頭に来るんで・・・。それも理由ですかね？」
「ふん、つまらないやつだな。腫れた惚れたならからかう材料になったてのに・・・。」
「話はここまですよ。次です。」
用意を終えて手で進めるが幸隆が手で制す。
「このまま行けば間違いなく両者ともオシャカになっちまう。」
もう笑う余裕もなく重々しい雰囲気も消えてしゃべり方も変わる幸隆。
「では、そちらの負けでよろしいですか？」
「いんや、お前が晴信を信じているのはわかる。だが自分自身が本当に信じられるか試す。話は変わって悪ぃが受けてもらう。しばらく動けなくなるかもしれないがな。」
「かまいませんよ。調略上手の真田家ですから味方になってもらえば私は楽ができますから。どうぞ。」
すると将棋盤から駒を手で弾き飛ばす幸隆。そして手を置くように

促す。そして典厩が手を置くと同時に手の甲から将棋盤に深く突き刺さるほど刺す。激痛で頭のジリジリ感が消える典厩。

「後々に後遺症が出ないように差し込んだがその分痛みと出血はすごいぞ。」

実際腱や筋肉にはあまり支障がないのが典厩自身でもわかる。

「このまま日暮れまでの約二刻耐えてもらう。」

その提案にコクリと頷くことしかできない典厩。そして幸隆は一眠りすると部屋を出る。

（さて賭けを自分で投げている時点で俺は晴信につかなきゃならねぇ。しかし、こちらの面子も保たせてもらう。）

自分で原因を作っておきながら倒れているということで一勝一敗（ひきわけ）にするつもりだったが・・・・・。二刻経って部屋に戻って見たものは

「二刻たちましたか？」

「お、おめえ・・・な、なんで自分の肩に刺してやがる。」

自由な手で肩を数度刺した後がある典厩だった。

「これで俺の勝ちでうぎゅ・・・、」

最後は言葉にならないまま自分で小刀を引き抜き倒れる典厩。それを見て完敗だと悟った幸隆は部下に医者を呼ぶように頼みこれからの展望を考えることにした。

調略？無理？全て押し通す！！（後書き）

出張している先から更新中。毎日アクセス数を見るのが怖くてしょうがない。

一万ＰＶ記念・下山城（仮居城）の一日（前書き）

典厩たちが北条から帰った数日間の短編。その？

一万ＰＶ記念・下山城（仮居城）の一日

？勝千代って強いの？

ブンブンと風を切る音が聞こえる。現在夜明けの一時間前、義信が毎日の日課にしている素振りが始まった。振り続けれるだけ振るという元いた世界では非科学的な根性修行だがこの素振りだけはずっとそうしてきたためいまさら変えるつもりは毛頭ない。

「・・・・・ふぅ。」

限界が来たところで大きく息を吐いて木刀を脇に直して一礼する義信。そして腕と腰を冷して汗を流そうと井戸のところに向かうと

「義信？」

「勝千代じゃないか？こんな朝早く珍しい。」

武田晴信こと勝千代がいた。基本的に夜明けを少ししてから行動をし始める勝千代がこの時間に動くのは珍しい。

「木刀を持っているってことは素振りしてたんだ。」

「一応。ここのところ忙しくてやってなかったからな。」

「もっと忙しくなるから今のうちやっておいてねぇ。」

カラカラと笑いながら告げる勝千代に頭を抑える義信。兄弟のような、悪友のような関係も慣れてきた。やはりこの少女が信玄になるとは考えにくいと思ったが失礼だと思って顔に出さず思考から消す。

「そういえば最近やっていなぁ。稽古は。」

「昔はやってたのか？」

「あたしは結構好きだったから勘助に色々と武具の扱いは習ってきたぞ。」

エヘンといった感じで威張る勝千代に、はいはい。と生返事をする義信。そんなときにあることが思いついた。

「なぁ、暇なら朝餉の前にやる？稽古？」

「まぁ、いいけど。武器はどうするの？」

「それは任せるよ。あと勘助殿も読んだらいいんじゃないかな？」

「それはいいな。勘助にどこが鈍っているか聞けるしな。」
嬉々とした顔をして部屋に戻る勝千代。本当に体が動かせるのが楽しいらしい。

「それでは晴信様に典厩殿。準備はよろしいですかな?」
勘助が縁側に座って稽古の合図をしようとする。しかし義信が待ったを入れる
「ちょ、ちょっとまった。ソレは何だ?」
勝千代を指差す義信が見た物は大きな斧だった。
「なにって稽古用の斧。見てわからない?」
「それぐらいわかるわ!!」
「だったら問題はないわ!!ええい!!!」
開始の合図もなしに遠心力をつけて横に薙ぐ勝千代。ゴオ!!という洒落にならない音が聞こえ飛んでよける義信。目標を失った斧は木製でありながら土と瓦の城壁を吹き飛ばした。
「こ、殺すきか!!」
「あれ?結構手加減したんだけど・・・、ゴメンゴメン。」
軽い感じで言う勝千代に本日二度目の頭を抱える義信だった。ちなみに勘助は城壁の修理を命じに普請方に出向いていたためもういなかった。さすがに仕事が速い。

結果・馬鹿力なため稽古での測定は不可能。

?義信って対したことない?

今朝の稽古から数刻たち昼前になる。本日は敵方も動きはないらしく珍しく平穏だった。しかし義信の身の回りは騒がしかった。

「で？これはなんでございましょうか？晴信様？」
「うむ、今朝は一撃で勝負が終わったため、典厩の強さを測りかねてな。それで家中の腕自慢を集めて乱取り稽古をやってもらおうと思ってな。」
典厩の周りには数名ほどの体格のいい男と見たことがある将の女性が同じ数ほどいた。今回は二人だけではないため公式の呼び合いだ。
「この勝負で勝ち残ったものには金一封をやろう。」
その宣言に俄然やる気の出る参加者だが典厩だけはなんとなくやる気にならなかった。しかしそんなことはお構いなしに開始が宣言され各自獲物を見つけた戦いあった。典厩のほうにも二人が勝負を挑んできたが
「あ～はいはい。」
といった軽い感じで脇と肩を打ち据えて倒す。そして次々に倒していく。

「あ、あれ？典厩は思ったより強いようだな。勘助？」
晴信の横にいた勘助が説明を始める。
「どうやら典厩殿は中条流か京八流の流れを汲んでいるようですな。動きが対応しやすいように最小限です。ご覧ください、更に三人倒しましたぞ。」
「う、うむ。」
感心する勘助と流れとは違うことに戸惑う晴信だった。結果的には典厩一人が何事もなかったようにのこり賞金も受け取らずほかに者に分けるように進言して去って行った。

結果・典厩（よしのぶ）はかなり強い。家中で有数なものを打ち据えて無傷でいるほどの有力者の可能性が高い。

？典厩の本気？

さらに時間が経ち昼が過ぎて昼飯を終えて仕事をしている典厩のところに勘助がやってきた。

「勘助殿？」

「おお、探しましたぞ。典厩殿。仕事がひと段落着いたら頼みたいことがございます。」

「はぁ、この書類も終わるのでしばしお待ちを・・・・」

と、さっさと仕事を終えて勘助に連れていかれる典厩。到着した場所は勘助の部屋だった。どうぞ、どうぞと上座に通される典厩だったが白湯を出すといきなり勘助が頭を下げた

「典厩殿にどうしても、ど～しても頼みたき儀があります。」

「そんなにかしこまらなくとも私にできることなら。」

破顔してこちらを見る勘助だったが次に出た言葉に力が抜ける典厩だった。

「実は肩こりがひどくて推拿（すいな）をしていただきたく。」

「あ、ああ。そんなことでしたらいつでも・・・・」

真剣な表情でお願いといわれてしまい典厩は今川にでも行って外交してこいとも言われると思ったが大した用事ではなく気が抜けるような安堵したような気分になりマッサージを始める。ひどい凝りで年のせいもありかなり梃子摺ったが日暮れと同時に解決した。部屋から出ると勝千代がいた。

「あれ？」

「義信、何で勘助の部屋にいるのよ？」

「勘助殿なら寝ているぞ。さすがに疲れがたまっていたのだろう。さすがにあれだけの凝りをほぐすのは本気を出したからな。」

その本気という言葉に興味を示す勝千代。

「じゃあ、いつもあたしにやっている推拿は本気じゃないの？」

「そりゃ、そこまでするほど年も取って否ければ凝っていないしな。

」

「納得いかないな。今からやりなさい。本気で！！」

これは命令とばかりに無理やり部屋に連れ込む勝千代。

「か、勘弁してくれ。俺だって仕事や勘助殿を揉んだので疲れてるんだぞ？」

「そういわれると・・・・じゃあできる範囲でいいからやって。」

やめてくれる。とのいう判断はないのかと言いたくなったがまぁ、いいや。とマッサージを始める義信。今回は勝千代の頼みもあり道具も使用しての最大戦力を使っての本気だった。

「ううううう・・・・・・・・・・・・・」

「や、やりすぎたかな？」

結果的に勝千代は揉みすぎたため蛸のようにダラーっと緩んでしまった挙句に神経が過敏になり歩くだけでも体中がしびれたような痛みに襲われて仕事にならなかった。そのため義信の仕事が増えた挙句に自分自身も寝過ごしてしまうという失態を犯してしまった。勝千代には回復したあとウェハースと砂糖菓子を持って機嫌をとらないといけなくなる羽目になってしまった。

結果・本気を出すべからず（勝千代）　若返った気持ちですぞ！！（勘助）

一万ＰＶ記念・下山城（仮居城）の一日（後書き）

即興で書いた上に徹夜なためわけわからない文に・・・。明日の朝にもうちょっとましな文を書こうと思う。これを見ている知り合いに「まだ主人公と信玄はラブラブしないの？信奈とサルだって最初から意識してギクシャクしてたじゃん。」とか言われましたけど予定としてはこの甲州の乱のあとの信濃攻めの途中からする予定です。あくまで予定。プロットでは三種類あるからどれにしようかな。

反抗準備開始・帰還&日常（前書き）

出張終了。そして作者の体調も終了。

反抗準備開始・帰還&日常

「ううううう・・・・・」

真田家を仲間に入れて屋敷から出て下山城を目指す典厩一行。負傷はしたがそれ以上の成果を手に入れて後は晴信に報告すればいいのだが典厩は腹を押さえて教来石民部景政の馬に同乗している。

「典厩様?お腹をどうかされましたか?ま、まさかお手の傷から・・・!!」

「な、んでもないよ。」

少々お待ちをと言って宗助の背負った荷物から薬を出そうとする工藤源左衛門繁長を手で制する典厩だがその顔は無事とはいえないほど青い。別に手の怪我や徹夜のほうは幸隆の医師のおかげであとは自然治癒を待つだけと言う状態だったのだがこの胃腸の痛みの原因は後ろにいる一人の人物だった。

「殺殺殺殺・・・・・・・・・」

ドドドドドドドッと効果音が聞こえそうなほど殺気と怒気を一転集中させている真田昌幸の嫡子・兵部昌幸。通称・喜兵衛だ。完全に典厩に感情の攻撃をしているので周りの人間は気づかない。若干勘のいい宗助が違和感を感じて青い顔をしているぐらいだ。こちらがたずねてみても

「なんでもありませんよ。勘違いじゃありませんか?」

などとニコニコと返してくる。しかし前を見直すとまた感情の攻撃をはじめ、胃がキリキリと締め付けてくる。このやり取りを何度も繰り返しまったくボロを見せない笑いを浮かべる昌幸はさすがに後世に‘表裏比興’の者と言われる謀将の面影がある。これで自分より年下とは恐ろしい。どんどん青くなる典厩の顔に違和感の正体に気づき始めた宗助が近づいてきて、

「典厩様・・・。まさか、後ろの昌幸様ですか?」

と典厩にしか聞こえない声で自然に歩きながらたずねてくる。

「よ、よくわかったな。」
「さすがにわかりますよ。さっきから後方からピリピリした嫌な気がきますから・・・・。幸隆様が別れてから強くなった気がしますが・・・。」
典厩との勝負に納得した幸隆は途中の街道で一行と別れてほかの豪族の説得に向かった。それまでも少し痛いぐらいの感情の攻撃を続けていたがいなくなると鉄砲が大砲になったぐらい急に大きくなった。
「下山城まで残りは数刻の距離ですが・・・大丈夫でございますか？」
「あと数刻か・・・。長い旅路になるな・・・。」
どんどん痛くなる胃に思わずうずくまりそうになるが馬を御している民部が背中を貸してくれたため何とか醜態を見せずにすんだ。
「民部どの・・・。すまぬ。」
「ん～・・・。」
痛みに耐え切って体を戻すと同時にまた馬にもたれかかって眠り始める民部。そして宗助からは胃薬を見えないように投げ渡されそれを飲み干す。それを隠すように昌幸と典厩の間に入る繁長。
「ど、どうも、三人とも。大丈夫だから・・・・・。」
ウプッとなるが根性と意地で耐える典厩。この痛みは下山城に帰るまでつづいた。

「ゴフッ！！！」
城に到着して真田一行と別れると同時に馬から崩れ落ちる典厩。あのまま感情の攻撃は大砲から大和型主砲の三連斉射に代わり民部以外の全員が原因が人的要因のなぞの腹痛に襲われ宗助と典厩は何とか大丈夫だったが望月八千代信永は即効でダウンして源左衛門も城が見えたときに安心したのか失神した。気絶した者を馬に乗せて典

厩は一歩歩くごとに拷問のように半端じゃない腹痛にたえながら城に着いた。最後に別れる寸前に舌打ちをした昌幸の顔は般若だった。そして気絶した者は医務室へ運ばれなんともない民部は自室に寝に戻り、無事だった典厩は崩れ落ちそうになるのを宗助に運ばれて自室に戻った。

「典厩様。どうぞ。」

「す、すまん。」

白湯を渡してくる宗助に礼を言う典厩。今回一番体力的に疲れている宗助はそれをおくびにも出さずに典厩の世話をしてくれる。

「いろいろすまん。」

「いえいえ、私は農民ですから武家に仕えるのは当然です。」

「じゃあ農民でないなら仕えないのか?」

と、少々答えに困る答えを返してみる。それにしどろもどろになる宗助。

「い、いえ、どんな人に仕えるわけでは・・・・、しかし、なれど、武士と農民では大きな差がございますゆえ。いくら農民ががんばっても勝てるのは作物を育てることだけですから・・・・。」

「まっさか~。大体兵の大半は農民だろう?だから基本的に冬にしか戦をやらないだろ?」

農業が経済の中心だから何もない冬に基本的に戦をするのがこの時代の基本だ。常備軍を作るのは金がかかるためによっぽどのことがないとできない。まぁ、織田信長がちゃんとした常備軍を作るまでは、な。とはさすがに言わなかったが。

「そんなに大きな差があるっていうなら、武士になってみるか?」

「え?!」

「そんなに驚くことはないだろう?有能そうな人材を集めるのは基本だろう?」

典厩はそう言うが実際はこの時代宝くじの一等が当たる確立ぐらい農民が出世するのは難しい。農民から出世した人間を上げてみろと言われたら上げれる人間は思ったより少ない。

「え、でも?!よろしいのですか?」
「かまわんよ。色々気が利くし体力もある。さらには機転も利くからな。さすがにいきなり武士身分は無理だから中間身分の若党ってことでいいか?」
「よろしいので?」
「いいよ。だめなら提案しないぞ。」
「よ、よろしくお願いします!!」
「そういえば身分が中間だけど武士ッとことは苗字が必要だな。あとは名前も。」
「お、恐れ多いですが、よろしくお願いします。」
もはや宗助は喜びと緊張でガチガチと音が出るぐらいの固まりっぷりだ。
「出身は豊富村だっけか?はかにそこの領主と、特長とか、分るものならいいや。」
「えっと、領主は飯富三郎兵衛様で、特徴と言えば・・・えっと大きな柿の木があります。三つに分かれた見事な木があります。あとは長講寺堂ってお寺があります。」
(さてな・・・。まぁ、まさか俺が人の一生を決めるような名付けをするとはなぁ。源左衛門の時は名前だけだったけど今回は苗字もあるからな。さてさて・・・)
脳みそを完全回転させて考える典厩こと義信。そのまま考え続けて豪族の一覧帳に載っている苗字を候補からはずしていく。そして姓名できた。
「三枝宗吾昌貞でどうだ。いやならかえるが?」
三つ又の柿の木から二十四将一人を思い出してパクッた名前だが宗助もとい宗吾昌貞は感涙を流して感動していた。勝手にパクッた名前なのにここまで感動されるとさすがに悪い気がする典厩だったがさすがにそういうことを言える雰囲気ではない。
「宗吾昌貞!一命をとしてがんばりたいと思います!!では父上にお話してくるので二日ほど暇をいただきます!!」

「お、おう。ゆっくりしてこい・・・・」
「では!!!!」
思いっきり走って視界から消えていく宗吾昌貞。さすがにまずかったかなと思わないでもない典厩。自分は晴信に報告しに行くことにした。
「失礼したします。典厩信繁、もどりました。」
「おう、入れ。」
中から許可をもらい晴信の自室に入る典厩。そして扉を閉めて晴信の前に座る。
「それで首尾は?」
「まぁ、上々ってところだ。何を食ってんだ?」
勝千代は紙袋からヒョイヒョイと口の中に黒い物を投げ込んで食べている。
「なに?って相模土産のういろう。腐ったらまずいと思ったから。けどさすがに白湯だと口の中が甘ったるくなるな。なんかないか義信?」
「なんかって何だよ。」
「口の甘みを消す方法。」
未来から来たネコ型ロボットかと突っ込みを入れたくなったが反応が分るため突っ込まずにそのまま返すことにした
「茶でも飲めばいいだろうに・・・」
「あきた。お前が真田を調略しにいってから、ういろうと茶を飲み続けているからな。」
ムッフ~と自慢げに胸をはる勝千代。それに対して腹痛は治まったが次は頭痛がしてきた義信。
「で、なにかないか?」
「はいはい・・・・」
がさがさとリュックから何かを探す義信。そして奥から紙箱を取り出す。
「なんだ?」

「薬缶はあるか？」
その言葉に棚から大きな筒状の薬缶を取り出す勝千代。そして扉を開けて庭に出てマッチで火をつけてお湯を作り始める。でき終わって少し冷やしたお湯に紙箱から葉っぱを取り出して入れる。
「ちょっと待ってろ。」
グルグルと薬缶のそこをまわし始める義信。それを不思議そうに見つめていた勝千代だが
「お、なんだかいい香りが・・・・。」
「湯飲みを出して。」
湯飲みの中に薬缶の口にさらしを巻いて葉っぱが入らないようにしながら紅茶を入れる。その紅茶を親の敵のように凝視する勝千代。
「な、なんだこれ・・・・。」
「緑茶の親戚で紅茶ってもんだ。さめないうちに飲んだ飲んだ。」
作法もなしにグイグイのむ義信にまねをしてこちらも飲み干す勝千代。
「にが～！！」
といった感想を述べる。
「に、苦すぎるよ。なんだこれは・・・。」
「だから紅茶。普通に入れたのなら苦くはならないけど今回は苦くなるようにしたから。」
舌を布で拭いてういろうを口に入れて苦味を消す勝千代。
「なんかイガイガするよ。」
「だからそう入れたんだって。甘さは消えただろ？」
ニヒヒと笑う義信に手刀を入れる勝千代。どうも口に合わないようだ。
「苦すぎるわ！！ほかにないのか？！」
「仕方ないな。これならどうだ。」
別の紙箱から細い緑色の袋をだして水に溶かしていく。すると水が深緑色になる。
「さ、ぐいっといきな。」

「な、なんか毒々しいんだけど・・。」
「まぁ、のんでみろ。」
義信は美味しそうに飲むので勝千代も一気に湯飲みを呷(あお)る。
(ククク・・・、だまされたなっ。これは青汁だ!!俺の知り合いでは俺以外には美味しいと言うやつはいない。)
噴出すことを予想していた義信だが飲み干した勝千代はスッキリした満面の笑みで
「美味い!!すごくいい香りだ!!」
といっておかわりを要求してきた。唖然とする義信
「え、えっと・・・・。大丈夫なのか?」
「なにがだぁ?」
二杯目をゴクゴクと美味しそうに飲む勝千代に同類がいたと喜べばいいのか悪戯が失敗したと悔しがればいいのか分らない義信だったが三杯を要求する勝千代にやれやれといった感じでもう一杯注いだ
(もしかしたらこの時代の人はこういうのがすきなのかな?あとで皆にも配ってみるか・・・。)
と思いつつ真田幸隆が帰ってくるまで青汁を飲んでいた二人だった。

「「「「「ブフッ!!!」」」」」
「うむ?どうかしたのかのう?皆々よ?」
後々知り合いに配った青汁だったが勝千代と義信以外に大丈夫だったのは望月信永だけだった。民部にいたってはあまりの不味さに一口飲んだ瞬間に立ったまま気絶していたという。そのため青汁禁止令が発令されたことは言うまでもなかった。
「いくら禁止されようが体に良く美味いものを絶滅させれない。」
「義信、薬用菜園で量産できるほどの量があるぞ。」
「さすがだな勝千代、さすがに勝千代の専用農園には手が出せないようだ、」

「このまま量産を続けて青汁をのみほうだいにしてやろう。」
「「くっくっく。」」
と勝千代と義信が量産していたことは最後まで家中に知られることがなかった。

反抗準備開始・帰還&日常（後書き）

出張から帰ってきた作者ですがまさかの発熱して寝込むとは・・・・。おかげで新作をあげるのが一日遅れてしまった上にオリジナルの小説のほうは書く暇もなかったというお粗末さだ。皆も気をつけよう季節の変わり目に。

準備完了・躑躅ヶ崎へ（前書き）

最近体調の良くない作者です。二つ同時に進めるべきか悩んでます。

準備完了・躑躅ヶ崎へ

下山城に戻って一週間がたち、城内の準備が整い、兵を徴兵し始めたころに真田幸隆はやってきた。

「しばらくぶりでございます。典厩様。そして、晴信様。お初にお目にかかります。真田源太左衛門幸隆と申します。」

「むぅ？お主は弾正ではなかったのか？」

官職で通称でもある‘弾正’が変わっていることに怪訝な顔をする晴信。

「それでございますが私は晴信様に仕えるために戦に必要になる物以外はすべて捨ててまいりましたゆえに・・・。」

などと言う幸隆に唖然とする晴信と典厩。典厩は大慌てで

「幸隆殿、そ、そうあわててはいかぬ。官職に関しては今までのでよいとの仰せであるゆえ。」

と言う。そして頭巾に隠れても見える目で晴信に対して同意を促す。晴信も頷き‘弾正’のままで良いとのことになる。

「そうでございますか。ならばこれからも真田弾正、晴信様に忠心させていただきます。それとこれが手土産になります。」

横にずれて手を叩く幸隆。すると扉が開き5人の男女が入ってくる。そのまま晴信の数歩前にひざまずき頭を下げる。

「小幡山城守虎盛。」

「原美濃守虎胤。」

「横田備中守高松。」

「多田淡路守満頼。」

「秋山伯耆守虎繁。」

「「「「「このたびは帰順の機会をいただきまことにありがたく存じます。」」」」」

入ってきたのは信虎の五功臣と呼ばれる人物たちだった。思わず噴出しそうになる晴信と典厩に、してやったりと目を輝かせる幸隆。

（やりやがったな。幸隆殿。）
（さぁ、私は調略を命じられただけゆえ・・・・）
などとすぐさま目で会話する典厩と幸隆。威厳のある格好をしている晴信だが実際はいまだに呆然としているので典厩が進めることにした。
「ごほん・・・。このたびは御味方いただきありがとうございます。この若輩（わたし）は晴信様の副官と祐筆をしている典厩信繁と申します。」
正面に出て頭を下げる典厩だが一人をのぞいて見下してくる功臣たち。それを無視して話を続ける典厩。
「このたびは外様衆筆頭・真田殿からお話は聞いていると思いますゆえ、雑多な話は省略させていただきます。単刀直入に聞きます。兵はいかほどお持ちになられましたか？」
いきなり筆頭に祭り上げられた幸隆は食えない坊主だ。と苦々しい顔をするが満更でもないようだ。その態度が気に食わないのか功臣の一人が吠えようとする。
「おぬしに答え――「合計で四千ほどでございます。我が原家は七百ほどです。」
小幡山城の言葉をさえぎり一歩前に出て典厩に告げる原美濃。人の良い笑顔を浮かべている。
（これが猛将・原美濃か。）
体中に多量の傷を受けながら敵陣を突破し分断する先方を得意とする甲斐屈指の名将でもある。
「原殿！！このような新参者に！！」
「新参といっても立場があるであろう。晴信様が次のお館様になるのであれば、この典厩殿は将来の次席でありましょう。立場を控えるのはこちらであろうよ。ただ・・・」
「なんでありましょう？」
「そのような頭巾をかぶって顔をごまかそうとするのはいただけませぬ。」
典厩は驚き言い訳をしようとするが原美濃に

「いくら顔に傷を作ってみたところで偽傷だと分らぬほどこの原虎胤、老いぼれておりませぬ。」
と言われればこちらの非礼をわびて頭巾と包帯をとり化粧をふき取る。
「これでよろしいでございましょうか？」
すると原美濃は驚いたような顔をした。
「こ、これは思ったより若い。まだ十七といったところでしょうか。」
「はい。年のほうが何か問題がありましょうか？」
そういうと笑いながら原美濃は言う。
「はっはっは・・・・。いや、すまぬことをした。拙者も戦場に出たのは十四の時でございますからな。年は関係ありませんな。はっはっはっは・・・・。」
こういわれたら周りの将も何もいえない。ただ黙っているだけであった。そのまま典厩と原美濃だけがしゃべり続ける。
「とても信虎も立て続けに良将を引き抜かれては困りましょう。」
「いえいえ、まだあちらには甲州最強の赤備えがございます。更には関東でも有数の要害である積翠寺城がございます。晴信様はその堅固さは一番知っておるはずですが？」
「はい。伺っております。晴信様が生誕された場所とのこと。」
「あの時は今川の一万を大きく越す大軍を防ぎきりましたからな。」
「福島殿でしたな。」
「ほお、典厩殿は博識でございますな。これは良い副将を手に入れて晴信様も将来が安泰ですな。」
はっはっは。と笑い続ける典厩と原美濃だが心の中では
（友好的だが勝千代にそぐわなかったらすぐさま切り捨てるつもりだったな。このご老体・・・。）
（まずは合格点をあげても良いか。偽名や顔を隠してまで晴信様に近づき害をなさぬとは限らぬからな。顔も出したのだ忍の類ではないな。）

とせめぎあっていた。そのまま細かな作戦以外を決めて晴信の解散の命令をもって解散となった。

「な、なんだ。あのご老体は・・・・。」

自室に着くとグテ～と倒れこむ典厩。中には典厩の直臣になった工藤源左衛門繁長と三枝宗吾昌貞に熟睡いている教来石民部景政がいた。

「ど、どなたでしょうか？」

「ここは典厩様のお部屋でございます！！」

入ると同時に刀の鯉口を切り構える二人に頭巾をはずした顔を見せたのは始めてだと思い説明するとしぶしぶ納得する二人。

「なんでそんなにしぶしぶといった感じなんだよ。」

「だって・・・・」

「典厩様と証明する物がありませんし・・・」

ため息をついて説明をしようとする典厩だったがいつの間にか起きていた民部が真後ろに立っていた。

「民部殿？」

「いつかの晴信様への曲者・・・・覚悟！！」

寝ぼけているのか、本気なのか分らないがとにかく極上の殺気をまとって攻撃してくる。そして源左衛門も宗吾もその言葉に反応して抜刀する。

「「「曲者！！！」」」

「またか！！」

城内で刀を抜くわけにもいかずある目的地を目指して逃げる典厩。周りに人がいなかったのが幸いして増援はないようだが三人は周りに遠慮なく刀を振り回す。それを次々によける典厩だが農民であった宗吾の攻撃は真っ直ぐなため避けやすいが源左衛門と民部、とくに民部の攻撃は恐ろしいまでに的確ですでに着物はズタズタだ。そのまま城の再奥に逃げてある部屋に飛び込む。

「そこまで・・・で・・・す。」
「くせ・・・も・・・の。」
言葉がとまる源左衛門と宗吾。そして二人を吹き飛ばして突入する民部。その奥にいたのは
「何事だ!!!」
と大声で威圧する我らが当主・武田晴信とヘッドスライディングして晴信の後ろに滑り込む典厩がいた。
「城内で抜刀することはいかぬとあれほど申し付けたであろう!!厳罰は覚悟しておろうな!!」
源左衛門は青くなり雲の上の存在にあった宗吾は泡を吹いて倒れ、民部は狸寝入りをする。気丈にも青くなりながら説明をする源左衛門
「そ、それがそこの曲者が典厩様の部屋に勝手に入りまして・・・・それに教来石殿が晴信様を襲った賊徒だと・・・。」
その説明にあきれる晴信。典厩がやるように頭を抑えて、すぐさま元に戻り・・・
「何を言っておるか!こやつが典厩以外の何に見えると言うのだ!!家臣であるなら声や雰囲気で分らぬか!!」
ガー!!とその声は竜の咆哮か獅子の鳴き声か。と、言わんばかりに吠える晴信。
「追って沙汰を出す。自室で謹慎しておれ!!」
そう一言言うと源左衛門も気絶して民部が急いで二人を回収して部屋に逃げていく。
「まったく・・・・・。もう行ったぞ。いつまで突っ伏しているのだ?」
「す、すまん、勝千代。」
「気にするな。顔を隠したほうが言いといったのは勘助で賛同したのはあたしだからな。」
ペチペチと後頭部を叩く勝千代。ゆっくりと座る義信。
「それで逃げてきただけじゃないんだろう?」
「あれ?わかった?」

「そりゃあ、ただ逃げるだけなら勘助の場所でも良かったわけだ。ここに逃げるのは一番安全だが勘助の部屋のほうが近いだろうに・・・。」

やれやれといった感じで肘掛を枕にして横になる勝千代。

「つかれてんのか？」

「いんや、これからどうするか考えているだけだよ。ほんとは厠に篭っているのが一番いいんだけど・・・。」

信玄は六畳もある厠を作ったという話は有名だな。と思い出す義信。

「どうする？」

「そりゃ、躑躅ヶ崎を攻める。あそこが一番守りやすいし何しろ大きな商業も行政もやりやすい。だけどな・・・・問題は積翠寺なんだよな。要塞山って異名があるほど堅牢だからなぁ。」

ゴロゴロと寝返りをうつ勝千代。どうやらかなりの難題らしい。

「勘助殿には聞いたのか？」

「たずねたら、いまの晴信様にはちょうどいい問題になるでしょう。ボケを直していただかないと我々が困りまする。なんていうから切欠も教えてもらえなかった。」

一緒に考えろ。と言う勝千代に同じように考える義信。

「兵糧攻めは？一番被害が出ないだろう？」

「一番に考えたけどあの父上が黙っているわけない。行おうとした瞬間に玉砕覚悟で赤備えで突っ込んでくる。それならまだしも食料を略奪される可能性も十分あるからだめ。」

「力攻めは論外・・・・。攻城兵器も山が険しくて使用できない・・・。」

「内応もしそうにないし、時間をかけるといっても兵糧攻めや包囲はだめ・・・・・。」

う～ん・・・・。と考え込む二人。

「内部かく乱は？」

「忍びや三ツ者の数が少ないから無理・・・・・。それに父上の兵は間違いなく恐怖で縛られているから無理。言い忘れたけど長期戦

になれば信濃や上野の豪族(ばかども)が父上を利用してやってくる。政務と軍務ができないと困る。いくらなんでも内乱をしながら政務を行えるわけないしなぁ。」

「確かに拠点がここだと信濃の豪族が攻めてきたと連絡が来てもまにあわないからな。本当に躑躅ヶ崎に戻れればいいんだけど。」

さらに頭が痛くなる二人。

「せめて躑躅ヶ崎が城砦ならな。本当に名前通りに屋敷だもんなぁ。どうして城にしなかったんだよ、勝千代。」

「あたしに言うな。父上が作ったんだから城砦は積翠寺があるから篭ることは基本的には考えてないだろうよ。まったくあたしなら・・・えっと・・・城?」

何かを思いついた勝千代。起き上がり頭を抱える義信の顔をはさんでこちらを向ける。

「なぁ、義信。こんな作戦考えたんだけど・・・ちょっと教えて欲しいことがある。」

「ふぁに（なに）？」

勝千代の説明を聞いて驚く義信、実際この作戦が行われたのはこの時代では少なく後世に数件あるだけの作戦だった。

「た、たしかにそれはできれば他の国に介入されることも防ぎなおかつ信虎に拠点を攻めらないたてにもなる。てもそんなことできる奴いるか?」

「なに言ってんだ。義信がいるだろ。」

「はぁ?」

「決定だから反論は受け付けない。準備をしてくる。勘助にも相談しないとな。」

義信が反論しようとするがまったく聞かず部屋を出て行ったしまう勝千代。間違いなく負かされることがけっていた瞬間だった。

「話を聞けや!!!」

思わず肘掛を蹴っ飛ばしたが足が痛くなるだけだった。そのまま勝千代に会わずに三日がたち召集された軍議では作戦は説明されて責

任者は案の定に義信に決まった。
「まじかよ・・・・・・・」
「いざ行かん!!古府中へ!!」
ノリノリの勝千代が軍議を切り上げて出陣を始めてしまった。全軍は義信を残して先行して躑躅ヶ崎に出発した。

準備完了・躑躅ヶ崎へ（後書き）

さいきん体調が悪いうえにノリは悪くなってきた。何か言い音楽はないものか・・・。

民は味方につけるべし

下山城を出発して北上する晴信軍は小さな砦や武家屋敷を大した抵抗もなく次々に攻略して目的地である躑躅ヶ崎に向かう。道中降伏する国人や志願兵になる農民を吸収して兵力は現在も増え続けている。

「高白斎殿、兵力が倍近く膨れ上がりましたが・・・・」

「安心をなされよ典厩殿。これぐらいの予想はしております。勘助殿は相手の動きを読んでいるようだ。さすがというべきかな？」

高白斎に目録をもらい読む典厩。確かにこのまま増え続けても一万以上の兵を三ヶ月ほど食べさせる量の食料がある。現在典厩は行軍の後方、輜重隊を率いている。目をこらして前を見ると相場・黒駒にまたがり威風堂々としている晴信がいる。勘助の話ではボケの方はあと少しで取れるとのこと。

「やれやれ・・・、さすがに格好がつかないな。」

一人だけ馬車に乗っている典厩。今までの任務は黒駒が自分に合わせてくれたので騎乗できたが現在は、馬に限りがなく自分が乗れるような馬がないため馬車に乗ることになった。

「典厩様？後ろにお乗りますか？」

元・農民の部下である三枝宗吾昌貞が言うが二人で乗れば機敏な動きができないと断る。後ろから次々に前線争いをしようとする豪族や武士には笑われ、農民にはおかしな顔をされる。針のムシロとはこのことだ。

「それに典厩様の格好は戦場に出る装いではありませんから・・・。」

工藤源左衛門繁長が一言。典厩の格好は鎧は着ずに胴当てに手甲に厚手の打掛。それに脚甲と金鉢巻といういたって軽装で戦に出る格好ではない。打掛にいたっては女性用の平時の服だ。

「あんなガチャガチャした物着れるか。こっちのほうが動きやすい

し急所は防げるぞ。」
「そういうことではないと思いますが・・・」
源左衛門が何か言おうとすが馬車の上にゴロリと横になる典厩。不貞寝を始める。
「い～・・・い～・・な～・・・。」
のんびりした声で近づいてくる騎馬武者。教来石民部景政だ。民部は馬から降りるとフラフラトテトテとやってきて隣で横になる。
「おいおい、それでいいのか御側衆？」
「ま～・・・だ～・・・い～・・・・（以下略」
まだ戦のにおいがしないから大丈夫。とのこと。ちなみに典厩を追い回してくらった沙汰は三人とも厳しいものではなく戦場で功績をたてる事らしい。
「やれやれ・・・・。」
熟睡する民部に打掛を貸して馬車から降りて民部の馬に近づいて馬を引く。それに驚く武田武士団。
「て、典厩様？！」
「なにか？」
「典厩様の方が身分が上ではないのですか？」
宗吾は訪ねるが要領を得ない顔で典厩が
「さぁ？」
と答える。そして更に信じられないことをした。
「お～い！！晴信様！！」
「「ひぃ！！」」
君主を遠くから呼びつける典厩。どれに慄く宗吾と源左衛門。いつもの臣下の秩序ある典厩はどこにいったとびっくりもしている。
「なんだ、典厩！！！」
と普通に返す晴信。それには全員唖然。
「俺の立ち位置ってなんになるんだ！？」
「一応、私の副将ってことになる！！つまりは次席だ！！」
「わかった！！・・・と、いうことだ。つまりは身分は上だがい

いじゃないか。やりたいからやっているのだから。」
などと簡単に返す典厩に一同が唖然とする。このような態度をとったのは勘助と板垣の爺の提案だった。時は出発前にさかのぼる。
「そういえば典厩殿の地位はみなに発表しておりませんな？」
「そうだが？何かあるのか。爺よ？」
すると横から勘助が会話に入ってくる。
「おおいにございます。このまま地位を明らかにしなければ客将身分と思われるか、運が悪ければ胡乱な者と暗殺されかねません。」
「そういわれても五功臣には副将として発表したから皆々も知っているはずだが？」
「原美濃守さまは部下に言われておるかもしれませぬが他のものどもは納得しておりませなんだったことは明白で・・・。」
「つまり典厩があたしとどのような関係でどういう地位かはっきり諸将や兵に知らせねばならぬということであろう。」
「その通りにございます。なればこの信方の爺に妙案がございます。」
「珍しいな、爺が案を出すとは・・・。」
意外そうな顔をする晴信だが提案を聞く気は満々であった。
「典厩殿は苗字を隠し典厩という通り名で通しておりまする。なればこの際武田の苗字を発表し戦場や兵站などで活躍させればよろしいかと・・。そして一芝居打っていただきます。こうしてゴミョリゴミョリ・・・」
耳元でささやく信方が説明をすると面白そうな顔をする晴信
「たしかにそのような態度でおればうつけうつけと馬鹿にしていた者はさらにうつけと思うであろう。しかし、典厩が活躍してあたしがうまくそれを使い、父上に勝てば・・・」
「その通り。もう晴信様をうつけと言い、傀儡にしようとする者は野心を出して自滅するか。もしくは従属するかのどちらかになりましょう。」
「その策にはこの勘助も同意しております。」

と、いった具合にきまり、こうやってな（・）あ（・）な（・）あ（・）に話すことになった。結果は

（ヤッベー・・・大半が勝千代をうつけとののしってやがる。ちゃんと忠誠を尽くしているのは豪族では真田殿と原殿ぐらいだ。ほかは良くてもフヌケ程度にしか見てないな。）

前途多難な武田家だがこの戦で晴信を見る目も変わるだろう。そう思案をしていたら・・

「おい！！典厩！！」

「はっ！いますぐ・・・・・・」

馬を宗吾に預けて駆け足でうまをするすると抜けて晴信のところに向かう。晴信は顔を下げてヒソヒソと首尾を聞いてくる。

「・・・・どうだった？」

「・・・・・忠誠を誓っているように見えるのは真田殿と原殿だけだ。」

「・・・・・ほかは？」

「・・・・・良くてもフヌケか間抜け。野心の強い奴は多分婿を入れて乗っ取るつもりの奴もいるだろうな。」

「・・・・・そこまでか。まぁ、その考えも徒労に終わらせるさ。」

パシン！とコブシを掌に打つ晴信。気合は十分だ。

「・・・・それで例の物品はどうなってるんだ？」

「・・・・坂田屋の当主・坂田源右衛門のおっちゃんが太鼓判を押して保障してくれたよ。まぁ、見返りは御用商人にしろってことだったけどな。」

「・・・・・・いつ届くって？」

「後ろの輜重隊にもう積んである。しっかり護衛をたのむぞ。典厩。」

「はいはい。」

話を切り上げもとの位置に戻る典厩。そして馬を宗吾から返してもらおうとした瞬間に民部が馬に飛び乗り槍を構えて一定の方向を見続ける。

「どうした？・・・いや、説明しなくてもいい。こっちが聞くから答えてくれ。」
「ん～。」
のんびりしているが民部にいつものためが少ない。
「敵か？」
うなずく民部。指を二本出す。
「二十か？」
うなずく。そして七箇所ほど指差す。どうやら指差したところに敵兵が伏せているらしい。
「民部殿。あなたの手勢で左側は任せます。私は右を・・・・。」
民部はうなずき自分の隊に戻る。そしてそのまま騎兵百を率いて左側の伏せている場所に突撃準備を開始する。それを確認した典厩は槍兵百を率いて右側の伏兵に槍衾を用意する。準備が終わるかそうでないかの瞬間左右から敵兵が襲い掛かってきた。
「伏兵とは稚拙な手を！！」
無論この中で一番戦のにおいに敏感な晴信や勘助が気づかないはずもなく。後方の左右は典厩と民部に任せて自分は前方の敵に対応するように指示をだす。先陣争いになり正面の敵は見るも無残に追い散らされていく。そして後方は民部の騎兵に追い散らされた敵兵が同じように典厩隊の槍に突付かれる敵兵とともにサンドウィッチのように味方（民部）・敵・味方（本隊）・敵・味方（典厩）といった感じにはさまれ次々に倒されていく。
「武器を捨てた者に手出しはやめい！！！」
武器を捨てて命乞いをする兵に手出しをすることを禁ずるが興奮した兵は攻撃を続けようとする。
「やめよといっているのがわからんか！！！」
大声でほえて手近にいた暴走兵を一人鋼鉄製の手甲で顔面を強打して殺す。するとそれを見て数名の兵が襲ってくるがそれも打ち殺す。それを見ていたほかの兵はそそくさと元の隊に戻っていく。鉄の軍律までとはいかないが厳しい軍律と正しい褒賞が与えられれば人間

は納得する。元の世界の軍隊を思い出し慣れない人殺しを行う典厩。
そして武器を捨てた敵兵の元に行き
「おぬし名前は？」
「い、い、伊代平と申します。」
「出身は？」
「か、か、桂川（相模湖の河川）のあたりで・・・・」
「すると農民か？」
「へ、へい。ど、どうかお助けを！！」
ガクガクと震えながら頭を下げてくる伊代平と周りの農兵たち。それをみて雰囲気を和らげて膝を突いて目線をあわす。
「心配することはない。晴信様はこの荒れた甲斐の国を父に反旗を翻してもなおそうとするお方だ。国の根幹であるおぬしら農民をこのような馬鹿げた内乱で死なせるような真似はせぬ。」
その言葉を聴くと涙を流しながらこちらを見る農兵たち。信じられないといった顔だ。
「このまま我が軍に来るもよし、村や里に帰って戦乱が終わるまで待つもよし。晴信様はそうおっしゃっておられる。」
「おいらたちは村に帰ってもいいのでござぇますか？」
「いいといったであろう。ただし村に帰ったら晴信様はこのようなお人だと村の皆々に伝えてくれるだけでよい。」
腰から小さな麻袋をだして渡す
「この数ならばこの銀子（ぎんす）があれば桂川まで帰れるであろう？」
「も、も、も、もちろんで！！それに多すぎます！！」
「まぁ、よい。これからは晴信様が作る豊かな甲斐を作るために協力してくれれば良い。」
我ながら茶番もいいところだ。とおもいながら続ける典厩。
「わ、わかりました。おいらは軍に入らせていただきます。」
「おいらは腕を折っちまったから里に帰って晴信様のことを道ながらつたえていくだ！！」
んだ。んだ。と納得して軍に志願したり里に帰る元・敵軍。これで

晴信の評判が上がり向こうの兵力や士気が落ちるはずだと思いながら軍列に戻ると感涙の涙をながしている源左衛門と宗吾がいた。
「な、なんでお前たちも泣いてんだ?」
「い、いえ、この貧しい甲州で晴信様がそのようなことを・・・・おいおいおいおい・・」
「感涙で前が見えません・・・・おいおいおいおい・・・・」
なんかわざとらしい泣き方をする二人だがマジ泣きのようだ。二人をなだめつつ晴信のほうを見ると勘助と板垣の爺が涙を流していた。
それで晴信に目線で話しかける
(どうした?)
(義信があたしが言ったなんていうから二人とも天下泰平がどうとか立派になられましてとか言いはじめたんだ。)
(あ~・・・・)
(あ~ってなんだよ。収拾つけろ!!)
と会話をするが典厩が我関せずとそそくさと戻ろうとしたため軍配を投げる晴信。後頭部に言い音がしてあたった。その様子は唖然としていたため典厩と晴信しか覚えていなかった。

民は味方につけるべし（後書き）

くそ。自営業だから平均十一時間労働は当たり前になってきたな。これで給料が上がらないとはちくしょう不況め！！・・・・などと愚痴を言っている作者ですがパソの外付けハードがクラッシュして書きだめが全滅する始末です。これからかけるときに徹夜で書いていきます。毎日はさすがに無理ですが投稿は毎日したいと思う。

躑躅ヶ崎の合戦

道中で伏兵に襲撃されたが被害も無く、そのまま進む晴信軍。投降した農兵から聞いても指揮をした将は特定できず、どこか勝っているのに順調に進んでいるのに気が抜けない状態が続いている。

「典厩殿、ちょっとよろしいか？」

「何でございましょうか？勘助殿？」

躑躅ヶ崎を目と鼻の先に捉えた小さな窪地で典厩信繁は山本勘助に呼ばれた。どうも人のいる場所では話せないような内容らしく列から少し離れる。

「それで？」

「実は思ったより悪い状況におちいっている可能性があり申す。」

「どういうことでございますか？うまくいっているとおっしゃっておられたではないですか・・・。」

「確かにうまく入っております。しかし、よく考えてくだされ。相手は敵を一気呵成に倒すことを良しとする信虎様でございます。こうも動きがないと・・・」

「・・・何か策を考えて一撃でこちらに致命傷を与える方法があると？」

「板垣殿や甘利殿、駒井殿の三家老も晴信様もそう考えておられます。」

その勘助の言葉に元の世界の知識を思い出して考えるが信虎がそのような待ちの戦法をしたことは思い出せない。

「私に思いつくことはないのですが・・・勘助殿にはなにか？」

「それが信虎様自慢の馬廻(うままわり)衆なら動かないのは分りますが、甲斐の最強部隊である赤備えを率いる飯富様たちの動きがわかりませぬ。・・・奇襲をしようにも、もう躑躅ヶ崎は目と鼻の先で奇襲を掛ける場所はありませぬ。しかし、奇襲で無いとしたら盆地の中心である躑躅ヶ崎で何かあるはずでございます。」

「晴信様は？」

「無論、警戒しております。しかし現在の最大の問題はその動きの見えない信虎様の勢力ではなく。晴信様を侮っている豪族衆でございます。先ほどの典厩殿の働きにより三、四割ほどはこちらに忠誠を誓うと誓詞を渡してもらいましたがのこりが動きが変わりませぬ。」

「わかりました。十分警戒しておきます。晴信様のことはお頼みします。」

勘助は了承の意を込めて一礼して晴信の脇に戻る。そして全軍が躑躅ヶ崎に到着する。しかし動きはなく屋敷内をくまなく探したが猫の子一匹いないとのこと。

「不気味すぎる。あの戦狂いと言っていいほどの父上にしては・・・。」

「晴信様、そのようにおびえているような態度をしておれば付け入る隙ができまする。自重を・・・。」

「すまないな、板垣の爺。少々弱気になっていたようだ。」

「しかし信虎様もこの状況でいかがするつもりであろうか？家宝の物品は持ち去っているようだが・・・」

武田家重代の家宝である御旗と楯無の鎧は持ち出されていることは確認されている。そして信虎自身も積翠寺に居ることは確認されている。

「そうはいうが板垣殿。あのお館様がここまで動きがないと不気味でしょうがないと思わぬか？」

「そうは言うが駒井殿。この城下町に敵一人も折らぬのは確認しておるし民草に聞いて信虎様が積翠寺にいることも確認してある。警戒はするべきでも無暗におびえるのはどうかと・・・。」

「すまぬ、甘利殿。どうもお館様に対する恐ろしさが抜けていないようだ。今日はゆっくり休んで明日に備えるとするか。」

そうしよう、そうしよう。とあてがわれた部屋に向かう三家老。接収された躑躅ヶ崎には豪族たちが部屋分けされて本日の宿としてい

る。兵士たちも躑躅ヶ崎の内部と外部で宿泊することが決まっている。

「晴信様。」

「勘助・・・。やはり父上が動かないわけは無い。」

「確かにそうでございます。それに信濃の豪族たちも、諏訪と禰津以外は援軍を送る気は無いとの情報を得ております。そしてその二家も援軍を送るのに二週間ほどかかるとのことです。」

「そうだ。そういう情報があるのに父上が動かないというのはおかしいと思ってしまう。」

「板垣様が申したように警戒することは大事でも怯えることはいけませぬ。本日はゆるりとお休みください。明日は積翠寺を攻めなければいけません。お館様が考えた秘策もございましょう。それが成ればいくら信濃の豪族が攻めてきても少数の兵で信虎様を抑え大多数の兵で信濃の者を撃退できましょう。」

それだけを告げると勘助は身を反して兵たちの配備に向かった。そして晴信は近くにいる近習の者に典厩を呼ぶように命じた。

「いったい何用だ?評定や公式の場では無く私室に来いって。」

昔の新館が焼き討ちされて消失しているため現在の晴信の私室は今は亡き実母の大井の方がいた部屋を使っている。信虎の部屋とは近いが更に奥になる。刀を入り口の刀掛けに置いて中に呼びかける典厩。

「お呼びでしょうか?」

「おう、典厩か。入れ。」

晴信の声に応じて入る典厩。なかには刀に手を掛けている晴信がいた。

「な、なにをやってんだ?勝千代?」

「気にしないでくれ・・・。どうも・・な。」

トストスと軽く足音を立てて勝千代に近づいて正面に座る。

「なんて顔色してんだよ。そんな土気色の顔色して・・・」

汗が体中から出ているのか良く見れば敷いている座布団もぬれている。どうした事か。と更に近づき方に手を当てると小刻みだが確かに震えていた。

「勝千代、体がどうかしたのか?体の調子が悪いなら医師を呼ぶぞ?」

その言葉に刀を握りながら顔を振る勝千代。だが汗や震えは止まるどころか増えているようだ。

「義信、手を貸してくれ・・・・。」

義信が手を差し出すと勝千代は刀を放り投げて両手で義信の手を握る。

「なぁ、震えがとまらないんだ。恐怖(こわいわけ)じゃない、武者震い(たのしいわけ)でもない。なんだか体の奥底から何かが上がってくるんだ。何が上がってくるか分らない。上りきったらうれしいんだと思う感情だけど・・・・。逆に上がると嫌なんだ。」

すがる様な、にらむ様な目線を送ってくる勝千代に驚く義信。驚いた顔を見ても言葉を続ける勝千代。

「なんて言えばいいんだろう。ただ一人でいると飲まれて元に戻れないような気がする。戻れるけど戻れない様な、自分でも何を言っているか分らないけど落ち着かないんだ。落ち着くまでここにいてくれ。」

年相応な少女の顔をする勝千代。それに親戚の女の子を思い出す義信。思春期特有の情緒が不安定なその女の子は誰かが一緒にいればしばらくすれば落ち着いていつもどおりになるため勝千代も同じようにすればいいと思って一緒にいることにした。

「とにかく、とにかく落ち着こう、な。布団を持ってきてやるから横になってろ。」

布団を持ってこようと立ち上がろうとするが震える勝千代は離そうとしない。

「えっと・・・・離してくれないと・・・動けないんだが・・・・。」

「動かないでいいから、落ち着くまでいいから!!」

梃子でも離すつもりは無いようなので仕方なく座る義信。少しの時間たてばいいだろうと思っていたがそうではなかった。
「あの勝千代さん?」
「な、なんだ。」
「かれこれ三刻（六時間）たつのですが・・・さすがに手や足が痺れてきたんですけど。」
「もう少しでいいんだ。もうすこしだから・・・・・。」
などというやり取りが何度続いたことだろう。途中勘助や三家老がやってきたが部屋の外で待たせて対応したほどだ。そして義信が医者を呼ぶと言ったのも断った。
「そろそろ、日が暮れるのですが・・・・。」
「それでも、もう少しだから!!」
「えっと・・・あの～・・・・。」
なんといっていいかわからない義信だがそろそろ戻る口実を考えないと同室の三枝宗吾昌貞や工藤源左衛門繁長が心配するため口実を探して戻らないといけない。少し考えるとある考えが浮かぶ
「勝千代。そろそろ湯に入らないと俺もにおうし・・・勝千代もさっきすごい汗をかいたから汗を流してすっきりすればいいと思うぞ。それに総大将が汗のにおいがするなんて格好がつかないぞ。」
そういうと勝千代も同意したようにうなずき立ち上がる。これで終わりかとやれやれと息を吐いて力を抜くがグイグイと引っ張られる。
「あの、勝千代さん。なんでしょうか?」
「おまえも来い。」
大声を出しそうになったが口を押さえ何とか抑える。声を小さくして
「何言ってんだ・・・。男女七歳にして席を同じうせずって礼記（らいき）にもあるだろうが・・。」
礼記とは紀元前中国で書かれた日常生活や礼儀が書かれた本だ。この時代には学んでいる人も多い。
「いいから!!来い!!」
グキンと嫌な音がしたが勝千代は気にせずズルズルと引っ張る。必

死に抵抗するが力はあちらが強いようで動きを遅くすることはできるが綱引きならぬ腕引きの状態になりながら通常の十倍以上の時間をかけて風呂に到着する。無論義信は蹴っ飛ばしてでも逃げるつもりだったがすべての攻撃を先読みするように防がれとどめに股間を蹴り上げられれ悶絶して連れ込まれた。

「んで？これからどうするつもりだ？」

激痛を訴える股間を押さえながら怒ったように勝千代に尋ねる義信だが気にせず脱ぎ始める勝千代。別にマッサージで見慣れているため気にしない義信はつかんでいる手を離さないと着物を脱げないため手を離した瞬間脱出するつもりだった。そして手が離れる。

（いまだはぁ！）

それを見越していたかのように後ろ回し蹴りが後頭部にあたり倒れた義信の手を再びつかみ湯に入る勝千代。勝千代は湯衣を着ているが義信は着てきた服のままだ。その義信を温泉に放り込む。

「ぶぶっ、何考えてやがる勝千代！！！」

大声で怒鳴る義信だが気にせず湯に入る勝千代。更にたずねる義信に対して

「頼むから・・・・落ち着くまで一緒にいてくれ・・・。」

と涙目で告げる勝千代に最終兵器を使われてしぶしぶされるがままにすることにした義信。

「わかったよ。そっちが満足するまで我慢してやる。」

「うん。」

ただ一言言うとおとなしくなる勝千代だが震えは止まらない。少しずつ弱くはなっているらしいのだが義信には代わらないように感じた。

「・・・・怖いんだけど楽しいんだ。」

風呂に入って十分ほどたつと、不意に勝千代がこちらも向いてる告げる。

「ん？」

「怖くも楽しくも無いんじゃなくて・・・怖いけど楽しいんだ・・。

」
「どういうことだ?」
「多分、父上を認めさせるためにはこうするしかなかったんだと思う。力いっぱい戦える相手がいるってのが楽しいんだと思うし、もしも父上が認めてくれなかったらと思うと、父上を殺してしまうと思ってしまうと怖いんだ。あの父上もあたしが生まれれ物心がついて二年ぐらいはやさしかったんだ。民衆には道を作ったり開墾したり、城下町も整備して中部で犯罪が一番無い領国と言われたこと、あった。」
確かに歴史上の信虎も内政に力を入れていた時期も確かにあった。講談にかかれるように夏桀殷紂の暴君であった事実は史実には無い。
「でも孫六や次郎が生まれてから周囲の国に攻められ、攻めてを繰り返してから変わってしまった。・・・父上を倒してもあたしがそうなる可能性が無いってことは無い。もしもそうなってしまったら・・・。」
「こらこら。」
ビシャっとお湯をかける義信。
「言っちゃ何だが、俺が知っている武田信玄は内政家として俺の世代でもこの甲斐の国では神様仏様のように尊敬されているんだ。同じ歴史って分けじゃないけど多分お前がそうなっても支えてくれる部下や親族がいるはずだ。」
武田信玄が佐久でかなりひどいことをやったり謀略や裏切りを重ねたところはぼかして勝千代を慰める義信。柄じゃない事をやってると思い自分自身かなり恥ずかしい。
「そうかな。そうだろうね。あたしらしくなかったかもな。」
「そうそう。先を恐れることは誰にでもある。この時代なら俺の時代よりあるかもしれないけどそんな心配なんて後々考えていけばいい。」
「そうだね。義信と話すと軍略や政治なんかじゃ解決できないことも解決できるよ。爺もいつも遠慮していて一歩ひいていたから・・・

・寂しかったのかな。」
中国の魏の曹操も後漢の劉秀も同等に見てくれる家臣や友人、家族がいるから飲まれず天下を取った。義信は自分自身の考えを告げると、うんうん。とうなずく勝千代。震えも止まったようだ。
「じゃぁ、俺は出るよ。」
さすがに服を着た間はいると服が張り付いて気持ちが悪い上にのぼせてきたため出ようとするが、勝千代に引き止められる。
「なんだ?もう震えは止まっただろう?」
「うん。のぼせたんなら、体を冷やすついでに体をながしてくれない?」
「ことわってもさせるんだろ・・・。はぁ、いいよ。」
石鹸を渡してもらい手ぬぐいに擦り付けて背中を流す。ゴシゴシと力を込めて洗い流す。いつものマッサージの感じで力加減は場所場所で変えていく。
「へぇ、下女に任せるより体がすっきりする感じがするな。今度からもやってもらおうかな?」
「勘弁してくれ、結婚相手や下女に教えるからそいつらにやってもらいな。」
「結婚相手って言ってもまだ相手がいないからな。」
「まぁ、まだ十五なんだからゆっくりしていればいいさ。いずれは決まるだろう。」
「そうだね。ゆっくりするか・・・・・。」
と、いつも通り悪友のような対等な関係に戻った二人がゆっくりしていると。バーンと扉を力任せにあける音が聞こえ後ろを振り向くと槍を装備した兵が五名居た。湯衣で体を隠す勝千代と前に立つ義信。
「何者だ?」
「武田晴信様とお見受けします。」
「だったら・・・・」
「お命頂戴いたします。」

槍を突きつけてくる敵兵はそう言い放つと狭い浴場では槍が邪魔になるため槍を捨てて刀を抜く。
「動きが遅い！！」
抜き終わる前に片手で泡立てた石鹸水を顔面めがけてかける義信。
ただの水だと思い気にしなかった敵兵だが激痛に見舞われる。
「な、なんだこれは！！」
「石鹸水は目にしみるだろう？！勝千代、これを水に溶かして床にまけ。」
「はいよ。」
もったいないとは思ったが予備もたくさんあるし命には代えられないと貴重な石鹸を溶かしてもらい床にまいてもらう。義信自身は砂がないため濡らした肌着や着物を下に置いて足場にして相手に襲い掛かる。
「て、敵か・・・うわ！！」
濃度の高い石鹸水に足をとられて転ぶ敵兵から刀を取り上げて次々に刺し殺していく義信。三人を倒すと入り口から更に増援が数名入ってくる。
「十名とはいかないが・・・厳しいな。」
刀を構えなおす義信。自分の刀は晴信の部屋に置いてきたため鈍らで敵を切り続ける。更に二名を切り殺すと相手が弓を射掛けてきた。勝千代に多い被さり盾になる義信。肩と背中に刺さるが浅手で動きも鈍らない。相手が構える前に斬り殺す。残った敵兵は増援を呼びに戻ったため今のうちに味方と合流することにする。晴信の部屋に向かい刀と勝千代の服に鎧を手に入れないといけないため危険を承知で部屋に戻る。
「居たぞ！はる・・ぎゃ！」
「こ・・ぎひ！」
背中に勝千代を匿いながら上手いことに敵に少ない通りを通って敵を切り倒していく。そして部屋に着くと
「は、晴信様。」

「勘助！！民部！！」
完全武装の勘助と教来石民部景政がいた。
「典厩殿、お怪我を！！」
「なんでもない。浅手だ。勘助殿、晴信様をお願いいたします。」
女物だが服を借りて鈍ら刀を捨てて自分の刀である八文字と山姥切を腰に差して自分の部屋へ飛び出していく。民部が居れば大体の敵はどうにかなるだろう。
「じゃまだ！！」
鈍らと違い鎧武者をかぶとと鎧ごと斬り殺したという逸話を持つ八文字は敵を次々に斬り殺していく。そして中庭突っ切り自分の部屋に戻る。敵はかなりいるらしい。自分の部屋に飛び込むと数名の敵の死体と源左衛門と宗吾がいた。
「無事か二人とも。」
「典厩様こそ、良くぞご無事で！！」
「宗吾。敵は？」
「は、はい。敵は城下町の民草を脅して城下町の各部屋に隠れていた模様です。日暮れと同時に攻めてまいりました。どうやら完全に包囲されてこちらの兵力はズタズタに分散されて恐慌状態です。」
「まとまった兵力はないか？源左衛門？」
「典厩隊五十と山本隊百五十に御側衆に先駆け衆の合計五百は善戦している模様ですが・・」
「あ、赤備えだ！！！！」
源左衛門の報告が終わるか終わらないかの瞬間に外から驚愕した声が聞こえる。外を見てみると赤一色の具足を着た部隊が流れ込んでいた。それにより味方の今日は極限まで上がり戦わずに服も着ないで逃げる味方まで現れた。そして焦げた匂いがする。だれかが屋敷に火を放ったらしい。
「源左衛門、宗吾。」
「「はっ！！」」
「お前たちは晴信様と合流して先駆け衆とともに兵を立て直すよう

に晴信様に伝えてくれ。」
「「典厩様は？」」
「この腐った士気を取り戻す。さっさといけ！！」
「はっ！」
「御意に！！」
二人が敵兵を倒しながら外に向かって出発する。
「八千代。」
「なんじゃ？」
スッそこに居たかのように現れるのは望月八千代信永だ。
「お前はすぐに小山田殿と原殿に場内に火矢と投石で徹底的に攻撃するようにお願いしてくれ。そして真田殿に敗残兵をまとめて晴信様に合流するように伝えてくれ。」
「御意に・・・。」
スッと消えるように駆け出す八千代。人柄は良く分らないが命じられたことは完璧にするようだった。今言った作戦も作戦という物ではなく被害を最低限に食い止めようと思いついたことだった。自分自身考えたりする参謀タイプでないと自覚していたがこういうときに動ける行動家だとも自覚していた。そして自分自身はは中庭に飛び出して赤備えを数名切り倒す。そして大声で
「我が名は武田典厩信繁なり！！赤備えの将よ！！我が首がほしければかかってくるがいい！！」
と叫びさらに数名の赤備えを切り倒す。そして騎馬武者が現れる。
一人は見知った顔だ。
「我が名は飯富三郎兵衛昌景なり！１」
「ワシはその叔父にして飯富兵部少輔虎昌だ！！お主か、先ほどの大音声と我が手勢を切り倒しのは！？」
「無論！」
「そして何用だ！！」
「冥土の土産に、いや、この戦の手柄にお主の身柄がほしいと思ったまで！！飯富兵部少輔虎昌よ！！」

「ほう、三郎兵衛ではなくこのワシの身柄と申したな?このワシを生きて捕らえるつもりか?」
殺気が強くなるがかまわず続ける。
「おう!三郎兵衛殿はすでに新館で倒しておりますゆえ、次はお主の番ということだ!!」
その言葉に三郎兵衛を見る兵部小輔。その目線にうなずく三郎兵衛。
「どうやらその言葉にうそはないようだ!!良かろう!!相手になってやろう!!」
馬から降りると一間半（約三m）ある鉄製の棍を構える。
「こちらもお主の首を取って手柄と三郎兵衛の仇をとってくれるわ!!」
「意気やよし!!勝負!!」

躑躅ヶ崎の合戦（後書き）

ちょっと長いかな?しかも中途半端に終わった。・・・現在ハードクラッシュから復旧して創作・二次創作の両方のプロットを書き直している作者です。がんばっていきます。

飯富兵部少輔ＶＳ典厩信繁（前書き）

朝寝て夜起きる生活がつつく。

飯富兵部少輔ＶＳ典厩信繁

「ふぅぅ・・・・・。」
「・・・・・・・・・。」
ゆったりと構える飯富兵部少輔虎昌。その周りをぐるりと回るように動く義信。
「・・・ふん。ワシの身柄を捕らえるのではなかったのか？」
「・・・・・・・・・」
こちらもすぐにはかからずに時間を稼ぐようにゆったりと動く。時間さえ稼げば真田と原に小山田がなんとかする。
「ふんっ！！三郎兵衛を倒したと言うから武辺一辺倒の猪武者かと思えば・・・、矛先をずらす為の策を考えられるとは！！」
踏み込むと同時に槍を突き出す。上下と槍が頭の横と足元を通る。
「今のははずしてやった。これ以上腑抜けた戦をするようならこの屋敷と同じように焼き尽くしくれる。」
「くっ・・。」
刀を下段に構える義信。それに対して青筋を立てて槍の石突を地面に突き立てる。
「貴様も・・・武士にあらずか・・・。武器を構えながら逃げに走るとは・・・。」
殺気が消えるようにピリピリした空気がおとなしくなる。そして槍を構えなおす虎昌。
「ぬん！！」
今までとは雲泥の差と言っていいほどの突きが来る。それを刀で防ぐ義信。虎昌は足を開き腰を落とすように槍を払って首を飛ばしにかかるがそれも防ぐ。
「・・・・・はぁああ！！」
手ではなく体全体で弧を描かずに直線的に攻撃が来る。直線的といえば簡単に思えるが弧を描くはずの長柄武器の薙ぎや払いを突きよ

り鋭く速くするのは恐ろしいの一言。
「よっと・・・やっと・・・そいっと。」
攻撃が来る一瞬前に息を吐くように刀で攻撃を防ぎ続ける義信。さらに動きが速くなり、こちらも防ぐのではなく弾くように対応する。
「・・・・ふん!!」
突きからの上昇攻撃で刀を腕ごと上げられて胸元が空く。そこに突きが来るが尻餅をつくように横に転がり倒れる。
「無様な。」
「なんとでもいえ。こちとら生き残るので精一杯だ。」
起き上がり虎昌の言葉に対応する義信。
(こりゃ、防いでいて時間を稼ぐどころじゃないな。恐ろしい槍捌きだ。)
虎昌が言ったように逃げるつもりだった義信は相手を倒すために構えを左八双に構えなおす。気迫を込めて大声を放つ。
「ちぇえええええい!!」
「やっとやる気になったか・・・いや、言動に責任をとってもらわないとな。しっかりわしの身を捕らえてみせい!!できぬのなら・・・死ねい!!」
槍を足元に突いてくるがこちらも高速の切り上げを行い槍先をずらす。槍は勢いのまま上がり義信の二段目の攻撃が腹部を切り払うなずだった。そう、相手が並みの相手なら・・・。
「・・・・・防ぎやがった。」
「危ういな・・・」
虎昌は槍があがると同時に槍を捨てて脇差を抜き放ち義信得意の剣術を防ぎきった。これを防いだ人間が数えるほどいないため戦場でありながら唖然としてしまう。
「なかなかの速さとキレだな。なんという名の剣だ?」
虎昌の後ろであがった槍がカランと音を立てて落ちてくる。それに目をくれずに尋ねる虎昌に
「・・・・我流というやつだな。一応流れは中条流らしいがな。」

「師は?公明な人物であろう。これほどの門人を育てるのであれば。」
脇差を直し馬の場所に戻り馬の鞍にある使い慣れたような薙刀を抜き取る虎昌。
「いまの世に師はいない。」
「ほう。なれば父祖直伝とでも言うべきかな?いやいや、おぬしは武士ではなく武芸者といったところか・・・・・。なれば手加減はいらぬな。」
ブンブンと恐ろしい音を立てて構えをなおす虎昌。義信の目の前には怒りも侮蔑もない。ただ敵を倒すことだけに全力を尽くす甲斐最強・赤備えの総大将がいた。
「ぬむん!!!」
ドオンと振り下ろした先が土がえぐれ矛先が突き刺さる。
「ぼおっとしていれば切り倒すぞ。」
「ぬ・・・・う。」
刀を構えなおす義信。完全に空気はあちらのものだ。
(流れを変えないとな。)
「せえい!!」
八文字を脇構えに直しこちらから攻撃する。横払いからの上下横の連続攻撃。
「でやあ!!」
「おおい!!」
義信の攻撃をすべて防いで薙刀を振るう虎昌。それを体全体を使って抑える。鍔迫り合いが起こりギャリリ・・・と鉄と鉄がこすれる音がする。
「どうしたことか・・・・。逃げずに戦ったほうが時間が稼げるのではないか?!」
「皮肉か!!そちらこそこちらに策や罠があると知っていてなぜ戦う?!」
全力をもって薙刀を押さえ込み一歩一歩進む義信。

「どのような策があろうとそれごと食い破るのが我等の赤備えの心構え!!」
「戦狂いが!!」
近づかれては不利と半歩下がり払いあげるように刀の押さえを払う虎昌。離れずに刀を青眼に構える義信。
「それは心外だな!!おぬしも男であり武芸者なら・・・強き者と戦うと心が昂ぶるであろう!!」
義信を撃ち殺す勢いで力任せに薙刀に対して柄でそれを防ぐ義信。かなり手がしびれるが刀は放さない。
「ちっ、真性の戦好きかよ!!」
「ふん!!」
上下に連続して攻撃する虎昌に対して一歩ずつ進むが防ぐことしかできない。
「なら・・・おぬしは三郎兵衛と戦ったときに高揚感はなかったのか?!」
「生き残ることでいっぱいいっぱいだったぜ!!」
「なら・・・おぬしは戦場では生きのこんぞ!!」
体を一回転させての全力の払いに刀を弾き飛ばされる義信。すぐさま山姥切を抜き次撃を防ぐ。
「ほおぅ、なかなか良い刀を持っているな!!」
「もらいものでな!」
また防ぎながら虎昌に近づいていく義信。そして自分の得意な距離で戦おうとする虎昌の攻防が何度も繰り返される。防ぎながら迫る義信と攻めながら退く虎昌とおかしな構図が続く。
(このままだと体力がもたないな。)
(それにしてもこの若者・・・一合防ぐたびに反応が早くなる。)
義信進むのをやめて構えをなおす。それを見計らい上段から振り下ろす虎昌。
「あまいわ!!」
先ほどは呆然と見送った一太刀を左手一本でいなす。

「ぬぅ・・。」
（やはりこやつは天才ではないが・・・秀才でもない。あえていうなら・・・最下位の天才で別格の秀才とでも言うべきか。）
（やっと対応ができるようなったか？・・・ちっ・・・まだだな。）
ギンギンと刀と薙刀が競り合う。先ほどと同じように一回転しての払いを行う虎昌。それを両手と足を使って防ぐ。峰が足に食い込み痛みを訴えるが無視して脇差を抜いて片手で突く。
「とんだ見込み違いだな！！」
「なにが・・・だ！！」
「最初は腑抜け。次に武芸者。今ではワシに戦いを学ぶ生徒とでも言えばいいか！？見抜けるが見抜けない。矛盾した強さと才能に努力だ！」
「才能なんて・・・・・・・ねぇよ！！」
再び鍔迫り合いになるが二刀を使った攻撃にすぐに解除される。
「ふふふふ・・・。これほどの戦いをして才能がないと申すか！」
「無才だから努力したんだってんだ！！才能の一言で片付けるな！！」
（踏み込みが浅いか！！ならっ・・）
（ワシに一太刀・・・頬に掠った程度とはいえ当ておったか！！）
脇差の一太刀が頬に掠って軽い出血をする虎昌。それに対して赤備えが槍を構える。
「やめぬか！！ワシの面子に傷をつけようものならその者は斬罪にするぞ！！」
虎昌の一言に槍をなおす赤備え。
「こちらも策があるのだから・・・手助けしてもいいんだぞ！！」
「ワシを侮るでないわ！！若造がぁああ！！」
再び大上段からの振り下ろし、それをいなして地面突き刺さる薙刀。
「スキあり！！」
「こちらがじゃ！！」
地面に突き刺さったのを見計らい斬りかかる義信に地面ごと吹き飛

ばし不完全な体勢ながら横薙ぎを行う虎昌。鈍くいやな音が響く。
「ぐぅうのおう・・・。つ、捕まえたぞ!!この薙刀!!」
左手がグミャリといやな方向に曲がり重度の骨折を表しているが義信は折れた左手を使い薙刀を掴む。とんでもない痛みが走り目の前が白くなるが動かすことによる更なる痛みで気絶もできない。そして掴んだ薙刀を足を使って踏み込む封じ虎昌の腕を峰で叩き薙刀を離させる。
「くぅむ。」
そのまま飛び掛り首筋に山姥切を当てる。
「ぬかったわ・・・。」
「飯富兵部少輔!!召し取った!」
刀を当てつつ回りを見渡す。
「叔父上!!」
馬から降りて槍を構える昌景。それに対して虎昌は
「止めぬか・・・。いくら手傷を負っているといっても今のおぬしにはこやつは倒せぬ。槍を引け。」
と告げる。
「しかし・・・。」
「しかしもかかしもない。槍を引くのだ三郎兵衛。皆も槍を引け。」
そう言うと赤備えは全員が槍を下げる。
「このまま首を取るのか?」
「いや・・・このまま表に出てもらう。そして勝千・・・晴信様に帰順してもらう。」
「ワシにお館様を裏切れと?」
歯を食いしばりながら喋る義信。
「そ、そういうわけではない。後は積翠寺しか拠点はない。援軍も期待ができない上に援軍が来たあと何を要求されるか分かったものではない。・・・ふぅ・・・はぁ・・・。このまま信虎に任せていたら外から崩れる前に中が崩れる。」
「確かにそうだが・・・ワシ達は拾ってもらった恩がある。」

「なら・・・和睦できるように仲立ちを頼む。このまま長引けば晴信様は父親を殺す可能性がある。」
「そう簡単にお館様は退かぬぞ。」
「晴信様の策が上手くいけばどうにかなる。」
「・・・それで・・・それで和睦した後にお館様はどうなる?」
「信虎には京に行ってもらう。そこで朝廷に工作をしもらう。」
「お館様を利用するということか?」
「そうとってもらってもかまわない。命も地位も金も保証される。」
「確かだろうな。」
「約束はできないが精一杯してみる。」
「・・・・・分かった。晴信様に降ろう。」
虎昌の目には信虎様が死んだ場合はおぬしもただではおかない。と言っていた。
「じゃあ、さっさと出よう。このままだと石礫や火矢で殺されかねないからな。」
刀を引いて飛ばされた八文字を拾い収めると虎昌を先導して正門を目指した。

飯富兵部少輔ＶＳ典厩信繁（後書き）

徹夜で分が散発過ぎる気がするが・・・一応終わりです。

城攻め前日・序（前書き）

なぜか前日と前々日にログインできなかった。なぜだ？

城攻め前日・序

「いぎぎぎぎ・・・・・・・。」
「赤備えの武具はすべてが鋼鉄製って聞いていなかったんですか？典厩さん。」
グルグルと添え木と包帯代わりの布切れを巻く勝千代。・・・・・に似た少女・武田‘逍遥軒’信廉。通称・孫六がやさしく丁寧に治療をしてくれる。赤備えの将を捕らえた。もとい、客将扱いで戻った際に二人を連れて陣屋に入ってびっくりしてしまったものだ。見た目は何せ瓜二つ・同じ背格好といっていい顔かたちだった。まぁ、見た目は、な。
「まさか、すぐにわかるなんて・・。爺やおじさま達にも見分けがつかないのに・・。わかるのは父上と・・・・・次郎だけだった。」
「本物の典厩か・・・・。」
「本物って？」
「いや、いんや。おっと、どもども。」
グルグルと巻かれて五倍以上の太さになった腕を回しながら礼を言う。多少テンションと言動がおかしいのはまだ気分が昂っているからだ。
「徳本先生のところに行かないで大丈夫なの？あの先生は男の人で若いけど色眼鏡で見たりしないわよ？」
「けどね・・・あのお――「義信はな、あの徳本が苦手なんだよ。」幕をくぐり入ってくる武田勝千代晴信。顔にはいたずらが成功した子供のように無邪気な笑みを浮かべている。赤備えの将二人との対面は終わったらしい。雰囲気から見ると結果は良かったようだ。
「勝千代か。」
「姉上。」
「それで義信の容態は？」
歴史上では絵画など芸術に優れていたようにこちらの逍遥軒は医術

と忍術を修めている。
「粉砕骨折のようです。」
その報告に眉をひそめる勝千代。義信のほうを見て
「まったく・・・無理か無茶か知らないけど、やっていいことと悪いことがあるだろう。」
首を振りながらため息をつく勝千代。
「うるせぇな・・・。ったく、あの条件ではああいうやり方しか思いつかなかったんだよ。」
「まぁ、それは認めるがな。それに敵将を帰順させたんだから褒美はやってもお叱りはなよな。」
「え?手柄になんの?」
「手柄も手柄、大手柄ですよ。何せ相手の最強部隊を丸々手に入れたのですよ。勲功第一と言ってもいいほどのお手柄です。」
「孫六の言うとおり。だが・・・・」
「だが・・・なんですか?姉上?」
「報いるものがない。早い話がこちらについた豪族衆に上げる報酬でいっぱいいっぱいなんだよな。事情が分かっているうえに跡継ぎ問題が解決できる穴山や小山田は領土はなし、真田は信濃の一群でいいって話はついているが残りの連中が大なり小なりほしがっているからな。」
「別に領土がほしい訳じゃないから別にいらないけど、なぁ。」
「それじゃあ、こまるんだよ。こっちは・・・。」
「何でよ?」
「立場も姉上が当主になれば副将、つまり家臣としては最高格、しかも俸禄は陪臣(またもの)としては最高峰であり全体で約十八万石ほどです。その中で五百貫といえば、だいたい四千石。表石高(みせかけ)だけとはいえ全体の三分ほどがあなたの俸禄です。これ以上あげることになれば何を褒美で与えていいのか。」
「説明ご苦労。孫六の言うとおりに甲斐の国は隣国の信濃のようにもともと肥沃な土地でもない。まして駿河や相模のように漁業や塩

など貿易するにも特産品がない。」
「十八万石は最大であってそれ以下はあってもそれ以上はないのです。」
ものすごく悩み始める当主姉妹。それをみて思わず口が滑ってしまう義信。
「えっ、でも甲斐の国って鉱物がたくさん・・・・あ・・。」
その言葉を聴いてグルンと顔を向ける二人。目が据わっているためかなり怖い。
「・・・いまなんと。」
「もう一回言おうか・・・。」
一歩下がろうとするが座っているうえに逍遥軒に腕を掴まれて逃げることもできない。
「え・・と・・・。ナンデモナイデスヨ。」
「さぁ、もう一度言おうか。」
スラリと腰から刀を引き抜く勝千代。
「ちょっと待った。勝千代!!」
静止して勝千代だけが見えるように口だけを動かす義信
(未・来・の・事・は・聞・か・な・い・ん・じゃ・な・か・っ・た・の・か?)
(細・か・い・こ・と・は・聞・か・な・い・か・ら・い・い・ん・だ・よ。場・所・は・い・い・か・ら・採・れ・る・か・採・れ・な・い・か・だ・け・を・お・し・え・や・が・れ!!)
向こうも口だけを動かして答える勝千代。逃げられないと悟った義信は答える
「たしか金と砂金に水晶も取れるはず。銅も鉄もあった気がするな。」
そう答えるとコブシを天に掲げ喜びを表す二人。気炎が上がっているので恐ろしさも数倍になる。
「「っやた~!!」」
この後は歓喜の声を上げる二人が狂喜乱舞したのは言うまでもない。

城攻め前日・序（後書き）

そして投稿しようとするたびエラーが起きてやってられない作者です。今回は中途半端な上にリハビリで短いですが、これからは前のように更新していきます。すいませんです。

城攻め前日・序　その2（前書き）

不定期・不条理・不規則の三重苦。仕事変えようかな？

城攻め前日・序　その2

気炎を上げていた二人をさっさとなだめ話を元に戻す。
「まったく・・・・。喜ぶのはいいが取り乱すなよ。」
「ごめん。」
「すいません。」
拳骨でたたかれて赤くなった額を押さえて謝る武田家当主（予定）の武田晴信こと勝千代とその妹にして影武者兼忍頭の武田逍遥軒信廉こと孫六。
「はいはい。話を元に戻すぞ。恩賞の件は？」
「それなんだけど先ほども言ったようにあげれる物がないんだよ。・・・ほんとどうするかなぁ。」
腕を組んで首をひねる勝千代。
「領地がだめなら武具や馬でもいいんじゃないのか？」
「五百貫相当の馬や武具なんてこの甲斐にそうそうあるわけじゃない。金といっても金山もまだないからたくさんはむりだな。まぁ、あることはわかったんだ簡単に当ててやるよ。」
ハッハッハと笑う勝千代にその方法を問う典厩。その答えは
「勘一発で。」
「おいおい・・・・。」
あきれてうんざりする典厩だったが孫六が
「姉上の勘はすごいんですよ。数年前には温泉を数個掘り当てましたから。」
というと素直に感心してしまう。
「それまで恩賞は無しってことにはできないのか？」
「そんなことをしたらほかの豪族たちが恩賞をもらいづらいだろうが。」
「なら官職は？武家官位ってやつは？俺は無官だろう？」
「何を言っているのですか？典厩さん、あなたは姉上から典厩とい

う左馬頭という官職をもらっているのですから姉上が国主になり‘やまと御所’から官位をいただいたとしても正五位上の大膳大夫か左京大夫をもらえるのが精々です。　従五位下の格を持っているのですから典厩さんはさすがにもらえないですよ。」

そう説明する孫六も典厩と同位の刑部少輔を持っている。こちらは正式にもらったものであくまで武田家中では同格でも全国的に見れば無位無官な義信とは天と地の差がある。

「なんでさ?まだ間があるじゃないか?」

「そうなんですが、ええと・・・・」

「不文律か、なにかはしらないけど跡継ぎ以外には無理ってことになってんだ。それでなっとくしてくれ。」

こまる孫六に助け舟をだす勝千代。

「わかった、わかった。別のやつを考えるよ。」

「すまないがそうしてくれ。・・・っていまさら言うが、まだ父上にも勝っていないのに皮算用していちゃ意味がないな。」

「そりゃそうだな。勝ってから考えるよ。」

問題を先延ばしにすることで問題を解決する三人だった。

（それにしてもマイナスで困るんじゃなくてプラスの面で困るとは・・・なんともなぁ。）

やれやれと肩をすくめて評定に向かう三人。陣をくぐってすぐに勘助が現れた。

「晴信様。少々よろしいでしょうか?」

「勘助か。戦のことならこれから評定の予定だろう。そのときにでも・・・」

「いえ、実はよくない知らせが・・・。竜王川が・・・。」

勘助の言葉に心当たりがあるのか晴信は顔色を少し悪くして勘助に二言三言伝える。

「かしこまりました。」

立ち上がるとすぐさま厩（うまや）に駆けていく勘助。どうやらすぐにどこかに行くらしい。

「勘助が・・・なんだって?」
「竜王川が、笛吹川と釜無川が決壊したらしい。」
「雨季でもないだろうに?どういうことだ?」
「勘助が言うには前日に仕掛けがしていたらしい。たぶん父上が起こしたのだろう。」
「あ、姉上、さすがにそれは・・・・。あそこまで狂気に飲まれておりますが、いくら父上でも・・・。」
信じられないように孫六が訴えるが勝千代はしっかりとした口調で孫六を戒める。
「孫六。父上はあたしに勝つためなら甲斐国を焦土としてもかまわないのだろう。」
それほどあたしが憎いか。と勝千代の目にも今までになかった恨みや悪意の負の感情が表れる。相当に頭にきているようだ。恐ろしいまでの存在感を放ちながら武将が並ぶ陣に入っていった。

城攻め前日・序　その2（後書き）

一週間以上文面をまったく見ないだけでわけがわからなくなっている筆者です。そのせいで今までは一回で書けた話が分割して書く始末です。リハビリを続けてうまくならないとなぁ。本日か明日の明朝にはもう一話更新します。

城攻め前日・後（前書き）

昨日更新しようとして何を書こうか忘れてしまった作者です。若年性健忘症か？関係ないけどマブラヴとオルタがセットで発売するらしい。どうしようか・・・。

城攻め前日・後

「これより軍議を始める。各々（おのおの）、何か意見があれば述べるように。」

逍遥軒信廉こと孫六の宣言から軍議兼評議が始まった。ちなみに孫六は頭巾と大きめの服装に声を変えているため勝千代こと晴信とは似ても似つかない格好になっている。

「まずは先だっての躑躅ヶ崎での一戦。赤備えの奇襲からあたしを守りきった上に二将をとらえ帰属させた典厩の働きは見事であった。」

「ありがたきお言葉にてございます。」

深々と頭を下げる典厩信繁こと三条義信。内心は

（行動て、いっても行き当たりばったりだしな。もしももっと時間がかかっていたら投石や弓であの世にいきところだったな。）

今思い出しても背筋に鳥肌が立つ。

「こちらに褒美の書いてある書状がある。謹んで受け取られよ。」

膝立ちのまま進み逍遥軒から書状をもらう典厩。無論褒美が決まっていないため中身は白紙だ。受け取るとそのまま頭を下げながら立ち上がり晴信の横に置かれている席に座る。

「評議はこのあたりで終わる。では次に軍議を行う。」

淡々と進行を続ける晴信。そして多数の妬みややきもち視線を受ける典厩。どうせ内容はたいしたことがない。

（新参者風情が・・・・とか、胡乱なやつ。とか思われてるんだろうな。）

ヤレヤレと頭を数度掻く典厩。そういう間にも軍議は続く。

「先ほども逍遥軒も言ったように忌憚のない意見を述べよ。遠慮はいらぬ。」

作戦自体は大まかに決まっていたが味方の国人・豪族からもっと良い意見が出る可能性があるため意見を聞く晴信。そして三人の人物

が前に出てくる。そしてさらに一人が前に出る。
「晴信様。良ければわれらの愚考をお聞きくださいますか？」
意見を述べる男性。名前を小山田出羽守信有。後ろに控えている少年二人は息子の越中守信有と越前守信茂だ。相模との国境に面する要害・岩殿城の城主で晴信に一番最初に味方した豪族の一つ、小山田氏の当主だ。
「ほう、珍しいな。」
晴信が驚くのも無理がなかった。この出羽守信有は常日頃から「城攻めは性に合わない。野戦で功名を立ててこそ・・・・。」という根っからの野戦武将だ。
「驚きのことと存じますが、私の策ではございません。ここに居りませぬ穴山殿から預かった策にて・・。」
「玄蕃（げんば）から？」
晴信の従姉妹に当たる穴山家当主・穴山玄蕃頭信君は陣には居らず躑躅ヶ崎館の修復と先だっての戦いにおける被害を計算している。
「はい。お聞きくださいますか？」
「かまわぬ。続けよ。」
晴信からの了承を得ると頭をあげて説明を始める出羽守信有。
「現在私の旗下に穴山の金堀衆がございます。それをもってモグラのごとく地下から奇襲をしてはいかがかと・・・。」
そう意見すると豪族の一人から横槍が入る。
「そのような時間がかかる上に穴を掘ったところで中に入れる人数はたかが知れておる。そのような危険が大きい策は認められん！！」
「まだ某（それがし）は説明を終えておりませんが・・・、晴信様・・・わかりました。つづけまする。」
晴信は豪族に下がるように命じる。不服そうに下がる豪族を見て説明を続ける出羽守信有。
「そのまま掘り続け城の真下に行く必要はございません。正面に掘り続けある程度進んだところで山の斜面に沿る様に掘るのございます。そのまま――」

「――斜面を崩すように火薬で崩すのであろう。」
あたしも同じことを考えていたといわんばかりに言葉をつなげる晴信。それをきいて少しばかり驚く出羽守信有。
「玄蕃が駿河の今川から火薬を仕入れていたように、あたしも相模の北条から輸入していたんだ。それで？」
「はい。そして山崩れをおこし防御と城壁が開いた逆側に兵を伏せ攻めあがります。城壁が崩れ敵が入り込みやすくなったとあれば敵も逃げ出すかその崩れた部分を塞ごうとするはずでございます。ただ・・少々問題が・・」
「そのモグラを行うのに父上の邪魔が入る上に時間がかかれば信濃の援軍という名を借りた侵攻軍がくる。といいたいわけだな。」
「そのとおりでございます。」
「そのあたりはあたしが考えてくれてある。遠慮なく行うといい。」
「かしこまりました。では早速明朝から・・・。」
頭を下げると陣から出て行き自軍の場所に戻る小山田親子。
「聞いたとおりである。明朝からお前たちは小山田隊を守ることだ。良いな。」
「「はは っ ! ! 」」
「「「「・・・・はっ。」」」」
あからさまに不満そうな顔をする豪族たちが多いが、それを流して作戦を開始することにした晴信だった。
「典厩、勘助。」
「「はっ」」
「あたしが命令したとおりに行動すること。・・・・失敗は許さぬ。
すばやく眼前に現れる二人に命令を下すと晴信は自分の陣に帰っていった。

「やれや～れ。やっぱりなれないな。」
陣に戻るとゴロリと兜を放り投げてねっころがる晴信。
「そう、お言いになさいますな晴信様。あなたは天下を取るといったではありませぬか。」
「げっ、勘助。」
「げっ。とは何です。まぁ、いいでしょう。大体勘も態度も戻ってまいったようでございますな。」
「わかっているよ。天下一の大名、そして武将になってやるよ。」
「拙者もこのようなみすぼらしい老いぼれのために一命をかけてくださる晴信様に命をかけますれば。」
深々と頭を下げ感謝の意を伝える勘助に手を振り「よせよせ。」という晴信。
「おまえのことは親代わりだと思っているんだ。爺たちはあくまで爺でしかないが、お前は親身になっていろいろ教えてくれたからな。・・・天下を取るまで死ぬんじゃないぞ。勘助。戦に戦を重ねて、内政に内政を重ねて二つとない大名になってやるよ。」
「無論にございます。なにせはじめてあったときに某は『天下を取らせてやる』と申しましたからな。では失礼を。」
（壊すことと、作ることの大きく違う二面性に才能があるものを見かけで判断しないこの人間性。必ずこの恩を返し天下一の将にしてみせる。）
九州の果てから蝦夷地までを巡りめぐり人を見てきた勘助だが見栄えが良くない上に病気で目も片方すしなったため損を続ける人生だったが六十を過ぎ甲斐国で行き倒れていたところを勝千代に助けられてから彼女の忠臣になり天下を取らせることだけが生きがいになっていた。自身の部隊に戻ると一人の女性を呼んだ。
「望月よ。かの御仁は？」
典厩信繁の部下であり忍者でもある望月八千代信永。彼女は勘助の命を極秘に受けて典厩信繁こと三条義信を伺っていた。

「そうか。そのまま続けよ。」
「わかったのじゃ。」
影のように消える八千代。典厩の陣に戻ったのだろう。
「・・・・・・」
（いくら天命を知り助け導く者といえ、自身の弟の名を与え、厚遇を重ねる少年、いや青年か。天命を壊す者も現れるとある。いくら有能で善良であっても晴信様の害悪になるようならば・・・・）
大げさだが人の生き方・才能を見抜く力を持ち陰陽道にも通じる勘助は味方を装いつつ。いや、味方でありながら三条義信のことを警戒していた。もしものときは斬って捨てるほどに。

「おう、お疲れ。勝千代。」
「姉上。」
勘助と入れ違うように義信と孫六が入ってくる。
「ん。」
「見事にだらけちまって・・・。」
「仕方ないだろう。肩がこるんだよ。まったく・・、まだまだ切り替えができてないんだろうな。孫六、ありがとうな～。」
ゴロゴロ動く勝千代に羽織をかける孫六。本当に良くできた妹である。
「姉上も義信さんの言うとおりあまり陣中でそのような態度はやめたほうがいいですよ。誰が来るかわかりませんから。」
「はいは～い。」
寝転がりながら力なく手を振るだけの勝千代。どうも明日の戦に柄にもなく緊張しているらしい。
父親のことになると先日の躑躅ヶ崎での一件のようになることがあるように鬼門というか、よほど抑圧されてきたのだろう。ほかの面々には物怖じすることを知らない人間がここまで感情や行動をコン

トロールできないのはどうかと思い複雑な感情を浮かべる義信。
「なに難しい顔をしてるんだよ、義信。そんな顔をしているぐらいなら疲れているあたしの肩を揉み解すという崇高な仕事をしろ～。あ、孫六。あとで白湯を用意しておいてくれ。三人で戦が始まるまでゆっくりしてような。」
「はいはい。わかりましたよ。勝千代様。」
「わかりました。陣中ですので大したアテはありませんが用意しますよ。姉上。」
ぐったりしている勝千代に激痛マッサージを行うため近づく義信と陣を出て食料の中から食べ物を用意する孫六だった。
明日は命がけの親子喧嘩の開始日だ。

城攻め前日・後（後書き）

開始日といっても決着はまだですけどね。なんだか寝不足と疲れでテンションがジェットコースター気味です。勉強で新田次郎の武田信玄とさいとう・たかをの二作を読み返している作者です。

要塞山攻略戦・前（前書き）

親友に進められてハーツオブアイアンというゲームを買ったが日本のものと勝手が違う上に説明書が説明になっていないため四苦八苦で練習中。そいつが言うには二週間やったら覚えるとのことだが無理っぽい。

要塞山攻略戦・前

「さあさあ、準備をおこたるでないぞ！！」
パンパンと手をたたき足軽と農兵を叱咤する典厩信繁。典厩の前には合計二百の兵がいる。無論自分だけの兵ではなく大半が小山田と武田晴信本隊からの借り物だ。一人一人が縄と丸太を一本ずつ持っている。
「典厩様。用意が整いました。」
「丸太隊を含む工作隊に護衛部隊も仰せのとおりに用意いたしました。」
「偵察隊も準備ができておるぞ。」
上から工藤源左衛門繁長、三枝宗吾昌貞、望月八千代信永。
「よし！われら典厩隊は東の部分を受け持つ。西にいる先発の山本・穴山・小山田・板垣隊八百五十名、南にいる次鋒の甘利・横田・工藤（繁長の兄・長門守昌佑）・小幡隊九百七十名に続く中堅だ。われらが敵が攻めにくくこちらも攻めにくいとはいえ兵が一番少ない。気を引き締めていけ。」
「「「「「おう！！」」」」」
典厩隊を含めて東を任された部隊の兵数は七百名。東側は斜面が険しく行動が制限されるとはいえ兵数が一番少なく一点突破されやすいことに変わりはない。
「典厩殿。このたびは軍監・寄騎として参りました。よろしくお願いいたします。」
脇に現れて頭を下げるのは小山田氏の嫡男・小山田越中守信有。通称を弥三郎という。昨日あったばかりだが年が同じということもあり典厩も気軽に話せる同等の同輩として付き合うようになった。馬が合うというのはこういうことだろう。関係ないが、ちなみに父親も爺さんも曽祖父もその先代も信有という名前だ。
「弥三郎殿。こちらこそよろしくお願いいたします。」

こちらも頭を下げて感謝をしめす典厩。この弥三郎をはじめとして同軍で典厩の指揮下に入るのは教来石民部景政・原美濃守虎胤・真田弾正幸隆・秋山伯耆守虎繁の四名。そして北に配備されるの武田晴信の本隊三千。対する信虎軍は総数二千強と数では圧倒している上に甲斐国オールスターなこちらの将たちがいる。しかし相手は長年甲斐国を実力で従えて来たうえに甲斐国一・関東有数の要塞が相手だ。不覚を取る可能性がないわけがない。

（なにせこちらは連合に近いうえに当主である勝千代をなめているやつもいるからな。・・・・・まったく。）

「真田殿と原殿も用意が済んだとのことです。」

「ん？秋山殿と民部は？」

「それが若輩の、さらに新参者に挨拶するいわれはない。と、申しておりますので皆目わかりません。民部殿は寝ております。」

「民部殿はともかく。あ～・・・・秋山殿は指示には従わないと？」

肩をすくめる弥三郎。どうやらそうらしい。

「・・・・まぁ、いいや。弥三郎殿。もう一度秋山殿のところに伝言を頼まれてくれないか？」

「かまいませんが。・・・なんと？」

「お手前の手勢はお好きなようにお動きください。制限はいたしませぬ。と。」

驚いたような顔をするが納得して伝えにいく弥三郎。

（やれやれ、まったく秋山信友・・・いや、虎繁か。猛将かつ有能で一国の将としては非の打ち所がないが・・・・認めない人間には立場があっても従わないとは・・・・。）

正史の勝頼も苦労しただろうな。と、思ってしまう典厩だった。

「典厩殿。すこしよろしいか？」

「何でございましょうか？弾正殿。」

「そのような顔をするとはつれないではないか。・・・・ククク。」

相変わらず平時というか擬態というか。あいかわらずつかみ様のない薄暗い笑みを浮かべる真田弾正幸隆。

「で？」
相手にするだけ疲れるのでさっさと用件を聞く典厩。
「前線からオレを下げた上で兵を五十ほど貸してはくれぬか？」
「は？！な、何を言ってんだ。あんたは旗下にいるとはいえ原美濃が前線指揮を執ることになっているから、中衛を任せてもらう。と言ったじゃねぇか。」
「たしかに・・・たしかにいった。だが、機を見て動かねば戦ではすべてを失う。秋山の猛牛が従わぬうえに動きがわからないとなれば・・・誰かがその役目を引き継がねばならん。」
「それであんたがやるってのか？たった五十でか？」
「狂気の沙汰ほど面白い。」
「頭が痛くなってきた。・・・で、それだけじゃないんだろう？」
「ククク・・・。よくわかっているな。ならば五十名にあるものをくれぬか？」
耳元でささやくと典厩は、はいはい。と承った。そうして後ろを向いて去ろうとする幸隆。数歩進んで何かを思い出したようにこちらを向いて
「オレがいなくなった真田党を率いてもらうのは喜兵衛だ。しっかりたのむぞ。大将さん。クックック・・。」
「てめー！！」
大声で叫んでしまったので周りがこちらを驚いたように見る。恥ずかしくなり民部のところに向かう。

「ん～～？？あ、あ～・・・。」
ゴロリと陣で寝ている教来石民部を起こす典厩。まわりを見ても民部が寝ているのは当たり前のようだった。
「な～あ～に～。」
「準備はできたか？」

「んん～・・・。ね～・・・・む～・・・。」
うんうんとうなずく民部だがうなずきながら寝ることしか考えていないようだ。
「わかった。準備はいいんだな。」
もう一度フラフラしながらうなずく民部。これがのちの馬場美濃守とわかっていなければ典厩、いや、義信とてこうもゆったり構えていられないだろう。
「ぐ～・・・ぐ～・・・」
もう熟睡している民部に羽織をかけて陣から出る典厩。そのまま真田のところに向かった。
（いきたくね～な～。）
あの真田喜兵衛昌幸の殺人的な視線を思い出すたび足取りが重くなっていく。そして数分の距離を倍の時間をかけて陣につく。
「あ、典厩殿。お待ちしておりました。どうぞ、どうぞ。」
陣に入ると同時に喜兵衛昌幸が笑顔でやってきて導いてくれる。どうやら取り越し苦労かと思ったが昌幸の横を通ると同時に怒気と殺気を当てられた上に耳元で
「いつか殺す。」
といわれれば気が重くなっていった。ちなみに準備は文句がつけられないほど完璧だった。

「さていきますか。」
バキバキと手や指の関節を伸ばし、足先を回して緊張を解きほぐす。手甲と脚甲を着け、刀を抜いて日にかざして刃こぼれとねじれがないか確認する。最後に厚手の打掛をはおって準備を終える。
「典厩隊。小山田隊と協力して作戦通りに作業を行う。前線は原美濃どのと教来石どのに任せ、護衛は真田隊が何とかしてくれる。われらはゆったりと作ればいい。よいな。」

「「「「「「はっ！！」」」」」」
気負った雰囲気がなくなり震えが止まり笑みが浮かぶ典厩隊五十名。
「よしよし。いくぞ。」
馬に乗れない典厩にあわせて徒歩で目的地に向かう典厩隊。それと前後するように狼煙（のろし）が上がり戦の準備が終わったことが本隊に伝えられる。そしてちょうど三十分たち勝千代・・・いや、晴信から大音声が放たれる
「かかれ～い！！！」
びりびりと大気を震わせて身が引き締まるような掛け声が出た後、要塞山を囲むようにしていた晴信軍が戦を始めた。

「「「「「「「「「うぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」」」」」」」」」

「飛んで火にいる夏の虫とでも言うのか・・・・・・。晴信のようなうつけに手を貸しよって・・・身の程を教えてくれるわ！！！」
バキリと鉄製の火箸をねじ切る信虎。そして皆々に下知をだす。
「室住豊後よ。兵二百を率いて正門から南方の有象無象を蹴散らしてまいれ。」
「はっ！ただちに！！」
「石黒将監、石黒五郎兵衛！！貴様らは弓隊百ずつを率い各方面に矢数を気にせずうちまくれい！！」
「「御意に！！」」
「内藤修理虎資！！貴様は槍足軽三百を率いて決して攻めず盾を置き、矢や礫を防ぎ攻め手を防ぐことのみ考えよ。敵が攻めてきたら、いなし、防ぎ、少しずつ敵兵を削ることのみにせよ。もしものときは太鼓をたたくがよい。追加の援兵として油川刑部信守を控えてお

く。」

「「仰せのとおりに！！」」

「加賀美虎光、逸見信親、浅利虎在、跡部信秋、曽根虎盛、長坂光堅、跡部信秋、金丸虎嗣、油川信守、今井信元、加藤昌頼、荻原昌勝。貴様らに対して細かいことは言わぬ。一隊兵八十騎兵五を率いて存分に暴れよ！！」

「「「「「「はは っ！！！」」」」」」

腰から刀を引き抜き槍を脇に構えて信虎が最後に一言。

「残りはわしに続け！！西の雑魚どもを蹴散らし南、東と蹴散らし最後に晴信をこの国から追い出してやろう！！」

守備兵を五十だけ残して全軍突撃という篭城という選択ではなく、敵が集まったところを一網打尽する作戦を行う信虎軍だ。

「て、敵が攻めてまいったと！！」

思わず立ち上がり大声を出してしまったがすぐさま首を振って感情を戻す勝千代。

「それで詳細は！？」

「はっ！！西方と東方は五分で持ちこたえており作業のほうも遅々ながら進んでおりますが南方は六分四分で押されておりますゆえ作業斑にも被害が出ております。北方はひどい有様で、統制が執れているないのか、取れているのかわからぬ面妖な動きをする部隊に翻弄され被害も増える一方でございます。」

その報告を聞くと勝千代はギリギリと歯をかみ締める。そして相手の陣容を数名の物見から詳細を聞く。報告を聞き軍配で口元を隠しながら考えをまとめると軍配を投げ捨て愛用の斧を持ち部下に命令を出す。

「飯富よ。おぬしら赤備えと馬廻りの半数を率いて北方の部隊を足止め、そして一つずつ虱潰しで潰していくこと。特に加藤昌頼と荻

原昌勝、浅利虎在、加賀美虎光の四名には特に気を張って戦うことだ。あやつらは武勇と小規模戦闘と得意としておる。甘利や板垣の爺より強いゆえな。」

「ええ！！・・・し、しつれいしました。ご無礼を。」

大声を出してしまった飯富三郎兵衛昌景だがすぐさま非礼をわびた。

「驚くのもむりはない。甲斐国といえば板垣、甘利、駒井の三名が勇名をはせているが、この四名はこと戦、特に戦術級では恐ろしい相手だ。父上は小規模の戦を繰り返してこちらの作戦を潰してしまうつもりだろう。」

斧を思い切り振り下ろして感情を発散させる。そして勝千代から晴信になり改めて命令を出す。

「飯富よ！！命令は先ほどのとおりだ。大まかのことしか言わぬ！！」

「「はっ！！」」

「伝令！！」

数名の足自慢の伝令が現れる。

「西の山本と板垣には戦況の現状維持を厳命。穴山には作業の続行。小山田自慢の投石部隊にどんな方法でもかまわぬから敵将を捕らえるか討ち取れと伝えよ。」

「はっ！！」

「南には多田淡路守に私の馬廻り半数を率いて救援に向かえと伝えよ。そして後方部隊の八分を甘利の爺に渡し指揮を執るように伝え、そのまま西の小山田隊と合流して城に対して回るように攻撃をせよ。父上が出ているはずだが全軍に・・・いや、教来石隊と典厩隊を合流させて対応させよ。東方は大規模な戦闘ができる場所は少ない。父上もわかっておるはずだから戦線の維持と迎撃しか行わないはずだ。」

「「仰せのままに！！」」

「そして残りの二分の兵はあたしが直接率いて戦況を掻き乱す伏兵を叩き潰す！！！全軍に総攻撃を行うのではない。あくまで敵を追

い返し敵味方の被害を減らすように厳命せよ!!!」
「て、敵もでございますか?」
「そうだ!!このまま両倒れに近い状況になれば間違いなく信濃の豪族・大名(おおまぬけ)が攻めてくるに違いない。最悪の場合には上杉の管領(おほども)がくるであろう。それに対して後々のことも考えなければいけぬ!!」
「わかりました!!」
すべての伝令が出発した。こうして戦場は味噌樽を叩き割ったように混戦模様を呈していった。

「伝令です!!典厩さまは教来石さまと合流して信虎さまの隊を発見し対応せよとのご命令です。」
「対応とおっしゃられたのか?」
確認を取ると伝令は確かにと念を入れる。
「わかった。おぬしは後方に下がり作業班と合流し回りに目を配っていてくれ。」
「かしこまりつかまつった。」
伝令のなかでも有能なのだろう健脚をいかして混戦の敵味方を避けて弓矢を避けて陣に戻っていった。
「源左衛門!!宗吾!!八千代!!」
「「「はっ!!」」」
「聞いたとおりだ。われわれは作業班を除く典厩隊五十と教来石隊百二十の計二百弱で信虎隊に対応する。」
その言葉を聴いて三枝宗吾昌貞が質問する。
「ま、まさか倒すのですか?」
「いや、あくまで対応するだけだ。」
「対応でございますか?」
要領を得ない宗吾に源左衛門が説明する。
「つまり柔軟に敵に対応して相手の動きにあわせて行動するということです。まぁ、早い話が行き当たりばったりに行動する。もっと

早く言えば策がないので全部任せる。といったところでしょう。」
「おいおい。無策はひどいんじゃないかな?」
「こ、これは失礼を。」
「まぁ、いいさ。八千代。おぬしには今回は動き詰めてもらうぞ。」
「わかっておるのじゃ。まぁ、これも仕事じゃからな。なにをすればよいのじゃ?」
「簡単に言えば伝言番をしてもらう。言うことなすことをすべて民部殿と晴信様、勘助殿に伝えるのだ。そうさな、将棋のこまが動くのを上から見るようにわかったことをすべて伝えるのだ。わかったか?」
「む、妾は子供ではないのじゃよ。まかせてたもれよ!!」
ドンと胸をたたく八千代に頼もしさを感じてしまう典厩だった。
「さてさて、民部殿も来たことだ。行くかね。」
(やれやれ、こんなときに幸隆殿と秋山殿はどこで油を売っているのやら。)
ガンガンと手甲をぶつける典厩だった。

要塞山攻略戦・前（後書き）

・・・・・前書きが後書きみたいになってしまった。エラーが多いな。一回スキャンして直してみるか。がんばって更新していきましょうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3434x/

武田信玄の欲望

2011年11月10日08時16分発行